

19
1
19

館書圖京東				
一	一	一	一	一
九	〇	〇	〇	〇
冊	號	架	函	類

淡路國名所圖繪

卷之三

從二位侯爵蜂須賀茂韶君題字
 故從二位慈光寺實仲卿序文
 故 曉晴翁鐘成著
 故 松川半山翁畫
 故 浦川公左畫圖

淡路國名所圖會



藻文堂發兌

淡路國名所圖會三之卷目錄

- | | | | |
|-------|-------|-------|--------|
| 養宜松原 | 國府遺蹟 | 國司館古趾 | 惠美須社 |
| 法藏寺 | 觀音堂 | 市場舊趾 | 野口郡趾 |
| 麻績堂 | 慈恩寺 | 國學古趾 | 木偶持座 |
| 傀儡師傳 | 總社 | 野邊宮 | 丘松 |
| 守戸古趾 | 宝積寺 | 榎列郷遺趾 | 屯倉故趾 |
| 三宅神社 | 近石屋社 | 威光寺 | 鎌倉觀音 |
| 天浮橋 | 葦原 | 種井 | 帝釋天社 |
| 牛頭天王社 | 野上稻荷祠 | 府中 | 御料之井 |
| 玉章之井 | 府中八幡宮 | 賢光寺 | 真應寺 |
| 觀世堂 | 阿弥陀堂 | 藥師堂 | 榎並地藏堂 |
| 經墳 | 嵐雪碑 | 戒壇藥師堂 | 山王権現社 |
| 栢田八幡宮 | 淨雲寺 | 神稻郷遺趾 | 地頭役所古趾 |

從二位侯爵蜂須賀茂韶君題字
 故從二位慈光寺實仲卿序文
 故 曉晴翁鐘成著
 故 松川半山翁画
 故 浦川公左畫圖

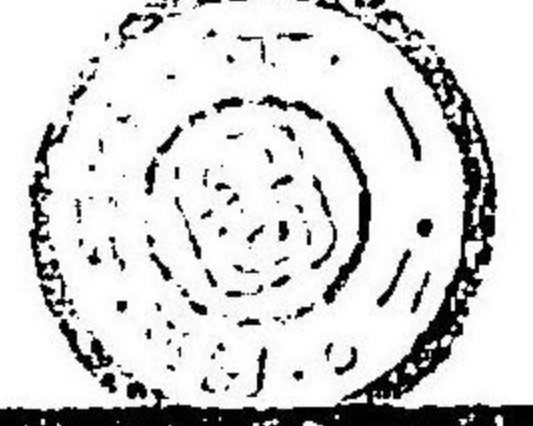
淡路國名所會

藻文堂發兌



淡路國名所圖會三之卷目錄

- | | | | |
|-------|-------|-------|--------|
| 養宜松原 | 國府遺蹟 | 國司館古趾 | 惠美須社 |
| 法藏寺 | 觀音堂 | 市場舊趾 | 野口邸趾 |
| 麻績堂 | 慈恩寺 | 國學古趾 | 木偶標座 |
| 傀儡師傳 | 總社 | 野邊宮 | 丘松 |
| 守戸古趾 | 宝積寺 | 榎列郷遺趾 | 屯倉故趾 |
| 三宅神社 | 近石屋社 | 威光寺 | 鎌倉觀音 |
| 天浮橋 | 葦原 | 種井 | 帝釋天社 |
| 牛頭天王社 | 野上稻荷祠 | 府中 | 御料之井 |
| 玉章之井 | 府中八幡宮 | 賢光寺 | 真應寺 |
| 觀世堂 | 阿弥陀堂 | 藥師堂 | 榎並地藏堂 |
| 經墳 | 嵐雪碑 | 戒壇藥師堂 | 山王推現社 |
| 栢田八幡宮 | 淨雲寺 | 神稻郷遺趾 | 地頭役所古趾 |



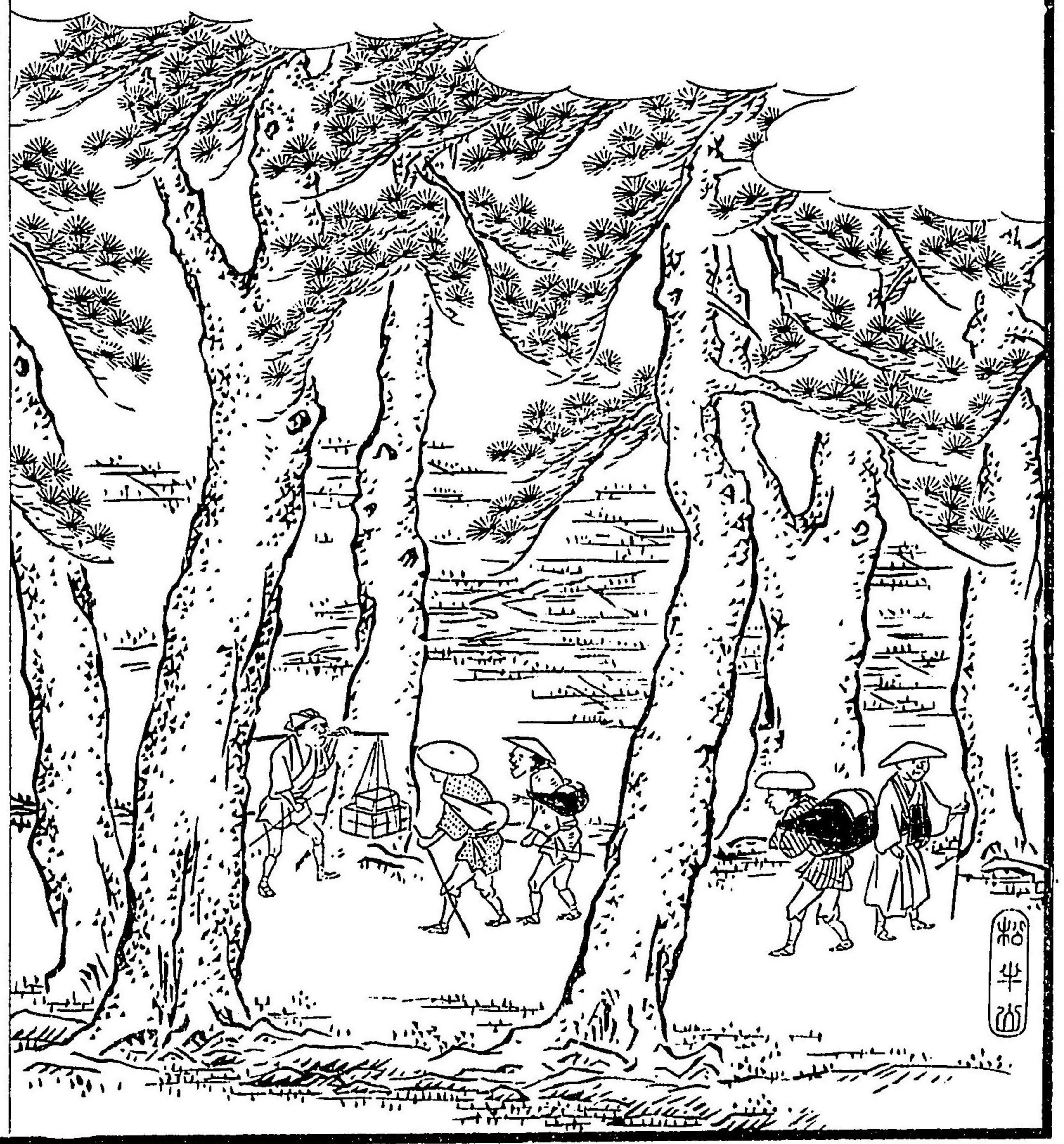
神代寺	經所	長月觀音堂	關伽瀨清水
泣宮八幡	國衙旧地	國衙溪	久度神社
延命寺	辻御堂廢趾	牛内若宮	讓兼權現鳥居
鬼石	八疊敷岩	鳥帽子岩	龍ヶ丘
栗原古城	中河古城	若一權現祠	浦壁池
八幡宮	讓兼山	諭鶴羽權現社	黒岩
地藏寺	白崎溪	明雲潛居古趾	下灘
總溪	吉野溪	藤野浦	油谷溪
拂溪	貞觀寺	沼島	流河
沼島八幡宮	神宮寺	西光寺	蓮光寺
觀音堂	武島古城	義植將軍古趾	藥師堂
殿飛	狸々礁	酒價畠	平礁
上立神	下立神	屏風岩	名産温石

大寺森	天神祠	御息所腰懸石	泰武文忠死
武島女郎魚	清水	阿萬郷遺趾	本莊溪
龜岡山八幡宮	葛原薬師堂	阿萬古城	西村川東村川
茅草嶺	潮寄	櫻井清水	清水薬師
光明寺	田尻寄	葦生の濱吹上	穀内山
伊賀野陶器竈	筒井清水	牛頭天王祠	薬王寺
福井河	大日堂	鍛冶宗長遺跡	古城趾
西山古城	賀集氏第地趾	萬福寺	當麻氏御墓
賀集郷遺趾	賀集河	廢帝山陵	冷路天皇社
賀集古城	同古廓趾	賀集山八幡宮	八幡橋
古城蹟	南邊寺		

ヤギ 八木の松原ハ洲木
 岩屋等より福良ハ
 つる官道ゆく大
 樹の老松左右列マ
 光景最上ノ間
 凡五十余町並木の絶
 間なく実不國中第
 一の往還あり

秋日郊行一聯
 田開萬頃三原郡
 松簇千林八木村

睦齋



睦齋

國府遺蹟

三原郡十一箇所村三條村市村ホとのふつへの國府の旧地あり

和名抄淡路國府在三原郡

市村の中央より西の方三條村に隣りて國衙町といふ所ありて伎藝渡世の家廿五六戸軒を

國司館古趾 市村の中央より西の方三條村に隣りて國衙町といふ所ありて伎藝渡世の家廿五六戸軒を

孫矢口足尼定賜國造

皇極天皇の御宇國造と改りて國司と文武天皇の御宇小至りて國司

と國守と云々 姓名國史ニ委一 當州ハ國府と此三原郡ハ置國司館と建

惠美須社

同村の北ニあり例年八月九日十二月廿七日神事あり社傍法藏寺

相傳聖德太子始めりて市と立りて一時蛭兒尊ハ商賣と守ると以てこれと

友直云此地既ハ當國市立の盪觴

明曆二年社頭悉く回祿ホカを燒失ハ今傳方町の神影の版木あり聖德太

法藏寺

社頭の東傍ニあり福智山下号ハ本尊阿弥陀佛長三尺許左右ニ觀音勢至と安ん寺中ニ地藏堂あり

禁制

○檀紙一々堅二尺五寸横一尺六寸余

一 為子軍勢弘妨狼藉之事

○筑前守ハ羽柴秀吉ハ 天正三年冬信長羽柴藤吉と以て

子の自作といふものハ此地ハ於て毎月六齋日ハ國中の賈人會とて市と立

る物と商ふ世ハ國府の市と稱ハ市村の名も是より出るあり然と延宝

八年金銀米錢と以て品物と商ふと停止し楮銀と以て商ふより始りて

より州本の市坊ハ市立と究むと今ハ七月十三日十二月廿八日兩度の市

の存せり七月ハ盆供の品々と商ハ極月ハ年始の飾物と商ハ近里の人々

輻湊し餘りて此市立ハ襪災と稱ハ養と賣りの者一厄年の者これと求

めり身體と撫り余後これと小巷ニ捨るを風とハ市饒といふて昔より有

と買ハむ有

安徳 御五十日也早且市饒

一 放火之事

一 比在而於根後と一淺切之事

右條々堅令停山早若透犯々

輩在之老速可處嚴科

老や仍下細也件

天正九年十月日 筑前守 爲

筑前守ニ任ル同九年秀吉播州
姫路の城と築く事本朝通紀見

按ニ同年當國と征する時下され

禁制書あり

友直云保内六村と市村三条村善光寺村小井村浦壁村壇村と一説云
浦壁と除き久保村と入る壇久保と云ハ隣里の社家村其名ありと云
保内ハ庄内と云ふごとく貞永式目小郡郷庄保と云今ハ郡村の二と云
足ヲ畢ぬ又唐武徳の制四隣と保と云五十家と都保と云云庄と
保と云ふ其例又王肅家語注曰保ハ縣邑の小城也云云こやハ小家

三ノ四

也小家共今在所中と云ふが如く孝徳紀三年四月造戸籍 凡戸皆

五家相保一人爲長云云元明紀和銅四年凡私鑄錢者斬 五保知而

不告者與同罪云云 拾芥抄七十二坊三百歩

觀音堂 同西市場の傍にあり十二面の尊像と安れ 宝庫役氏堂庚申塚宝篋塔六地藏

皆觀音堂の傍にあり

市場旧趾 我社の西傍にあり古く國府の市の跡にあり毎月三日八日十三日十八日廿三日廿六日六度マ

野口耶趾 同村にあり野口町との北の方と内堀といふ南と外堀といふ今理とて地名のなり

麻績堂 三條村にあり一説ニ總社のなれば産穢の者なりはれも避く當村の麻績堂は産育せぬこと

兼徳録云麻績堂ハ國中の婦人會聚する所あり云云

慈恩寺 同村にあり真言宗 西光寺 同村にあり真言宗清涼山云

鏗鐘銘記云

淡州三原郡三条村清冷山西光寺應永十二酉年十月八日敬白

于時正保五年正月十五日敬白

應永ハ足利四代義持將軍の治世ニ正保ハ此鐘と地中より穿ち

得し時の副銘としり 冷の字今涼ニ作す

國學古趾

同村ニ學が原と云ふ所あり是學校の跡ありといふ十一明神鳥居の東ニ北の方と

古ハ學校と國府小立ニ其國司と云ふ監せむ六十二國二島ヲ靱島小

島ノ皆まて皆まて博士權博士明法博士と云ふ年秩と云ふ交替せり其學

生ノ數ハ國小より多し少り淡路國ハ二十人あり經生傳生醫生陰陽生

曆算生と云ひて六経と教授し律令と説く國學ニ皆勸學田あり又

孔子廟と云ひて春秋の二仲ヲ釋奠あり天長七年淡路等ノ博士醫師と

補せられし日本後紀より醫官も國學の地ニ有し云々 常盤草

木偶操座

同村にあり世人淡路座といふ凡其座本といふ者廿軒余もあらず就中上村源之丞あり

道董家傳曰蛭兒神滄溟小漂ふて多年ありて和田の崎と光神と

あけり時ニ渙人ありて邑君と号し百太夫と称し姓ハ藤原名ハ正清と

り海上ハ兒童あり貌神の如し託宣と云く我ハ蛭兒なり我宮殿は汝

海濱小假宮と立すと即ち西宮我三郎殿と云れりありて道董坊といふ者

ありて神小給仕と云く神意小合へり道董身没後ハ神と慰むる者な

き故ハ風浪起りて海陸とのれ大困りあり仍て百太夫此事と朝廷ニ奏

し勅と奉り道董ガ形と造り舞せられハ神よりこび給ひて海陸とも

小謚ふあり夫より百太夫ハ囃々と巡りて此術と云く衆神と云ふ

神慮と慰むると業とせり後ハ百太夫淡路國小止り此三條村小住

其業と傳え来るとあり

或云攝州西の宮戎社の辺り小三條と云ふ地あり此ありや百太夫の

住せり旧地也やあらん其旧名と云く此淡路小来りて三條と号す

あらしんうとも云

傳りて上古此地ニ道董坊と云ふ翁ありて大神小つて神慮と慰む奉る

傳りて上古此地ニ道董坊と云ふ翁ありて大神小つて神慮と慰む奉る

傳りて上古此地ニ道董坊と云ふ翁ありて大神小つて神慮と慰む奉る

傳りて上古此地ニ道董坊と云ふ翁ありて大神小つて神慮と慰む奉る

惠比須社
法蔵寺

推古天皇の朝に於て
六舟の市を立つ和州
三輪の市是始ありを
此地も亦一八國府の
市なりし所あるを以
て市村と号け今尚
市場の古跡あり



昔のいよほしめ
くよしにありて
とら市女の
声さかるとあり

何んんりてい
ありと
年の市
如水

あつちの面りら
百人とりの市
其西



木偶と造りて是とつゝ舞せしとぞ是世は傀儡師といふ者の盪觴之俗は木偶とてくの坊といひ木偶とつゝ入者とてく遣ひつゝ此道君坊のよと訛れりありト云

里老の傳説は往昔西宮小百太夫と言ひし木偶と携へ淡路へ來り此村の麻績堂へ長く寄宿あり時小此村の木偶師菊太夫ありの百太夫と伴ひ取り留るる内菊太夫が娘は契りて腹胎と然るに夫より幾程も無し百太夫の病歿は其胤の男子は菊太夫が家と嗣る血脈あり木偶師の業も連續り又百太夫が論旨と珍藏せしは是も菊太夫が手小渡りしとや後年小つら西の宮の傀儡と淡路の道薫坊と鬪争の事ありて京都の裁許小預りし命は云菊太夫の論旨と傳持されば弥淡路の道薫坊といふ本朝の最上と定められたりと云

總社

十一箇所村にあり十一明神といふ十一座の神あり其れは十一ヶ所村と号れし馬場長凡三丁半左右の機井木ありて花の頃ハ爛熳と光景美規

本社十一座 中央天照皇太神宮

列子云周穆王時巧人有偃師者為木人能歌舞王与盛姬觀之舞既終木人瞬目以手招王左右王怒欲殺偃師偃師懼壞之皆丹墨膠漆之所為也此疑傀儡之始矣



古額

隨身口掲書

當國總社十一大明神

昔の公卿方の書あり加茂直江翁の云書法小野道風に似たりと云

- | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|
| 左 | 伊弉諾尊 | 伊弉册尊 | 神功皇后 | 八幡太神 | 松尾明神 |
| 右 | 月讀尊 | 素戔尊 | 蛭兒尊 | 掃守明神 | 久斗明神 |

野邊宮

同總社の長一町をりニ在樹林繁茂の中ニ小祠有り。沿路廢帝とあるといひ、
此地も總社の界内あり。馬場南へ直ニ凡一町半をり、右左亦
坊舎の廢趾あり。祭正月廿三日

八月二十三日兩度あり

一説ニ廢帝沿路ニ配流し給ふ時國府の側あり、幽居す。一院の

跡あり、故ニ祠と立す。祭物あり。

一書云拾一箇所村廢帝勸請野守宮又大炊宮ト云

丘

同野辺の宮の東二百歩ニあり、少シ小高き丘ニ古松四五株あり、里人これと廢墳とつひて則ち
廢帝の陵と稱し、丘の長サ凡北向北の方ハ幅十四間、余南の方ハ漸ニ細シ

按ニ山陵の形も築ぐる先ハ殯葬し奉り、所ももつらん

天平宝字八年十月廢帝當國ニ遷幸あり、此時一院ハ幽居せしと續日本紀

小見方ハ正ニ此野辺宮の地あり、然るに翌天平神護元年十月崩

是ハ是ハ同所ニ葬り奉り、八年の後宝龜三年八月廢帝と改め

葬り給ひ、時今の賀集中村の天王の森ニ移り、此所ニ廢帝の

山陵とつるも故あるに、尤殯葬の趾あり、故ニ山陵の形ハ見へば

廢帝の崩る古趾あり、野辺の宮の
名ハ何と云々無常とて由也

山陵志曰和名鈔三原是國府所在府址今距洲本西南可三里曰

市村其中稱國司館址是也乃其西可三町有古墳在焉其方

北步森如也廢帝陵即此而其祠曰野田宮在傍焉

按ニ此時賀集の天王の森の山陵ありと定む、故里俗の言

傳ふるまくと奉り斯記され、寶龜三年改葬の後同九年三月勅

ま、沿路親王の墓と山陵と稱し、その先妣當麻氏の墓と御墓と稱す

べと近き所の百姓一戸小宛せし是と守ら、ひと續日本紀見へ、重

く尊ませ、あふり、おれ、び、う、や、斯、丘、の、松、の、如、き、あ、ら、う、あ、る、物、も、有、べ

く、尚、天、王、の、森、の、所、小、委、記、の

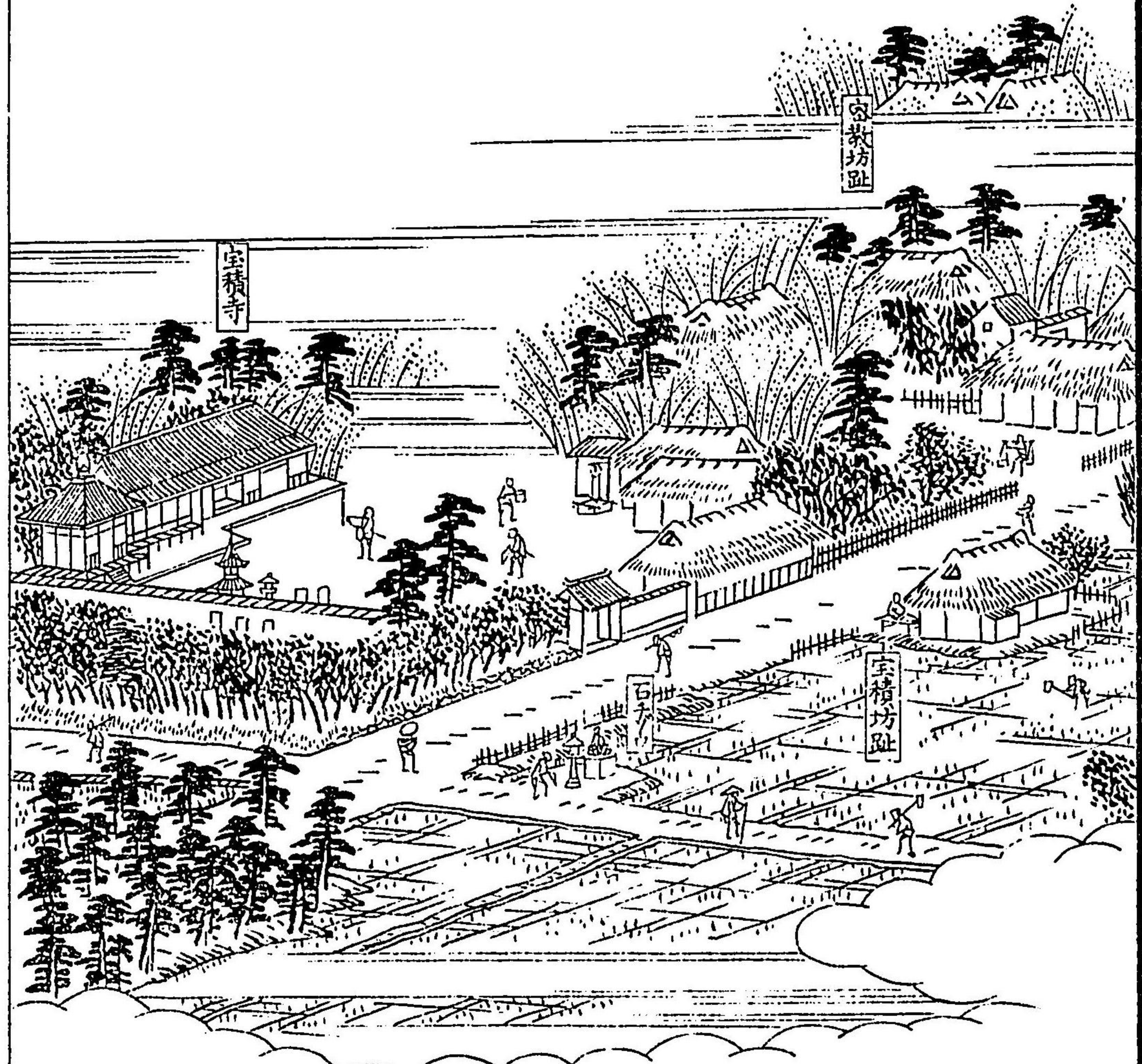
又野邊宮の小祠の中木像三昧あり、中央ニ祭る所唐冠とつ、き装

束の形勢あり、漢人の如し、里人これと廢帝の御像といひ、又左右ハ

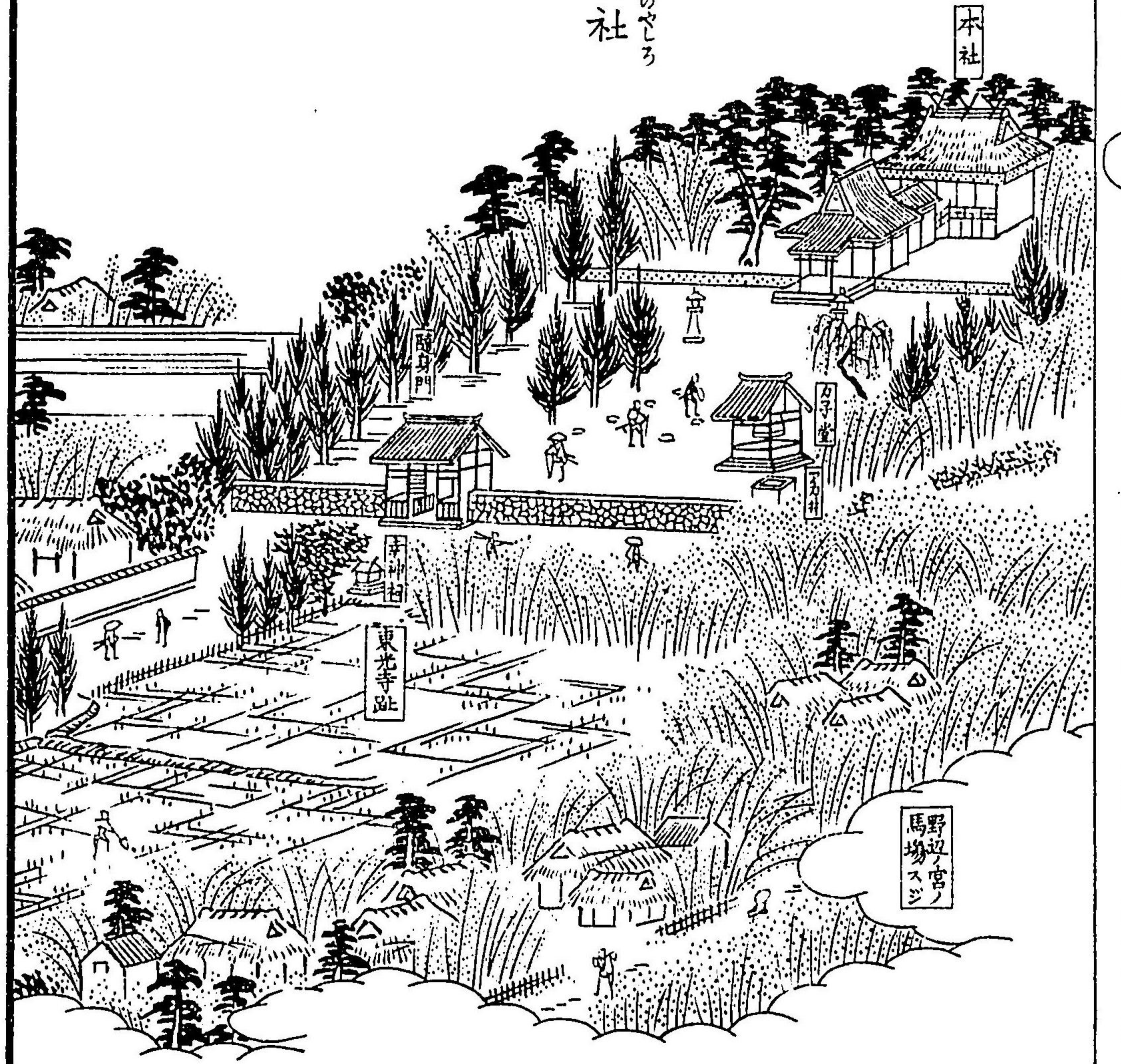
安さるハ二昧とのに佛像あり、觀音勢至あど、べき、う、た、づ、れ、も、古、物、あ、り

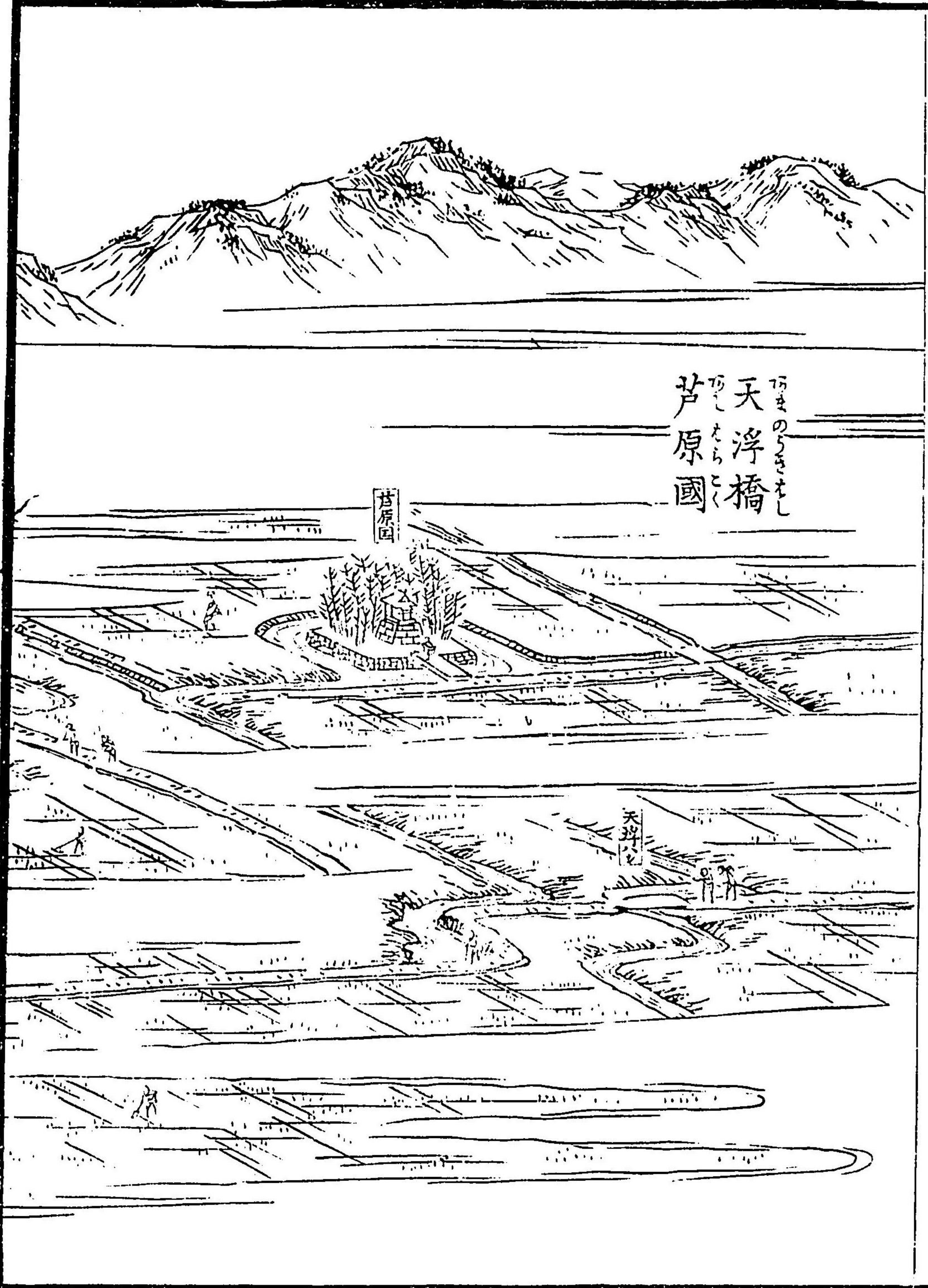
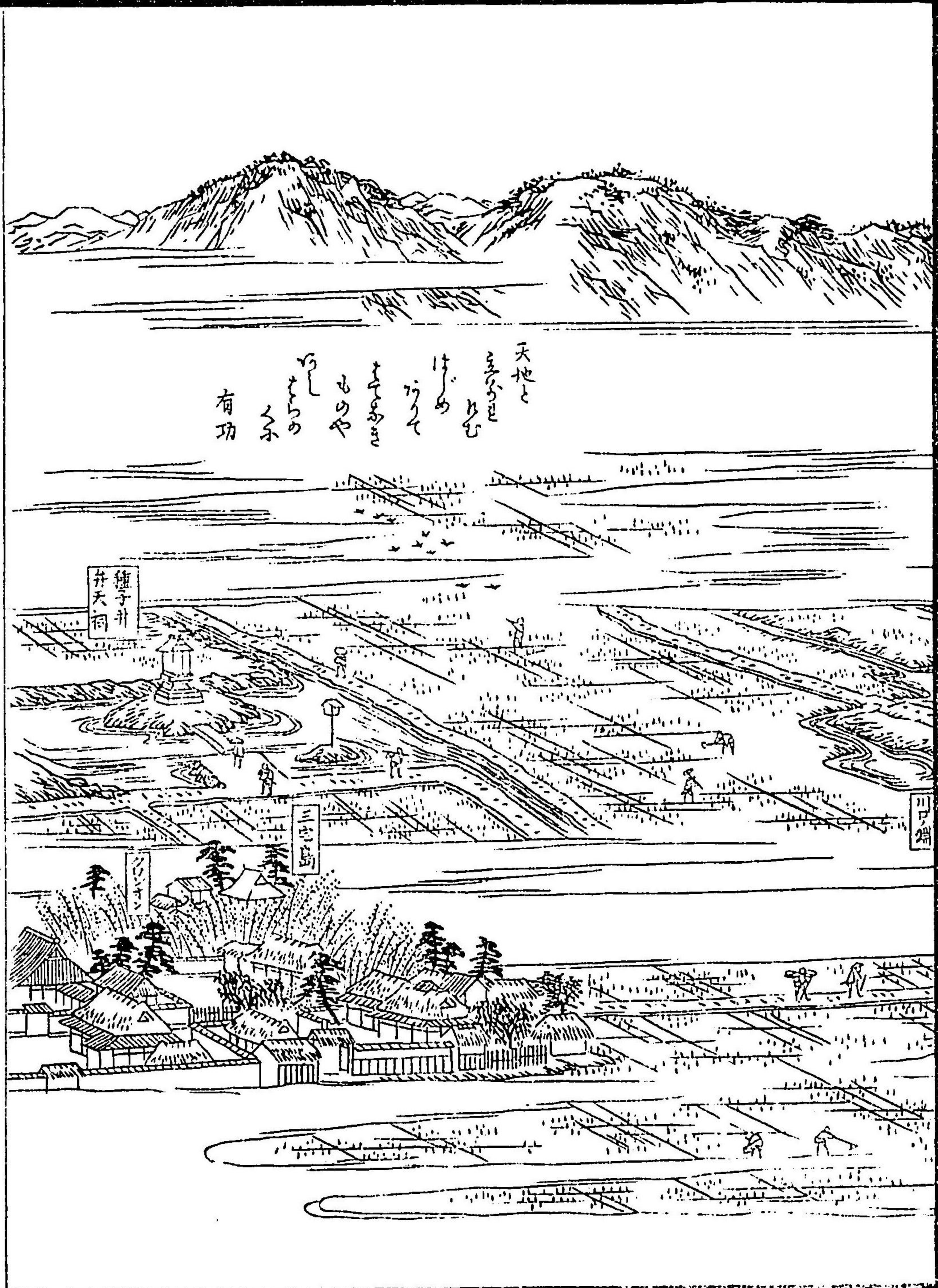
守戸古趾 同所の支村新在家ニあり、農家二十戸許あり、往古ハ菴の細工と生業と、今尚農業の
暇は箕と作り、諸村へひき、其農民と云々、按ニサキの轉語、守の畧

招もつてまゝ
 秋代まゆみ
 榊菜のくけ
 後拍原院
 千早坂
 神の家人
 世をへのもろしん
 民アヤ
 夕秋楽まき
 明るより



總社
 十一明神社
 じふいちめいじんじや
 本社





傳云昔當村より七十三人軍役より鎌倉に至り皆戦死し僅小安藤太夫新藤太夫といふ二人觀音の灵験より免れ飯小臨く此像をもち飯小堂小安置して尊信せりといふ又一説小往古鎌倉より長途を經て觀世音と御供し故郷小飯小に近隣の者は是と見し辛勞と賞美しし小終り其者と辛勞太夫と呼び安堵ししといひける者と安堵太夫と号せしと後小進藤安藤と文字と轉せしと云其是非詳あり

天浮橋

右同村の北より藤原の淵の流し南北の官道小長二尺余中一尺許の石橋といふ神代の古事より後人の名づけしあり

葦原

右同所の西あり畝号と中柱といふ凡五間四方より石垣と築き中より小祠と設け祭神國常立尊天照太神宮と合せあり正西石橋と祭の周廻に芦生し繁茂せり俗に芦原

種井

種井の寒水と林の芦原と去る三町より南の田間あり種つりのを浸せりゆへに俊成卿の春を種井ふたはと詠みし類ひありと云

相傳ふ神代

瑞穂の種と浸しそめり天の真井これあり

南北八間東西五間計の沼あり

中島あり中世辨財天の石祠と建前小石橋と架せり當國無双の清水あり四時更小増減あり

帝釋天社

或は日前の宮といひ威光寺の南あり本社帝釈天末社左の方摩醯首羅王右の方摩利支天と祭る例祭十一月六日同十八日

牛頭天王社

右同所の東あり祭神素盞烏尊

野神稻荷

天王森の巽あり例祭九月九日此祭祀と里俗稱し帝釈祭といふ村の事あり

祭日牛馬と畜人家の輪羊小頭あり亦十五歳未満の幼童帝釈天の社前より相撲と貞は是と國市の相撲又ハ牛童の相撲といふ頭家より稲束二束と稲荷へ神供する事恒例あり幼童ハ米一升元頭家へ持よりて集會は日相撲や餅を幼童小社内小集り居ると頭家より七度半の迎ひの使と遣は其度毎小幼童小種々悪口と吐といふも使者逆ふ事あり終りくと頭家小迎へ餐膳と出し宴席と催は合座のりの色々悪口と飯汁小と乱妨し食し餘食といふ外は入る我家へ持くと恒例あり

府中

小榎村ありナテ村村市村三条村あり國司館のありと故此地は府中の名の残しありと云

御料井

右同村田圃の中より水溜二間四方より水甚清し國司館あり料ふる故御料と云

玉章井

同村の西より水清冷あり

相傳ふひり男ひり女ひ懸想しるる空しく年を經ふり一時此井の水と
滴く玉章と書く送れる女承引く逢ぬるより期はあづくる云

府中八幡宮

右同村の東にあり總社の記に國府の八幡とある此社なるに祠官社僧許多あり

例祭正月十五日八月十四日駈馬相撲會あり大榎並村より神馬を献げ又十一月

十日神事あり春秋兩度の祭禮あり神輿馳道二町半を經り大鳥居の傍

まが渡御あり四月十五日夏終聽聞の産地子へ濁酒および柏葉と海苔神馬

草大豆等と盛て膳よと入餐する事あり最古雅なりと云 四五月八月の十五日
七月八月十三日と用也

八月十四日の祭祀は回鼓坊と号け僧俗八人赤塗の如き六角の笠に花菱と重きると

被き白地小置形付たる直平頭中と目なり出しく被り装束は白張のつく地の

生平布と鬘金ふも脊中ふ大ある三巴の紋とつけ袴も地白あり橘色の

丸卷の筋とつけ草履ととも手おびんざくら持 以上六人の僧二人村中の者四人
以上六人の僧も同じ出立

外小二人一際大ある笠も同様の装束袴は下括りて輕袴のつく出たり

太鼓とらう 太鼓の大きき且り二尺高六寸なり 此八人年預の寺より粧ひ出て境内の群集の

中と縦横無盡ふうけ廻る事三度其間小數回あり此所作とあり恒例

と又童子十二人太鼓うち二人各晒帷子白木綿小紺の綸子形付一袴と

着し紙みく造り笠と被りとて摺り伎踊る是とて踊るといふ

此伎踊の唱哥小曰

秋の田と外わけゆけを露にげり下葉の輝露に濡れ濡る

右回鼓坊の儀式終れる跡に伎踊十二段の所作あり此事終つ後的小

の式あり 社家村八幡の祭祀おも回鼓坊あり大抵當社の
様子と同じ手と振身と踊らぬは左右の違ひありと云

さく舞踊の序

御食むり淡路國産手や榎並の宮居の編木ねと茶はくご一神代小

八百萬の神とち天の細女の命と共に神遊びの俳優とあひそのなからんせと

みづ垣の久き世より年毎の八月十日あり十四日といふ日今小傳へるあり

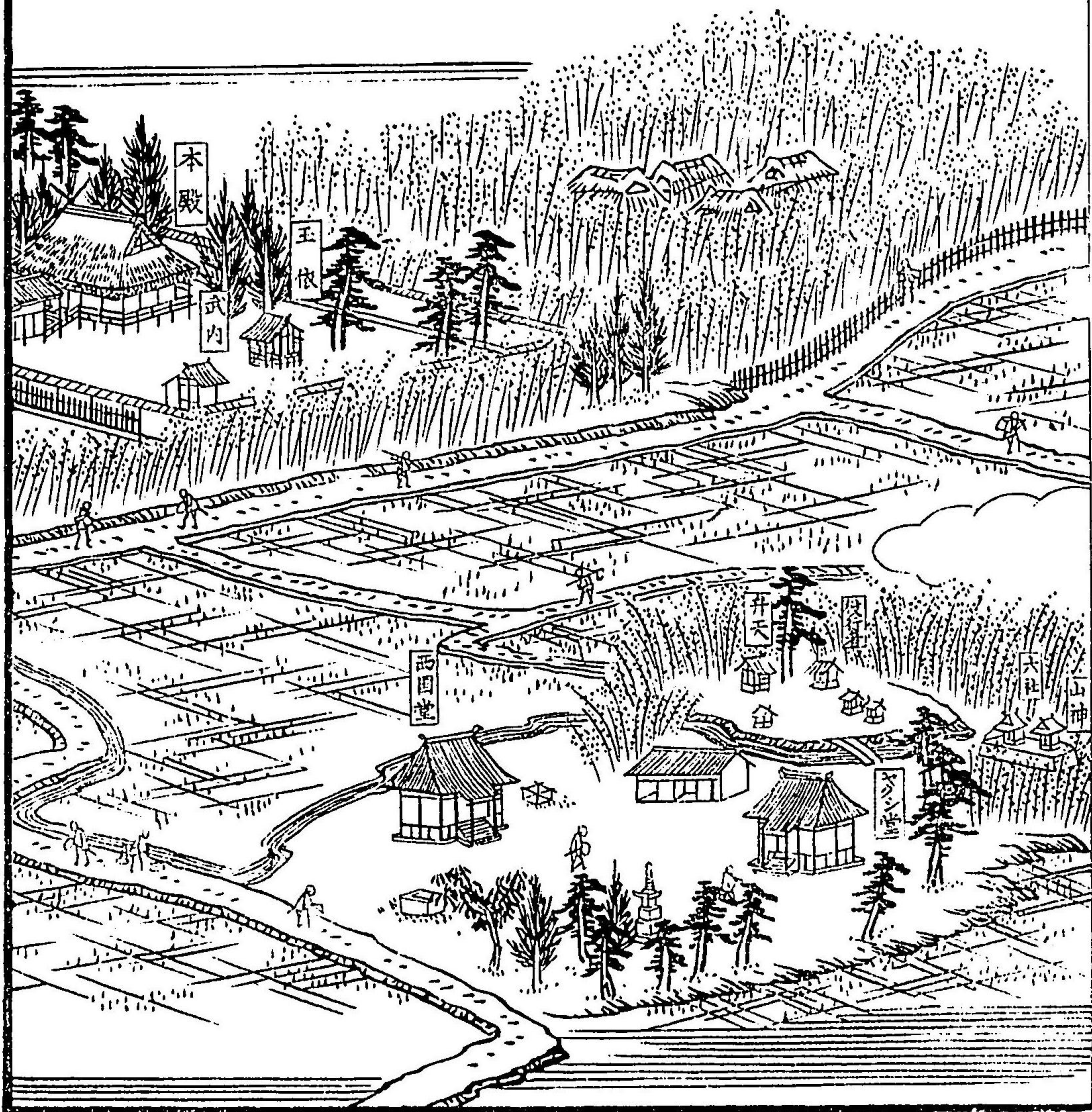
此神事とてとあん第一の祭りとして近き里々の産子ホつひひ集ひて

千五百の秋ゆきけく五の穀みのりかざりあらん事を常磐かきふつと

府中八幡宮

此辺をまゝて府中と
 して、国司館の跡を
 遺名あり

人王十七代 仁徳天皇の
 御宇 矢口足尾を以て
 淡路国造と定め給ふ
 同三十六代 皇極天皇の
 御宇 此の跡にて 国造を
 改めて 国司とす



作者部類曰

延喜廿一年

正月晦日

凡河内躬恒

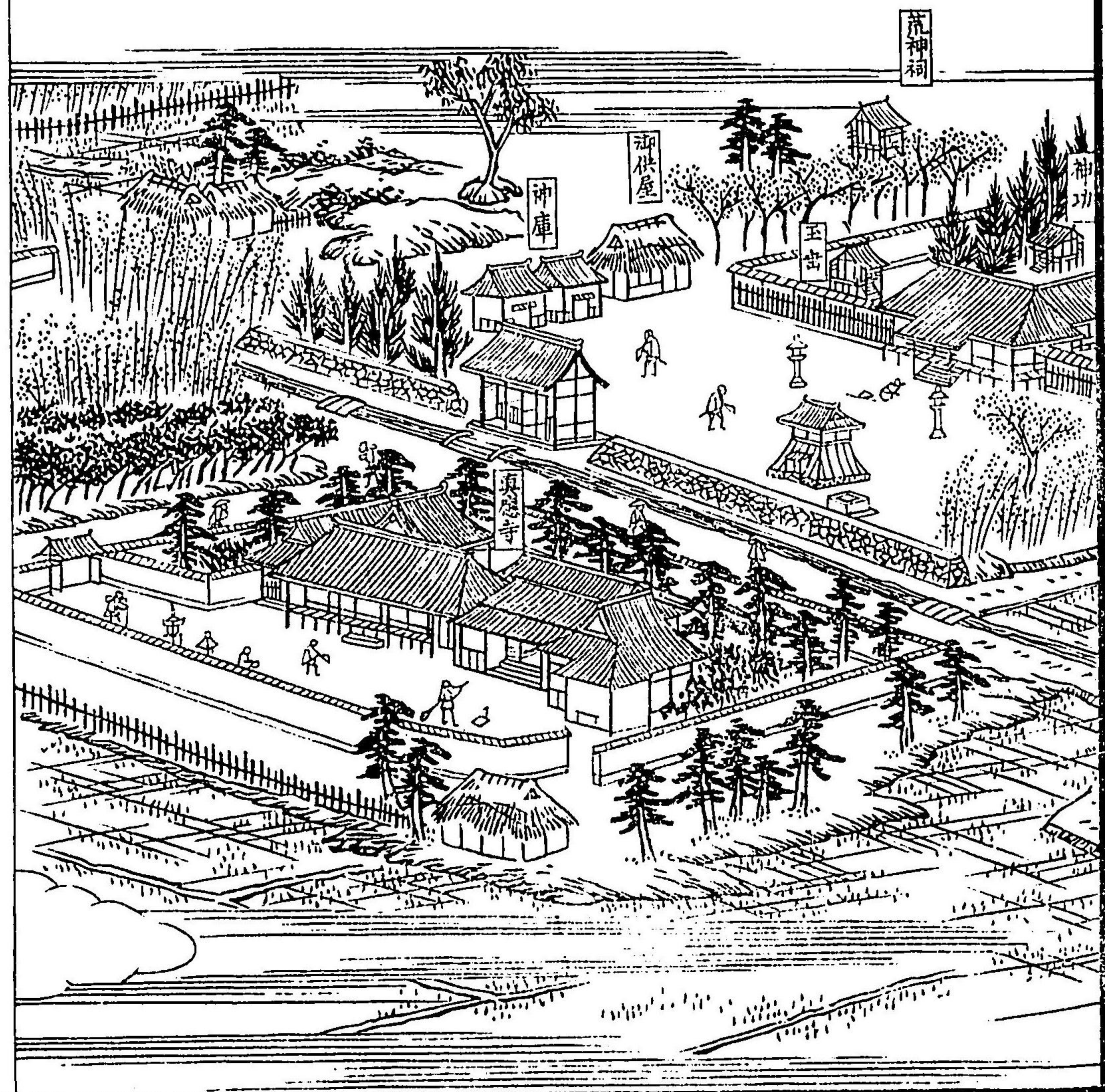
為淡路權掾

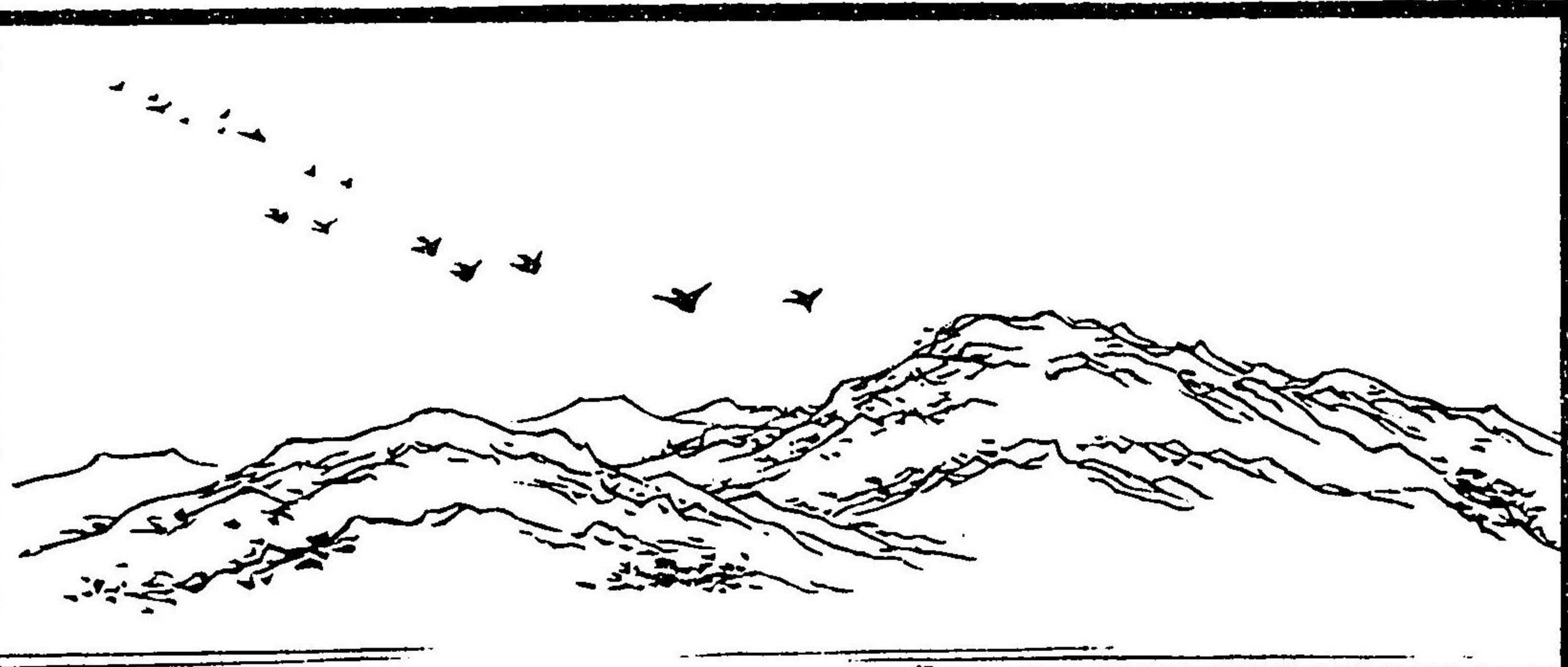
後撰和歌集

ひさ種しんと
 兼輔朝臣のつと
 たの家きて

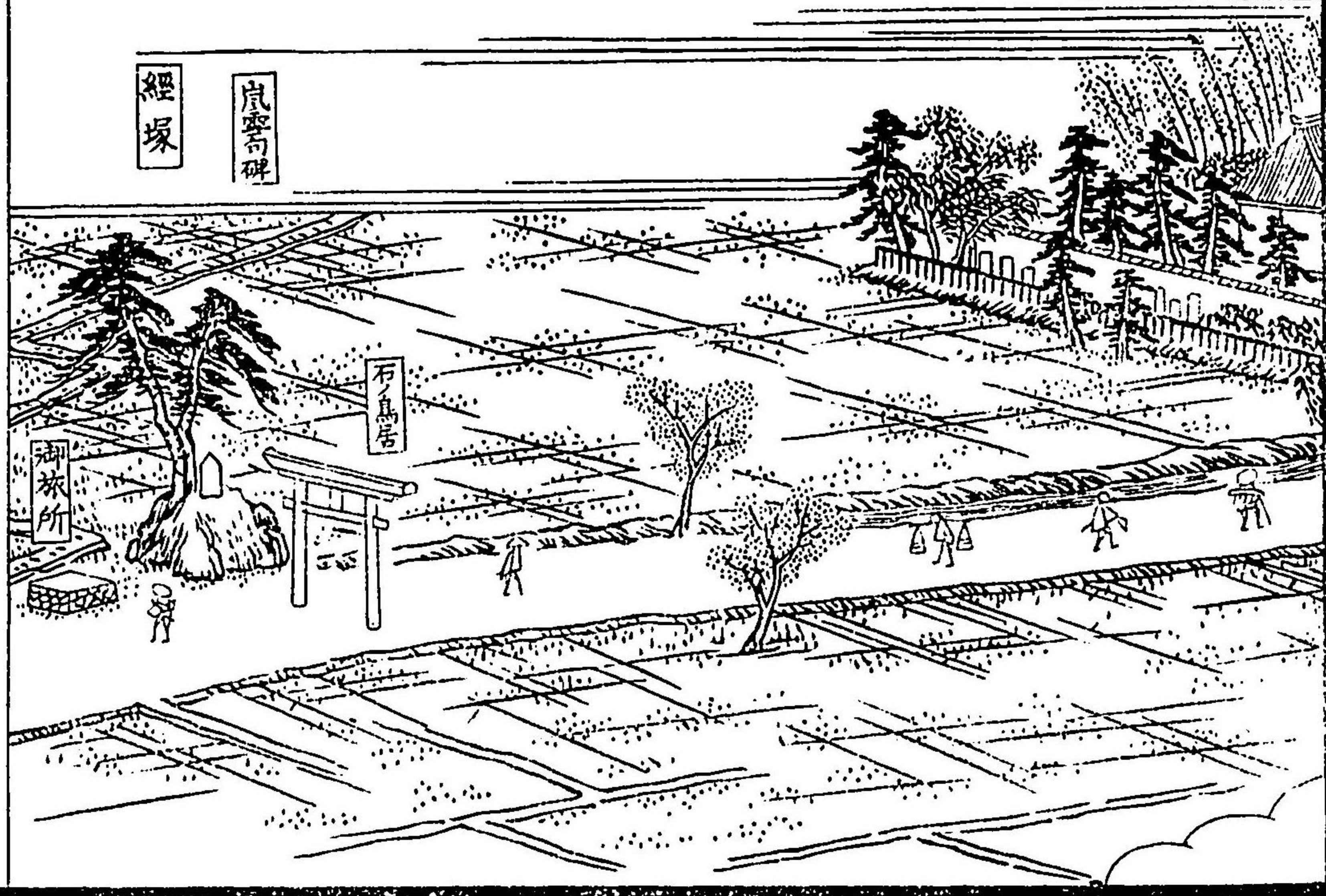
躬恒

松のこゝろく
 ありふらるるれ



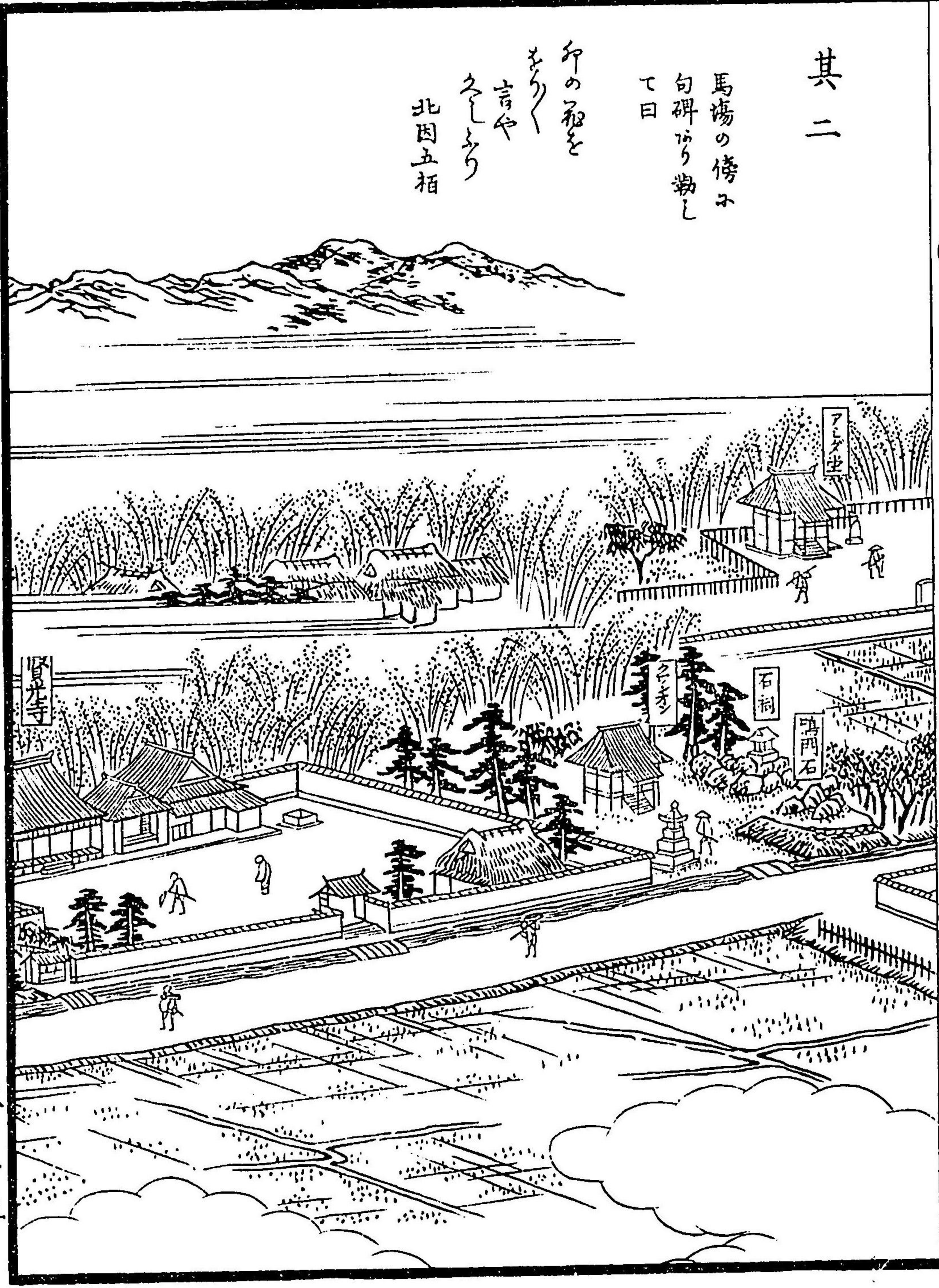


北園五栢
言や
之しより
印の和を
まろく
て曰



其二

馬場の傍に
句碑あり勸し
て曰



來り其神そのくま日ごとひごととと又またあつた

志野和泉女

賢光寺

真珠山と号し八幡宮馳道の中ちんじゆん間まにあり真言宗本尊大日如來長二尺許殿たに士しヲ間天不動尊

真應寺

覚智山と号し賢光寺の向むかひより同宗本尊大日如來長二尺許たに旧号圓えん林坊りんぱうと稱なづせりとぞ

觀音堂

賢光寺の北隣に正觀音と安やすし座像二尺許行基作と云此地ハ八幡宮社僧福万寺の廢やぶせり古趾こしといふ

石祠

金毘羅秋葉ホ合殿あきばあり多おほく 鳴門石 石祠の前まへより里俗傳りよくてり昔何國の大船おほより雜風ざつぷう觀音堂の北傍きたへより

無雜むざつヲ助すけりりふより鳴門の石いしといふふ境内奉納けいだいほうなつ其そのあらとと幾いくれれといふ

阿彌陀堂

觀音堂の西にしより堂前だうぜんより元龜二年未もと卯月う四日よひ所建ところの供養石くやういしなり

藥師堂

八幡の東半町あづまより本尊藥師佛ハ聖德太子の作と云當國藥師巡めぐり第四番の礼所らいじよなり

榎並地藏堂

八幡の鳥居の東南あづまより本尊石佛長一尺三寸許寛政四年九月此地このちより掘出ほりだり河の

群集ぐんしゆ影かげ一

經墳

八幡宮鳥居の傍かたはらより昔經卷と埋うみまり塚つかト云

服部嵐雪碑

右經塚の上うより一乘塚いんげんづかといふ嵐雪ハ此村の産うみまり井屋と号なづせり釀酒家らうしゆかなり今尚いま連綿れんめんとして現存げんぜんあり

碑面いめん勒りやく曰

一糸ひとちるちる咄はな一糸ひとちるちる風の宇う造ぞう 自然石しぜんいしニ彫ひ之

文化三年丙寅冬十月十三日建石 儒館教授那波績撰并書

全裏ぜんり曰 芭蕉維師其生也逢時あは稗樹碑其没也不衰

其袋 若水中世古郷こきやうの同族子孫どうしゆくと追慕おひしる力ちからといふふを辞世じせの

句碑くひト小榎並村八幡宮馳道條路傍かきふふと建たる那波細川先生

之揮筆これト云いふふ則すなはち此碑このいあり

綾錦

沾涼せんりやう驛えき 嵐雪 服部雪中菴 承應三甲午生湯島推名久米助ト云

天神宮銅鳥居てんじんみやどうりゆう小其名そのなあり濱町はまのち小住こぢ寶永四丁亥十月十三日平五十四秋

駒込常驗寺こまごみじやうげんじ小葬こさう法花宗 墳つとハ深川長慶寺ふかがわちやうけいじ小有門人あつめんとと建たる

雪中菴ゆきなかま不ふ白はく玄峯居士げんぽうくし 按あり沾涼湯島天神の鳥居とりハ嵐雪の雅名みやびななりと見みる嵐雪ハ

味地草云嵐雪雪中菴と号し服部氏ふくべうぢ幼名久馬助後おのな孫まご之の亟いさと稱なづれ

東都とうと小行俳諧せうぎ不遊ふゆうび芭蕉翁ばしやうの門人かどとあり翁おきなが左右の門人かどより其頃

芭蕉之句ばしやうも草庵くさあん小桃櫻こももりり門人かど小其角嵐雪こみかくりり詞書しよりり

雨あめのあも小桃こももと榎えんや草くさの餅もちト有

嵐雪^{らんせつ}の年の重陽^{ちゆうやう}の黄菊^{わうきく}白菊^{はくきく}その外の名^なのあはれも哉^やのりふ句^くと
 ちりり其角^{きかく}ふりく見^みと感^{かん}じりつ我^{われ}一生^{いっせい}此^{こゝ}の及^{およ}ぶと思^{おも}ひもよらばと
 夫^{それ}より後^{のち}其角^{きかく}小菊^{せうきく}の發^{はつ}のやと乞^こものあれが翁^{おきな}の白^{しろ}ぎや目^めふたて
 見る塵^{ちり}もあゝのや或^{ある}の嵐雪^{らんせつ}があのやと書^かく其角^{きかく}書^かくあゝめけり
 我^{われ}が菊^{きく}のやの書^かくごりごり云^い 俳諧^{はいかい}世説^{せせつ}
 又嵐雪^{らんせつ}が妻^{つま}から糸^{いと}の形^{かたち}よと愛^{あい}しく美^{うつく}しげ蒲團^{ふたん}とあせ喰^くものも常^{じょう}
 あゝね器^{うつわ}か入^いる朝^{あさ}夕^{ゆふ}むごりごと放^{はな}さでるふ門^{かど}人^{ひと}もどちあどあも
 りり思^{おも}ふ人も有^あると嵐雪^{らんせつ}折^{やう}くハ獸^{けもの}と愛^{あい}するも程^{ほど}有^ある事^{こと}
 あり人も勝^かてり敷^し物^{もの}器^{うつわ}食^く物^{ぶつ}と忌^いむる日^ひも猫^{ねこ}の生^{なま}者^{もの}と
 喰^くまらあど宜^{よろ}しくぬ事^{こと}とつばやまきれども妻^{つま}あのびつと見^みと改^かめ
 ざりくを扱^と一日^{いちにち}妻^{つま}とく行^いくは留^{とど}主^{ぬし}の内^{うち}そく出^でるあやう小^{せう}彼^か
 猫^{ねこ}とつどく例^{れい}の蒲團^{ふたん}の上^{うへ}は寤^ねをせと肴^{さかな}あど多く喰^くせしられ
 ぐ綱^{つな}ゆるごゆやう小^{せう}頼^{たの}みまき出行^{いっせ}ぬ嵐雪^{らんせつ}の猫^{ねこ}とつごへあり



泣宮八幡祠

地頭方村の社 國箇牛内地頭方 喜來 喜四村の産土神と云

里俗の云當社例祭八月十二日十三日神事角力なり是と泣宮の相撲と

この此日多く雨なり故に泣宮の名ありと又此神頭髪禿て見苦しく

座せぬ祭日小人の詣り来るを耻し泣宮のつひに恐らく誣言ありと

按本社の應神天皇を勧請し奉る事の後世のつひに往古の神代小所謂

哭澤女神と祭る旧址ありん本社より凡四十歩許左の傍小祠の唯明神

との言傳ふ是亦若くは哭澤女の社ありん乎尚考ふべし

國衙舊地

今國箇村より國衙の國の政事を掌る館へ支邑は領家久度の兩所あり

往昔鎌倉の時代武家より守護地頭と置く國の政事を掌らせし

北條氏に至りて公家の故府の漸衰へ廢せり此時に至りて此地小新官

府と置く領家の莊園の事を掌らせしと國衙と稱せしと今此村の支

邑小領家といふ名あるも此故ありと聞ゆ 領家の轉語なりと云 今三原郡中の神

事祭礼に饗ひ宮座の名小領家座地頭方座の兩役あり是ハ公武と分ちて

役所と置し時の差別あり武家守護以来の名目と知るべし

國衙河

牛内村の中より出で長原と経て野田國衙の河より立川瀬より福井川と合流す

久度神社

國箇村の支邑久度にあり延喜式神名帳に出當國十三社の一あり今僅に二十歩許小社あり

三代實錄曰 清和天皇貞觀六年二月五日壬戌授淡路國正六位上

久度神從五位下

同 陽成天皇元慶八年九月廿一日戊寅授淡路國從五位下久度神

從五位上

公事根源曰 平野社第二の御殿ハ平氏久度神仲哀天皇

延命寺

國箇村の真言宗 高野山金剛峯寺の末あり當寺に古鐘あり承和年中

辻御堂廢址

同上今葉師の小堂あり

若宮祠

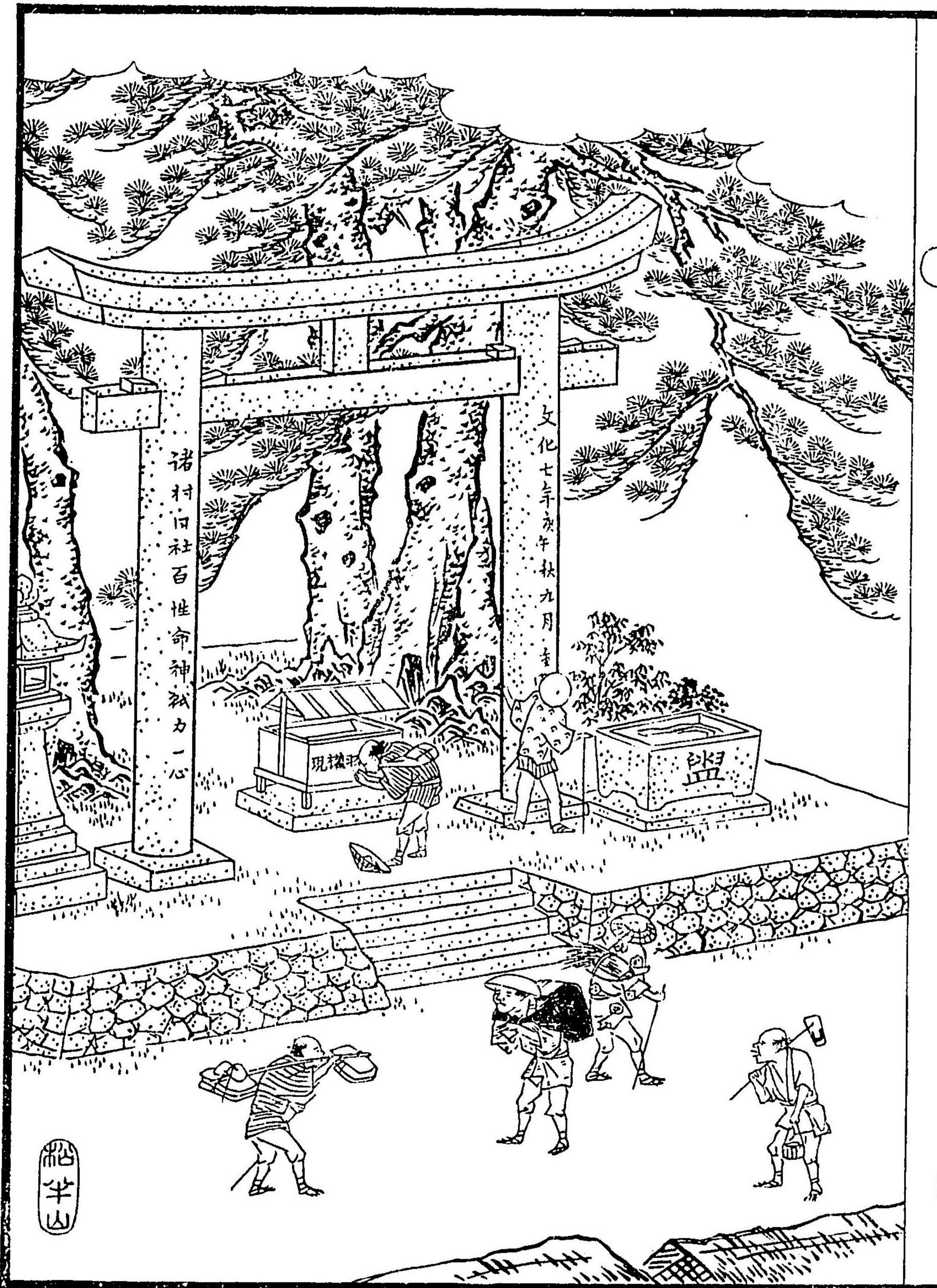
牛内村の社の傍小池の畔に瑞祥菴あり又宗像祠あり在財天と稱す

讓葉權現鳥居

同村の福良の街道の左傍に建是より山上御本社まで五十八丁あり

文化七年庚午秋九月重建 清村同社々姓命社戮力一心 那波氏の筆

二十二社次第同 上則平家の氏神



邦波氏ハ阿州之儒家あり名續宇世勳 俗稱与造ト云

讓葉権現の正面ハ南灘黒岩村より登ると本道といは是より當國箇村

より登ると裏山の糸詣道あり然れども南灘の正面ハ海辺なりと詣人最少

鬼石 黒道村の山上ニあり大サキ丈四方許傳云の此石時々鬼又化一里ニ出姿兒を驚

ハ畳敷岩 生子村の山中あり其 鳥帽子岩 同下の方より高さ七尺ばかり

龍ガ丘 牛内村の山中ニあり早天ノ諸村の農民ニ来りて面を祈り小其験ありとあり

栗原古城 矢倉趾花園の趾より又山の口にも城廓の趾あり出丸の類ありと云

一説ニ村上帝天曆年間二階堂藤原近経始々築く所々と鎌倉の世

以来島田遠江守某数世住り天正九年大隅守基綱の時廢亡

或云文治年間曾我十郎祐成右城主小所縁あり十六歳の時あり

末に寓居ハ一時諭霍羽山ニ登りて大力武勇を祈り三七日として麓の大

石ニと荷へりと云大ニ間四方許此石と今荷石といふ又祐成乘馬あり

大嶽と兼落を以て人馬恙ありと云々今其旧跡と十郎が嶽と号は則ち
馬蹄の跡石上存り里老の傳説又昔當城主名工の鍛冶とめり城
辺小居り軍器と打せりと今鍛冶が平といふ地名小旧跡存り又社家村
覺注寺の傳書島田兵庫介當國地頭職浦壁村栗原三住は建保六年寅三
月十四日卒聚徳院精高宗心凝然居士上田精舎不葬送せり其子孫
遠江守時儀あり三好小従ふ云元龜元年島田遠江守時儀當城中の子城
小入此時大木と伐て上田の神殿と重修は云又一書小栗原城主島田
遠江守藤原定行ハ阿波の三好元長小属は里民上田殿と称せり天文
八年十二月十三日卒は行定の子大隅守淡州總地頭職不成り其後
兵庫頭の世小至り天文九年織田信長小降るとぞ
尚系傳記味地草小々々
中河古城 同村ニあり里老云元龜三年島田遠江守時儀當城に住ると同八年十二月十三日卒
矢倉基の趾ニテ所又隔り一箇所高サ同ノ峯ニ
一説小當城ハ小栗原彈正平種恒住り數世ありて落去の時ハ島田基
綱ありト云テ所別の矢倉基の地と弦切谷といふ傳云此槽より落天といふ

敵と防ぐととも弓の強終ふきれ敗軍一落城不及故小此地と弦切谷
と号はととと
若一權現祠 同村ニあり社僧國箇村延命寺一説ハ祭神國常立尊として當國無双の古像と鎮
祭は又切鐘堂あり時の棟札あり古銘ニ云曆仁元戊戌年大且那島田木工頭ト云
浦壁池 同村ニあり里俗云物部太郎上田二郎浦壁三郎と三の大池の内ありとぞ
八幡祠 同村ニあり社僧國箇村延命寺元禄五年夜叉神八大龍王等の神像と掘出るとは社壇小ありといふ
例祭二月十三日八月十五日
讓葉山 右同村の北より南海に臨り高山あり黒岩より登ると表は官道といふ國衙村鳥居あり是より登山は舊道
ハ裏山より未活すと云論鶴羽山といふ書り山中に讓葉の樹木あり故に号するといふ
論鶴羽權現社 右山上より國君より御宮建當社再興の古記ハ人王九代の時天竺摩迦陀國より此神雀の羽より
て来り此山止りて故に論鶴羽山と号くとあるといふ受かり
按小當社の熊野同神と阿也然れば伊弉册尊事解男命早玉男命と祭り欵
神社考神社啓蒙等
又諸神本懐集舊事大成経等小當山の由来と載されども安雄翁
もこれと信ぜばと云と故は小の畧に
當山ハ南灘の海邊小聳へる高嶺あり東ハ紀の路の海山より南ハ渺々として
滄海沼島の漁村ハ眼前あり西ハ阿波の岬鳴門の海迄も見へりとして眺
望頗る絶勝あり正面の山下と黒岩村と号はみれば下るり九十八丁最山徑

嶮岨なり

黒岩 黒岩村の海辺より黒き色の大石あり此黒き岩らんとて村の名なり

地藏寺 石同村より真言宗として譲乗山権現の別當あり

白崎溪 白崎村より水原の後の山より出て海へ入 白崎村大崎の社と云ふ

明雲僧正潛居古趾 舊吉野より黒岩地藏寺より凡東へ一里半むらり谷口白崎村より登ると分

昔此山の半腹より寺ありて常光寺と号し則ち明雲僧正寓する所あり余後

廢し人家むらり山中ありしが一丰洪水出く岨谷にれ頰をて復び栖るる

ふび里民終は他不徒とて以て此を舊吉野といふ則ち吉野村の旧地ありといふ凡そ

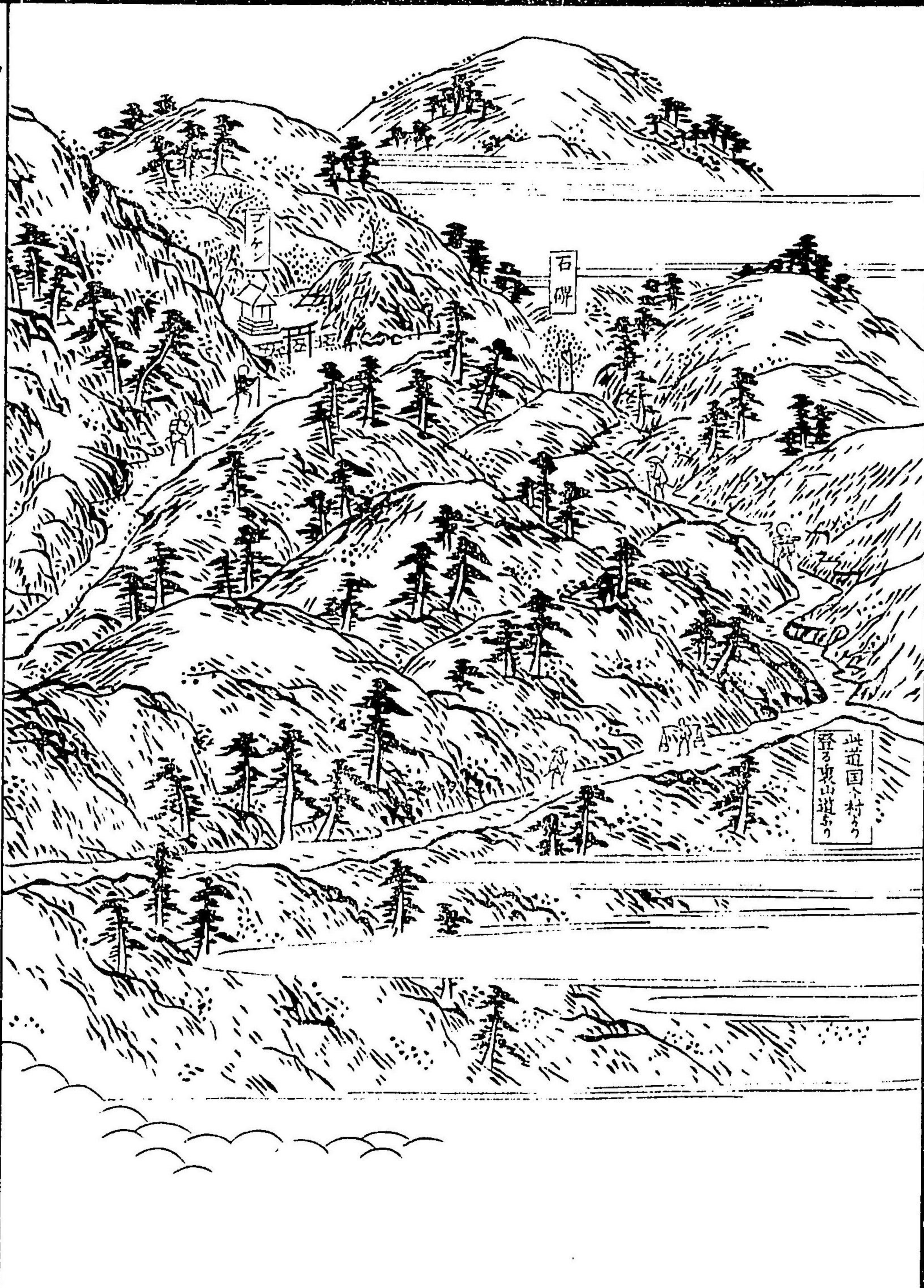
百歩四方むらりの間は灌木あふび紅躑躅多く草茅生いげり莽然と傍不礎

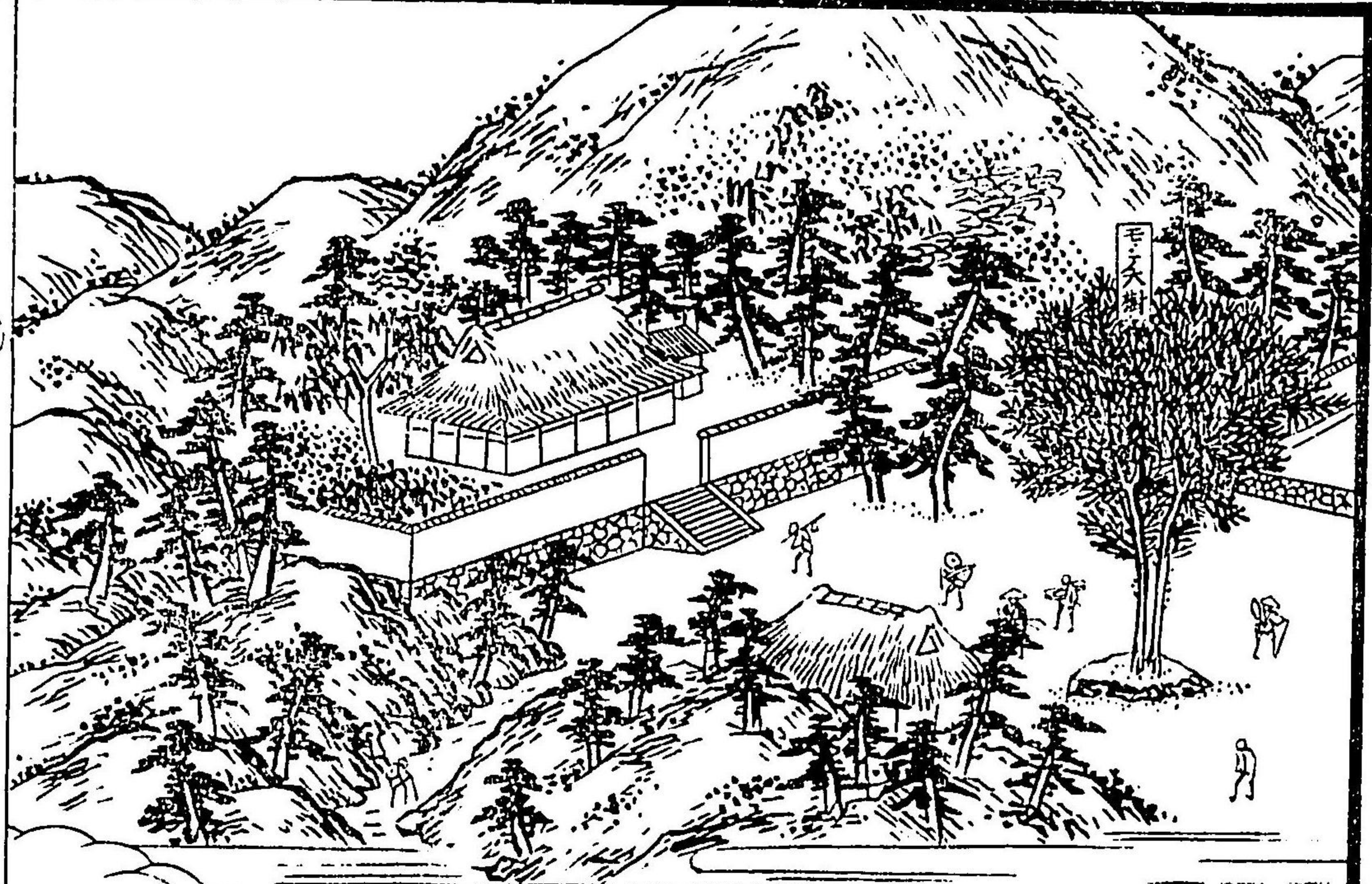
石六七むらり遺るる西の辺は一壠石碑石像の類ひ累々として荆榛の中不横仆

る是則梵刹の趾あり後か山迢遞岡密翠不凝東南乃大洋やて遐不紀

泉の山く歴々として最風景絶勝あり

又此を吉野といふ昔此山中不役行者を祭り所々不行所と云らへ大和國の





公左

猿黒岩村
上り十八丁 難所



かぶつ まきん こんりんのやしろ
瑜窟羽山権現社

三、廿四

大峯と摸せし故よ吉野と号けし今も大嶽あどつろ所なり是行場の
趾なりといふ

撰集抄曰おろろげあも人の通ふ浦も侍らば然れども藤野といふ名の何と
みく睦まゝく覚へ侍りしはたゞく罷アミ侍りし奇く浅猿き
庵の破れ残る侍り珍らふ覚へ見侍りしは庵の主見へ給はく黒漆の
袈裟と硯とをり見侍り傍ある板北嶺禪閣大僧正明雲室也と書
れ侍りして所住る世のおろろと哀お賢くおろろ坐涙の落
るるき未だ此所を出給らざればこそ硯袈裟とを残しおろろ在所か
らんと思ひ侍りしは其日の傾くまゝ侍りしかたふあつて僧正山の上より
いづそより山桜の花をかむ手折るひかり給へは如何と何と
尋ふ至りしは都の方小何れぞのあゝの葉侍らむとこそ思ひし誰
とのうぬ侍りし御返夏やまごも及び隨喜の涙とせれ兼侍り其
夜の御庵の傍侍りし何とあゝ述懐も申出く互ふ袖とあかりて楮有

べきも侍らざりしう泣く別れえうき公家も用ひられ寺も重むじ
奉りし萬執務しつやそよりしうばさ紀ふ在そよりしは大方こそ
在そかりし分く身ふむすての後の世はるみゆりい入給はと此日頃ハ思ひ
奉りし浅増もあそりしとわなうへ一実何とやむ高位も昇りし
人いひお情のわりあゝ道心あゝいままをぞとよ云

平家物語云此明雲と申へ村上天皇第七の皇子具平親王より六代の御末
久我大納言顯通卿の御子あり誠無雙の碩徳天下第一の高僧とて
々々君も臣も尊び給ひ天王寺六勝寺の別當とてけりしは
陰陽頭安部恭親が申すゆゑさだうの知者の明雲と名乗るゝと心得ひ
上る日月の光と並べ下り雲有とてあんどらる云

明雲僧正相者小對あひし已れも兵仗の難らうやと問あひしは天口
座主ふまうしは兵仗の難らうやと問あひしは始あり明は日月にて
下り雲らとて終ふ蔽られしはあんと相者の答へし徒然草あひし諸書ふ

見へり

山口鍛樹云源平盛衰記小安元二年加賀國目代師經白山の湧泉あふみちふ

於て狼籍おごりせしり事發り終はつに近藤加賀守師高左衛門入道並あび目

代師經が罪狀と訴訟うそのり白山比叡山の衆徒蜂起あはれ治承元年安元三年改元

四月神興振おこり京師みやこへ入いり戦争いくさし矢石やいしと交まり至いたり治承元年五

月五日明雲僧正公請まへと止とりりの上藏人かみくらひと遣まされ御本尊みほんぞんと召返まへり

其上使廳かみつかの使つかと以もて今度神興かみくらひと振下ふるくだり奉たまり大衆おほしゆの張本ちやうほんと目指めされぬ

且加賀國かがのくにへ座主ざすの御房領みむらねり師高國勢しこうのくにせの刻ときと是こゝと停廢とどめりり

より其宿意そのしゆくいに依より門徒かどの大衆おほしゆとめりり訴訟うそと致いたり既すでに朝家あその御大

事こと及およぶのり西光法師さいこうのほうし父子ふし諛奏うそと是こゝより後のち白河法皇しろがわのほうわう大おほ逆鱗さか

りつつり殊ことに重科ちゆうかと行なひきり思召おもされり斯ごとく十一日七條しちじょうの七官しちくわん覺快かくがいと

天台たいたいの座主ざす小成せうじやうせり是ハ鳥羽院第七皇子にて故青蓮院廿一日にじゅういちにち前座主まへざす明雲僧正めいうんそうじやうとい

大納言おほののり大夫たいふ藤原松枝ふじのわらと名なを改あらめり伊豆國いづのくにへ流罪りゆうざいと定さだむ斯ごとく程ほど小僧正せうそうじやうハ

警固けいこの武士ぶし小追せうしゆい立たち粟津あしづの毘沙門堂びさもんどうままり赴ゆひり所ところに山門さんもんの衆徒しゆと追

りの来きり僧正そうじやうと奪うばひ返かへり東塔とうたうの南谷なんこ妙光坊めうかうぼう小入せうに奉ほうり三千さんぜんの衆徒しゆと蜂起はち

事こと騷さわりり程ほど小僧正せうそうじやうの事ことハ公家こうけの御沙汰ごさた小及せうおよびりり平家物語の大意

元享げんかう釈書しやくしよ資治表しじへう曰い治承元年しじやうげん夏五月げつご僧正そうじやう明雲めいうん配はい豆別まめわか六月ろくがつ賜赦たまはり云

右みぎ凡たゞ盛衰せいさい記き平家物語へいけものがたりを不ふ據たし見み由よし然しかれも賜赦たまはり何なにに據たりや是ハ叡山の僧徒一統ノ罪

平家物語へいけものがたり治承三年しじやうさん十一月じゅういちがつ廿日にじふにち平清盛へいせい法皇ほうわうと鳥羽とりわの離宮りきゆうへ籠居かごゐり奉ほうり段だん

同どう廿日にじふにち天台たいたい座主ざす覺快かくがい法親ほうしん王わう頗たり御辞退ごじたいりり前座主明雲大僧正還着

給たまふと有あり其終そのしゆうは云いふ去年こゝろ來きり治承しじやうも四年よんねん小来せうきり云

按あり平家物語へいけものがたり治承元年しじやうげんの秋あきより四年よんねんままり僧正そうじやうの事こと見みる愛ハ心と

つべつべ按あり上の件このことの文ぶんより見みる治承元年五月明雲流罪の時山徒の

奪うばひ返かへされり叡山えいざん小及せうおよびり勅勘中の事且法皇逆鱗の故世と憚りひて

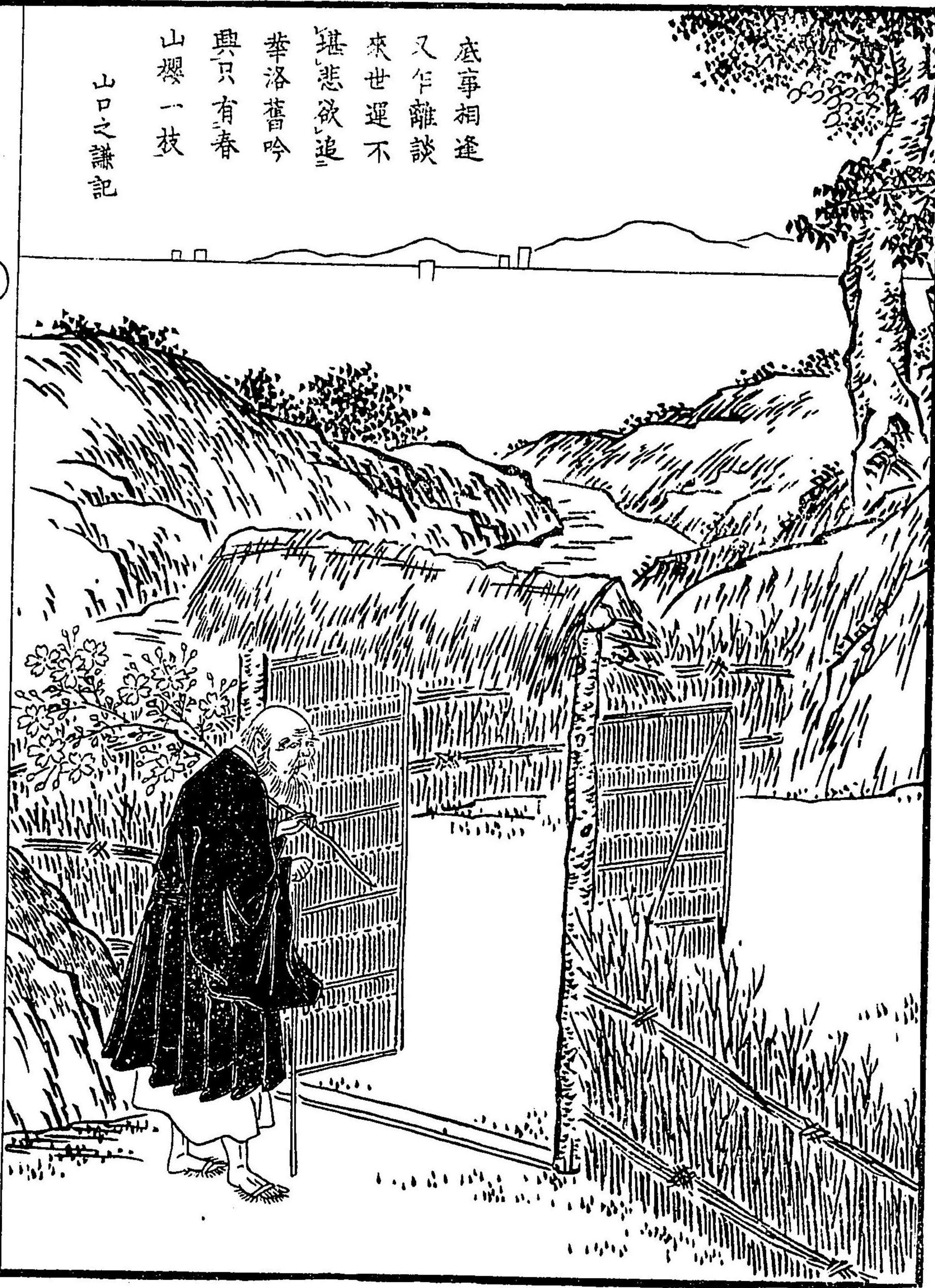
暗くらふ山やまと出でり淡洲たんしゅうに潜遷ひそかにうつりりり此藤野は幽居の事ハ治承元年

より三年さんねんままりの間まありり其後座主は再任りり壽永二年の法性寺の合戦も

より三年さんねんままりの間まありり其後座主は再任りり壽永二年の法性寺の合戦も

より三年さんねんままりの間まありり其後座主は再任りり壽永二年の法性寺の合戦も

底事相逢
又乍離談
來世運不
堪悲欲追
華洛舊吟
興只有春
山櫻一枝
山口之謙記



會一多ひあり 高倉帝の治承元年より壽永二年まで七年不及ふ

吉野村老父の傳ニ云明雲此里の草庵に幽居してわづらふ其後都より御
迎の人来りて歸りありてわづらはし是又再任のゆふ符合せり

大日本史二百廿六卷 佐藤義清傳云義清往嵯峨為僧名圓位後改西行

保延六年為僧時年二十三建久元年二月十六日卒于京師年七十三云

保延六年八月皇七十五代崇徳院の御宇に建久元年ハ
八十二代後鳥羽院の御宇に此間凡五十余年ニ

歴々老後讚州ニ撰集抄と著されりあり

西行冷路の遊歴ニ明雲僧正亦會り治承元年の秋より三年迄の間あり

仁安治承の間因々とめづりて夫より程経る壽永年間ニ讚州に留りて住て撰

集抄と著せりあり 壽永二年正月小 されば京師と讚州と遥く山海と隔るれ

此頃まで小源平戦争の騷々世とありし程小何れも西行の委くハ聞及ばざるあり

此間明雲叡山の座主再任に撰集抄ハ明雲長く遁世多し様々書けるハ世故多し

因云明雲僧正冷路園より飯洛りて叡山の座主再任にあり余後壽永二年十

一月木曾義仲都よりして悪逆平家お超るるより後白河法皇大に怒りあり法住吉

の御所と城郷お構へ官兵と集り叡山三井寺の衆徒上下とて義仲の狼藉と

伐んと合戦お及びし時明雲僧正も法の法住寺お召れり其れが既上御四方の

軍敗れておの落させらる此時僧正も馬お召んとありしと楯の六郎親忠能引

放つ矢お御腰の骨と射させり真逆さぬお落さひて立も上りありしと親忠が

即等落重あつて御頭ととりたる其れ討つ者數百人木曾ハ切とあるの頭もと

六條の河原お竹結ひして懸あぐる其數三百四十明雲僧正も圓慶法親王

三井寺長吏 八條官 共ニ二級二所お掛りて八條官の三細お大進法橋行清とつる者夜

更人定まら後あの人此二の御首と盗り取東山おもとて年来ありし墓の

僧お誂へて焼せり高野山お登り奥の院に納め奉り五輪卒都婆と彫立て御

跡と吊ひしと時二年五十三法皇おむく惜嘆せしめは盛衰記お見へ

前々々々明雲相者おむくひて兵杖の相ありやと尋ね

下灘 仁頃村より末川村まで十三村三原郡に隸してこれと下灘といふ末川より東ハ津名郡に隸ス

細田相川中津川此三所を上灘といふ

来川村より後の山の嶺と踰れば養宜郷の成相谷不出る又畑田村より後山の嶺と越れば廣田郷の鮎屋村ふづる養宜と廣田往昔津名三原兩郡の界あるも此のどく分るるあべ此上下の南洋の村里に田圃少く男の耕作と業とば婦の女功とさび唯薪と推く治生と山民嶮隘幽谷に住る猪鹿獺猴と伍り本郡中原の郷邑も遠きも人風俗も亦自ら同づる月毎に壽長といひ里人集り土器とり酒とさか調ひ舞や戯れ遊ぶと云

總溪 惣川村より水源の後の山より
吉野溪 吉野村より後の山より
藤野浦 吉野村より西行法師の撰集抄に出

撰集抄曰ひり淡路國ふもろく徘徊侍り事有る其国見り侍り
藤野の浦と云ふ所侍り前南向の海漫々としてきはもあ後北山嶮岨
あへ今小嶮しき所さぐり清水をひり于浮とまのりそ彼所より至り侍りあはろ
けあも人の通ふ浦も侍らば然れども藤野といふ名の何とあむつまじく
覚へ侍りふたはらへ罷りく云

山口敏樹云常磐草按撰集抄小藤野浦とらる藤の字は芳の訛あり藤野と
りふ名の何とあむつまじくしてはらへ罷るとあり然る小藤野の名さの雅名
少もらば芳野の花の名所々其名の同じれと慕ひ見行あべ今
吉野村の事あるべ云

然る小予近年吉野村を行て村長山寄氏此事と問小山崎氏云藤野の古名
あり往昔此の山の崖壁に紫藤を故仁頃土生の辺より黒石白崎の
辺より凡三里許の間の處の惣名と藤野と云るありと是より始めて古書の
言違はると知る

安雄翁の藤野の名さの雅名もらば芳野の訛ありんと最風流の考へあり

油谷溪 油谷村より山間より出る海入 拂溪 拂川村より山中より海入前云来川の
抽谷の轉訛ありと云 垢離川此拂川の後川ありと云

真觀寺 土生村より行基僧正の開基して本寺阿弥陀佛と安行行基作と云高見山觀音堂
同境内に當國順礼の礼所あり

沼島 南洋の海中にあり土人のやまつく六島といふ太平記に武島と書り沼武音訓と云とゆ

相傳此島の龍宮城の海門あり金輪際に通徹する所ありと一説小上下



南灘の山分りして少年元服の時烏帽子親をこのむこと
 たり其頼まれし老人少年を伴ひて産神ふ詣て神前ふ
 おいて老人の云樽の陰ふる誰等と少年こゝして曰
 何某今日元服を乞ふト老人やどて柄のぬけたる杓の頭ふ
 緒をつけて少年が首ふのせと云真頼よりとト夫より
 親友酒をみるも祝ひ寿をてりていふ當世冠禮ハ廢
 せしむる僻地ハ猶古式遺るもいふべしと常磐
 艸見へり

三十三



公左

の立神と以て龍城の門柱と云へり後山は南海と受て峻岨あること
眼と奪ふ実小奇異の一嶋あり此浦は片濱やて東南の風小船掛て北
西の風ふら船かゝらば淡の海底最深一南岸の岩横五六十間奥へ二町許あり
故小北南東風ふら船かゝると乾西大風ふら船數掛て海面土生村と距
事三十町許島の周廻二里余漁師商賈の家郷分つ所謂中之町即茶屋より大川まで
南之町川筋より北之町即茶屋より泊城山を隔て北東より凡そ此島の漁師多く當國
第一の漁釣の地として或は伊勢の海對馬の海ホムりて漁る者も有と論由島
中凡千戸酒茶煙草の三品へ里正年寄役等の家一商ひ他一販く事と許さ
里俗云其酒へ志流浦島屋とて造酒屋醸成して運漕し来る所は島屋とての家号も沼島と
因り奇あり茶及煙草の二品は諸方より運漕するものと
或曰一島の諸石皆青紺やて光澤あり又山上の石皆火燧の如く火と云
浦民云一島の諸石皆阿府小向ふ是は一奇あり山の絶頂へは小篠多くと云
土佐日記は阿波のみとと渡りて寅卯の時をりて奴島といふ所を過ると
るるハ即ち此地の事なり

常磐草曰今沼嶋と称するハ即礮取廬嶋あり考證左記

日本紀曰伊特諾尊伊特冊尊天浮橋の上より共計て曰底下小國
ありむ武と言ひて廻ち天の瓊矛と以て指下して探ぐり給ひて是は滄溟と
獲るひき其矛の鋒より滴瀝とての潮凝く一の島とあり是と名づけ
礮取廬嶋といふ二神とて彼島は降居て共為夫婦とて洲土と産人と
欲を便ち礮取廬嶋と以て國の中の柱として陽神は左より旋り陰神は右より
旋りて同じく一面は會ひひき
按小瓊房ハ神代卷小注は瓊ハ玉也此曰努と有り努の吳音ぬあり古事記ハ
沼矛と書るとがこよむハ誤あり古ハぬと云ひて沼矛の滴瀝
ありる嶋ありといふ説を取らぬがこの嶋といふべきと省きて奴島と後世ハ
名づけたるなり

釋日本紀引公望私記曰問此島有何意名之乎答是自凝之
島也猶言自凝也今見在淡路島西南角小島是也云俗猶存

其名也

按ふ西南の角といふ説多し遠く沼島ハ國の南にあり俗猶存其名
といふ公望の頃まづいひおのづからいふと能知る人ありしあり

釋紀又曰或説今在淡路國東由良驛下又曰或説云淡路紀
伊兩國之境由理驛之西方小島云云然而彼淡路坤方小島

于今得其名也

按小由良馭延喜式不出る南海道の渡口あり紀伊國小近由良馭の
下五里許り西小沼嶋あり由理ハ由良の訛なり

古事記仁德天皇紀曰天皇聞者吉備海部直之女名黒日賣
其容姿端正喚上而使也然畏其太后嫉逃下本國云云於是
天皇憲其黒日賣欺太后曰欲見淡道島而幸行之時坐淡路

島遙望歌曰

於志氏流夜那余波能佐岐由伊傳多知氏和賀久途見禮

婆阿波志摩於能基呂志摩阿遲摩佐能志麻母美由佐氣
津志摩美由

按由良驛と紀伊國との間の海中に伴が嶋あり伴が島の向ふの濱辺に海部郡
加太の淡嶋社あり此社舊に伴嶋有といふ然れば伴島の旧名淡島あり
此御歌難波の崎より出るひま伴が島より沼嶋をうけ見渡さるひま其
餘の嶋々と眺望する意あり伴島の沼島の向近く見るとさう處あり
釋契沖が原顔抄に粟島紀伊あるところ嶋日本私記云公望が執し
る説ハ今の御歌と能心得ぬまは誤り淡路坤方の島の敵覽に入ぬが
詠せるべきからば粟島はつけく言まされれば二の或説の中ハ正義なる
べしと有

按よ坐淡道島遙望歌といはれば淡路は行幸の舟行の中よりの御製
しなづくれは坤方の島とも敵覽に入まらざれば沼島粟島といふに
見渡さる所ありは必敵覽に入るべきあり又厚顔抄にあらまのよ日本

紀人の名小楨榊とあがまると点てり今楨榊島の名の聞へび名と更へる
かりべりさきつらぬ此島亦詳あぐべと有 按一崎々嶋々の

日本紀纂疏曰磯取廬嶋舊説和列之宝山一曰江列之敵山也今とる
ハ神紀の文義を合ぬやうに藻鹽草ふとのころ嶋ハ淡路の總名なりと
いふも非あり幡彗郷よりこのころ嶋の名と假れりあり

流河 同浦の南溪よりゆき海へ入

八幡宮 同浦より本社上深筒一天文二年癸巳大檀那梶原景時より又一筒ふ天正八年庚辰
大檀那梶原秀景より別當神宮寺これ守護以

神宮寺 同八幡宮の下より龍燈山金剛院と号は本尊大日如來惠心作と云真言宗
八幡宮の別當職也

西光寺 同所より海照山と号は本尊阿彌陀佛より此浦の南の洋より出現せり其古跡と云
阿彌陀佛倍より猶妻より寺記に見へり畧之 淨土宗

當寺ハ往昔元弘の兵乱の時後醍醐帝第一の皇子中務郷親王の御息

所此島ハ漂着しあまより漁夫某介抱し奉り茅屋へ伴ひ奉り暫し在居

奉り俗家の不浄と厭ひ稍寺院に居と轉り夫より此寺と王寺と稱し

寺家りの所の地名と王子の森と云ふ又近き清水より御息所へ呈する所

の靈水より是も俗に王水と稱せり

蓮光寺 同所より有本尊阿彌陀佛 一向宗 旧ハ泊の辺より天明年間古城跡の地に移り云

観音堂 泊より補陀落山と号は本尊千手観音海上出現と云則當浦の西南より
観音と云ふ所より出現し多きを當國順拜の第六番の札場也

古城趾 同浦の北の濱と泊との間の尾崎より今更くハ田圃とあり安南志知小笠原梶原等
居住せりと同古城趾と稱す

一説ハ天慶の頃武島五郎秀之居ハ伊豫椽純友の近臣ト云

曆應三年四月殿屋刑部卿義助南朝の勅命と蒙り四國西國の大將と奉

り下向の時紀伊國田邊の濱より熊野人兵船と調へたり淡路の武嶋より送り

奉り此不安間志知小笠原の一族も元末官方より城を構へ居りたり

種々の酒肴引出物と盡し三百餘艘の舟と揃へ備前の兒島へ送り奉り 太平記

島公方 室町の將軍源義植公より大永元年の春京都と去り淡路より渡り此沼島に寓居し
故島公方と稱しと足利十代の將軍也

管領記曰大永元年三月七日公方 義高 細川 高 御中不和あり京と出させ給ひ

淡路武島へ御渡海ありされば京より細川右京大夫七月六日播磨より

若君晴御上洛あり

白土生浦沼島眺望

名勝詩集

阿波津田八景

沼島歸帆

頑叟

一鳥煙晴七

里東歸帆卻

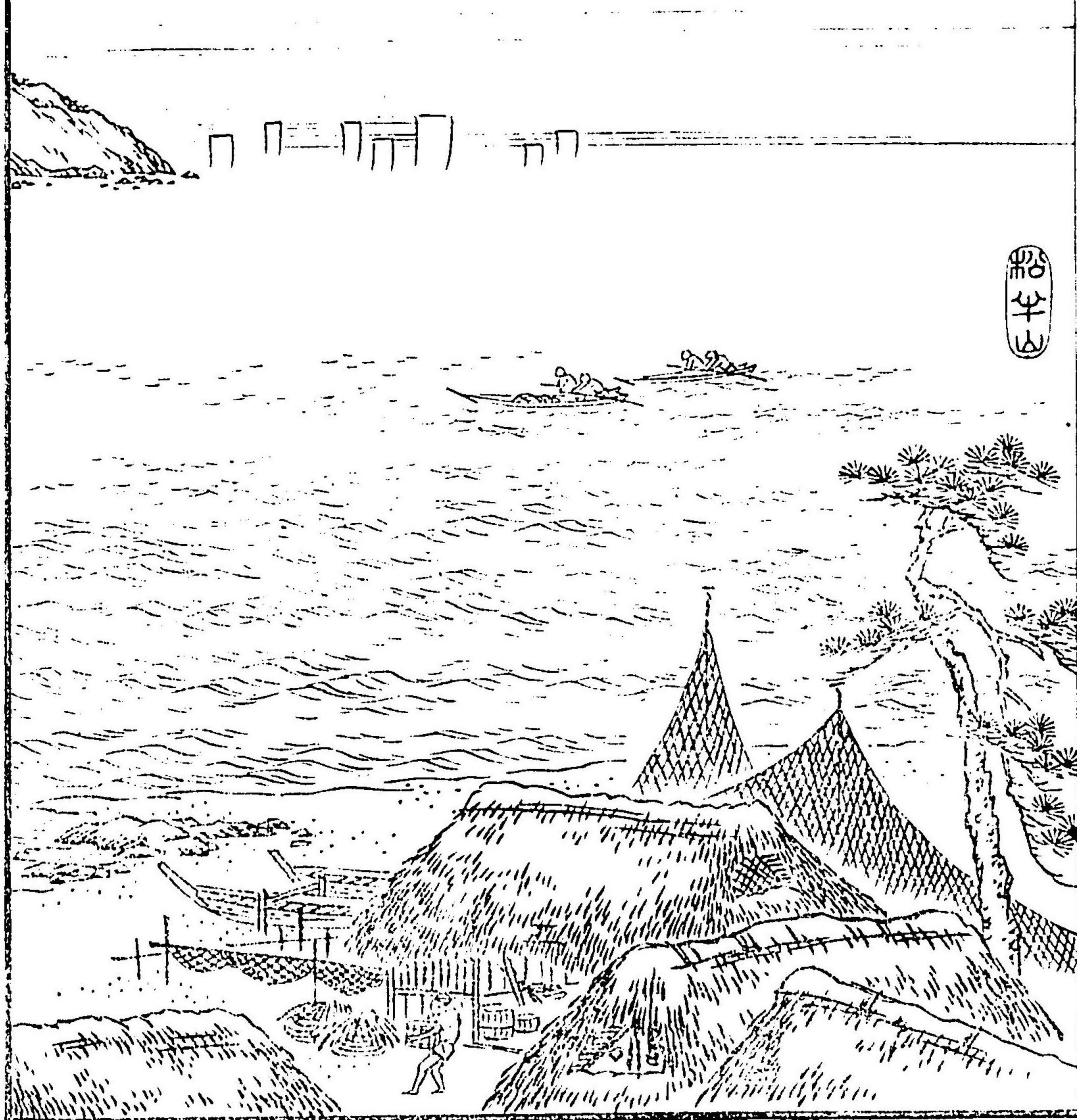
勝画圖中瀟

相遠浦甲天

下添得鳴門

白浪洪

沼島



行脚ふとて
年内春の
懐をいふ

沼島一寐

千鳥の

夜くら

まきりり

丹後

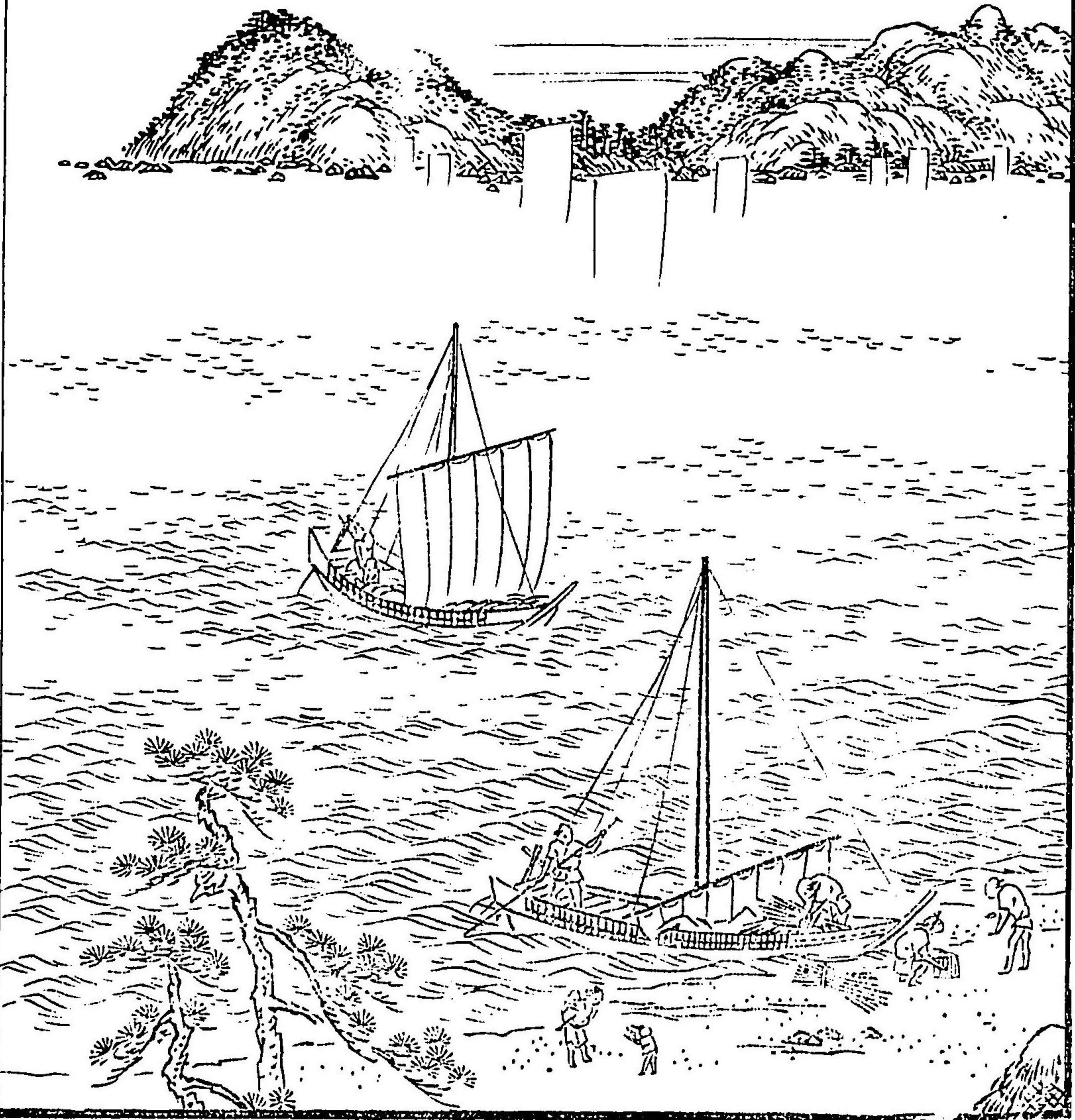
沼人

引細み付て

さよふ

千鳥の乳

丹左



後太平記云義植嫡子義冬と淡路へ伴ひ小行阿波の公方居置り見たり

薬師堂 蓮光寺の南の山つぎきり石跡の薬師佛長九一尺余

殿飛 高阿波許直立の岩より傳説云昔阿波の三好勢此浦の城を責まり城主梶原秀景終不敗敵城を焼れ

馬衆あがり飛舟とつり此余り

狸々波倍 周廻其間平石をめぐりて當國の方言は破へり出たる石と波倍とつり尤當島に於て波倍と

瓊茅之露日泊の三郎太夫と言もの此礁の上より狸々波倍の酒を乞ふ任せ

五升の酒を求め与ふ狸々吞終つて海に入ると三郎太夫價如何と

ひなれば汝が家の戎棚に在ると云へり飯まで見れば百銅の鳥目つり

取遣へども減らば一生の間家甚富むと子孫今泊るふりつとて

酒價島 同所の上の山より傳云三良太夫狸々酒の價を得てより漸富榮へ終り此地を閑登せり

平波倍 同島の東南にあり海濱と六十間許を離れ海中に大石あり長廿五間廣廿三間石の面

例年六月三日此處より社僧祝官茶會し讀經神樂と奏し詣人群参

此是と龍王祭と称し祭終り後酒壺升むりて海面に流れば此時必ら大

二疊許の亀浮ひ其酒を飲ひて年々変りつと云ふ淡国通記に見たり

又諸國里人談ふ此龍王祭の事出ればも小誤なり

上立神 同平太の二町より北海濱と去るる十間より海中に大石あり高十八間より直上立

下立神 同平太より七町より西南海濱と去るる十五間より海中に高廿九間より上立神より

中より大穴あり自ら陸揚の姿顕然なり

屏風巖 下立神の北より佛堂あり金の華巖とも云

巖の高さ十六間餘廣さ三十間餘中央に穴あり是と穴口より其穴の長さ

六間より幅二間半奥行十五間余常浪入り緑青と生じ恰も畫き

彩どろが如く崖の下と岸の海と称し

其餘島の前後に大小奇石攀り扱へり就中鳥帽子岩墓波倍鎧波惠

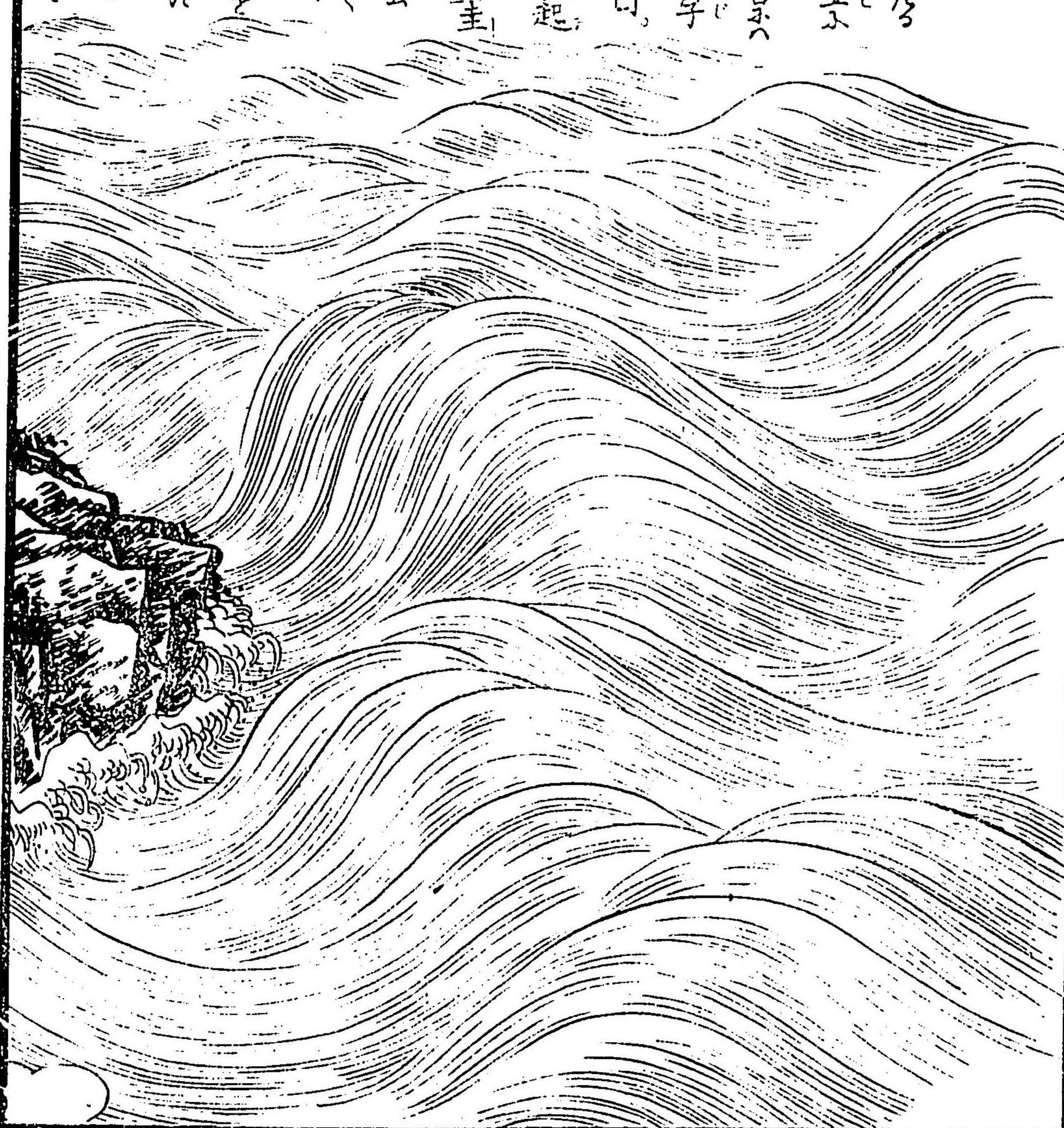
具足波惠籠波惠薬研波惠屋形波惠等も其形の似たりと以て号す

赤波惠翹波惠青波惠の色と以り鏡石の方丈より白石滑りて

鏡の如く其濱辺と鏡浦とつり又氷柱石あり其形相似ると以て云阿弥陀

狸々礁

當國の方言に磯(いそ)と出(で)る
石を波倍(なみ)と云(い)ふ按(あ)ず漢(かん)土(ど)
礁(いそ)の字(じ)を充(み)ち但(た)字(じ)書(か)ふ
見(み)る或(ある)は謂(い)ふ清朝(しん)の
新(しん)字(じ)なりと臺(たい)灣(わん)紀(き)畧(りやく)曰(い)ふ
淡水(たん)城(じやう)海(かい)中(ちゆう)有(あ)る兩(りゆう)石(せき)双(すわ)起(き)
挿(さ)天(てん)謂(い)之(之)旗(か)竿(さん)石(せき)又(また)有(あ)る圭(けい)
礁(いそ)嶼(じ)船(せん)遇(ぐ)之(之)則(すなは)碎(さい)云(い)ふ
此外(こゝろ)琉(りゅう)球(きゆう)志(し)畧(りやく)等(とう)往(わう)々(々)
清(しん)朝(てい)の書(しよ)籍(せき)に此(こゝ)字(じ)を
用(もち)ひしもの少(すく)なからず
一(いつ)説(せつ)訓(くん)をイソイハと
云(い)ふ



公左

波惠の前より西光寺の本尊と漁夫の引上る所ありて号く観音波惠
といく観音堂の本尊出現ありし古跡ありとて

名産温石 下立神より八丁より北の山中の溪谷より出る産石として當島の名産とて焼く
或る所を温石と功驗す

大寺森 同浦より往昔此地に大寺ありて廢して今名と存す本尊阿彌陀佛の像ハ當村
西光寺に移して

天神祠 古大寺の末に神人天満天神と稱ハ仲野氏此沼島と自凝島とより説小此社の
管公より神代ハ皇殿に擬するものあり伊弉諾伊弉册の二神と祭りて天神と
稱すと後世管公の天神と思ひ

御息所腰掛石 南の海辺に高壹尺許長サ四尺幅一尺七寸余黒赤き子持石
其衣掛若王石と号くは御息所の説

傳云後醍醐天皇第一の皇子尊良親王の御息所此島に漂流し給ひ
浦人かゝりて此大寺に入すの御命抱き奉りて其時石小

御腰と掛り又波に進らせ清水とつり御息所の古跡あり
今小祠と建ち祭りり里俗今ハ辨財天と稱し例年六月三日祭祀と執行す

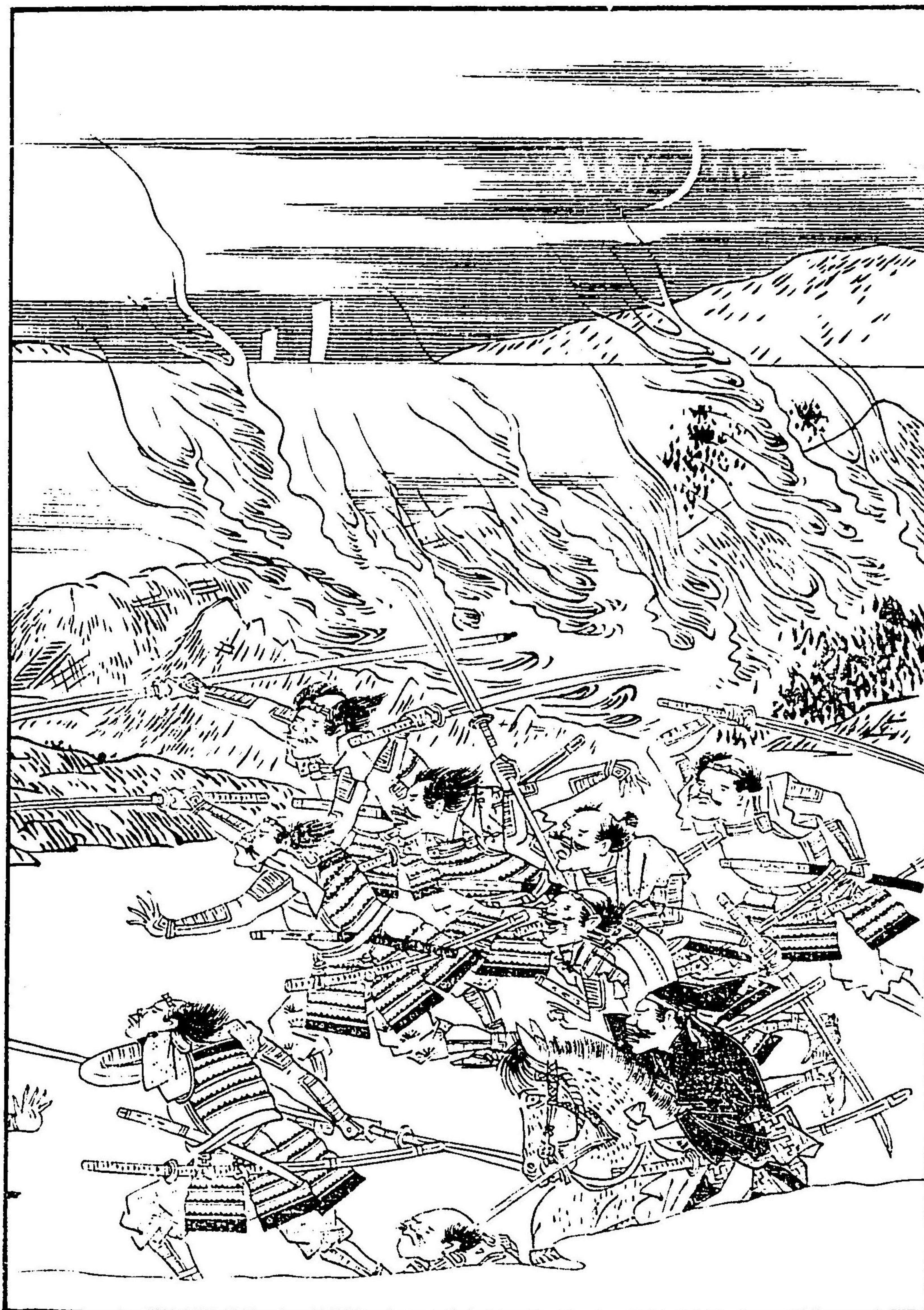
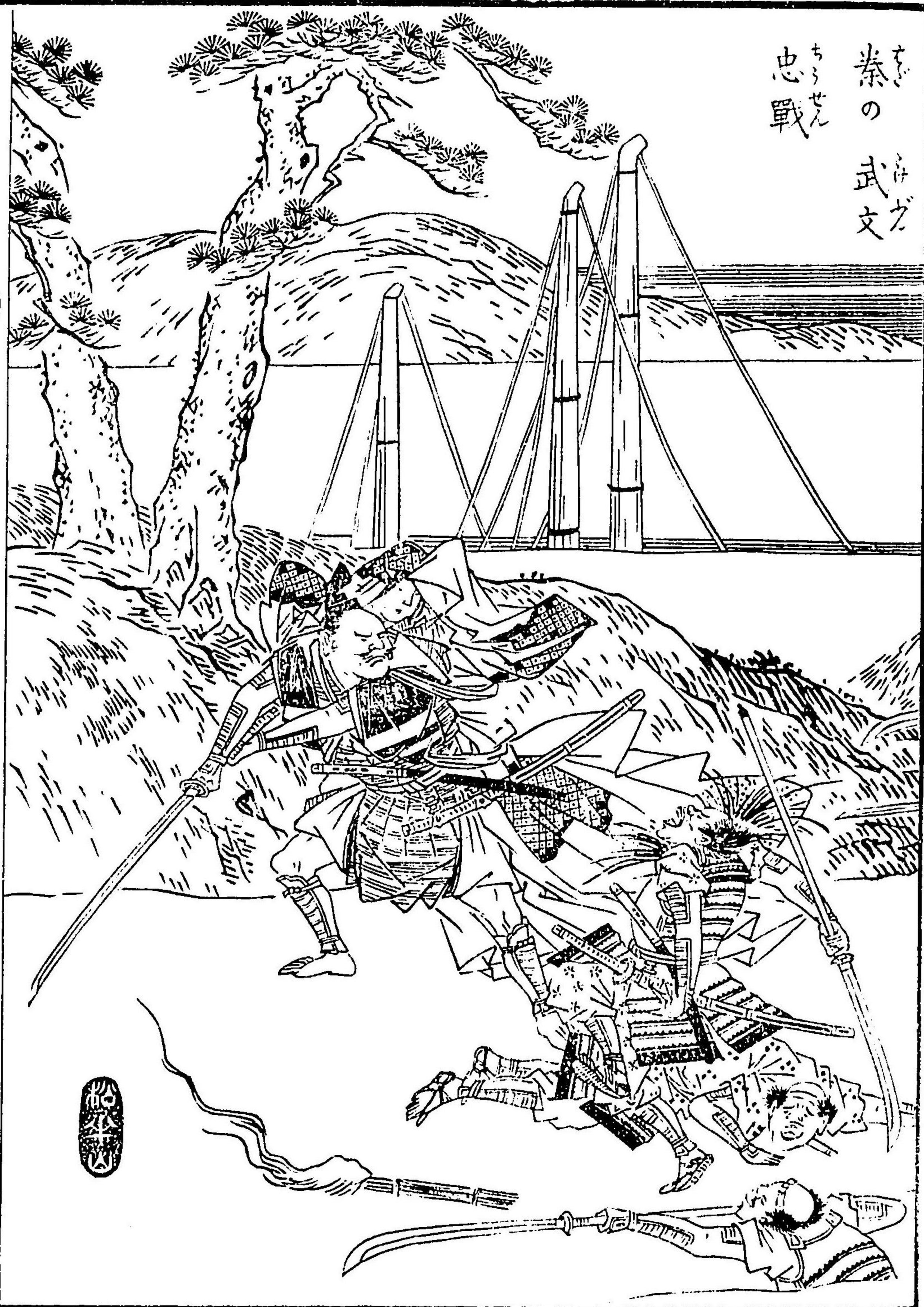
太平記曰又天下の乱出来つ一の宮ハ土佐の畑へ流され給ひ
御息所ハ獨都ヲ留すをひり明るもあはれ歎き沉ませ給ひて

多々世の別とありせば憂ふ堪ぬ命ゆく生れ逢ん後の契と憑むべき小
同い世多々海山と隔り互ひの風の便の音信とて書絶り宮も
君の御事御身の悲し一方あはれ晴やらぬ小又打添て御息所の御
名残これや限と思ひ晴る間もあはれ御嘆き論へり方もほし御
有さぬの痛く見奉り御誓言固候ひ有井の庄司何苦候ふ
べき御息所と忍んじ此へ入る候れ候らんと御衣一重仕立て道の
程の用意す細々と沙汰し進せられ宮限り多く喜しと思ひ
只一人召仕られ右衛門府生泰武文と申し隨身と御迎ふ京へ上せ
らる武文御文と給し急ぎ京都へ上り嵯峨の奥に隠れさせ給ふと
尋ひ行武文甲斐く御澳多んど尋ひ先尼が崎ま下り進ら
せ渡海の順風と待ち斯有る折に築紫人松浦五郎といひり
武士此浦に風と待ち居り御息所の御形と牆の隙より見進らせ
懸想し奪ひ取り下らると思ひこれ夜既深て人定まり程に成られ

松浦が即黨三十余人物具ひりくと堅めく續松浦火と立て部遣戸と踏
やうり前後より打つる武文強盗入ると心得枕立しる太刀とらう
中門子走り出く打入敵三人目前切卧せ椽上りも敵三十餘人大
庭へまつと追出く武文とりつ六剛の者此のつり二と多れ命失ふ盗人
どつと哈つて門の脇に立しる松浦が良等武文一人は切立られて
門より外へつと逃くつるが蓬ふ敵の只一人は切入とく傍を在
家は火を懸く又喚くぞ寄るる武文心の猛しとく浦風小吹覆
られ煙目眩く防ぐ様も無りけれ先御息所と撥負すのせ向ふ
敵と打拂く澳の船と招き何の船もめれ女姓暫く乗せしめて給
いへと申す門を立しる船もみそまう松浦が迎ひ来る船これと
向く一番舟寄へ差よせけれ武文大悦で屋形の内打置たり取り
落し御具足御伴の女房達も舟に乗んと走り取りけれ宿早
火無りく女房達もあく成り松浦の我船に此女房の乗らせ給はる然

べき契りの程哉と限りあく悦びく是迄が今の皆船に乗せしる郎等眷屬百
餘人捕めりも取あへば皆みの船は取のつる渺の澳に漕出く武文渚に
取り来り其舟寄られ候へ先は屋形の内安置進らせつる上臈と陸上
進らせんと喚りけれも耳を聞入ると順風は帆と上けれ船は次第に
隔るね又手繰る海士の小舟は打乗り自ら櫓と推つ何とも御舟に
追著んとしけれも順風と得る大船は押手の追付づけれは遠の沖に
向う扇とけけ招きくると松浦が船はとつと笑ふ声と聞け安うぬ者も
其儀あらば只今の程は海底の龍神と成り其船と遣まればのどと忿つ
腹十文字小搔切く蒼海の底を沈めく御息所へ宵の間の駭より肝心も御
身小るが只夢の心地く只衣引くさく屋形の内泣沈ませ給ふ見も恐は
くむつけ氣の髭男の聲最ゆるり色飽きく黒きが御傍にまう何とら
さのむつらせ給ふと松浦はまぐ御心と慰さむれも只消入るう伏す
其夜の太物の浦は碇と下りけれ世と浦風は漂ひる明は風と成ぬと帆と

忠の
戦 武
文



引梶とて漕出ぬ其日の暮程小阿波の鳴門と通す所小俄小風かたり鹽向う
此舟とて行遣は船人帆と引く近辺の磯へ船とよせんとされば澳の塩合ふ大ある
穴の底も見へぬが出来ぬ船と海底に沈めんと水主梶取周章と帆薦あんどど
投入く濁り巻せし其間船と漕通さんとて舟とて去げ濁り巻は随ひて
浪と共に船の廻る茶臼と推しゆく尚速うなり是は何様龍神の財宝小月と
かけられりと覺へたり何と海へ入ると弓前太刀刀鎧腹巻數と尽し
投入れども濁り巻めと尚休は御息所の赤袴と投入されば白浪色塵と紅葉と
浸せり如くあり是は濁り巻めり閉りし船は尚本の所へ回居り
かく三日三夜不成れば船中の人獨り起上らば皆船底に酔うと聲ふ
呼叶あて限りは斯る所は梶と一人船底より這出く此鳴渡と申へ龍宮城の
東門ふりて何れ候へ龍神の欲し給ふものと海に沈め候りし加様の
奇異の所へ候ふ是は何なる上臈と龍神の思懸申されりと覺へ候ふ
申すも餘り小邪見の情あり候へも此上臈と海へ入進らば百餘人の命と

助け給へと申す松浦の元来田舎人の無情者ありば此後同し既小御息所
と海に沈めんとせし所便船せし僧一人あり是と見れば松浦が袖と取りへ
如何なる御事候ふと龍神と申し無垢の成道と遠く佛の授記と得る者
あり候へば全く罪業の手向と受べりて生かす人と忽ち海中に沈めれ
ばのり龍神忿つ一人も助る者や候べき尺經とて陀羅尼と満く法樂に
備へらるる候へと然る覺へ候へと堅く制し宥められば松浦も理小折く
さう僧の儀付く初りとせよとて船中の上下異口同音小観音の名字と
唱奉りたる時より死の者ども浪の上小浮き出く見へり先一番小退紅着
たる仕下長持と昇り通ると見へ打失ぬ其次小白草毛の馬は白鞍置たる
と舎人八人して引く通ると見く打失ぬ其次大物の浦より腹切て死たり
右衛門府生奈武文赤系威の鎧小同毛の五枚甲の緒とち黄月毛ある馬小
乗りて杖より皆紅の扇とあげ松浦が船は向く其船とて招く
様小見へ浪底より入り梶取れと見え難と走る船は不思議の見あり

事り常のりみくくも是のりつらぬ武文が然矣と覚へ其験と申覽せん
とふ小舟と一艘つらつら此上船とのせ進らせ波の上小突流く龍神の
心と如何と申覽ひへくと申せば此儀けちもとて小舟一艘ひさありて水主
一人と申息所と乗奉りて渦の浪は漲りて巻却る波の上あぞ浮べり
如何は鳴門の浪の上の身と捨舟の浮沈は塩瀬はあざ泡の消あんる
あそ悲しけれされば龍神もあめぬ中とや去られん風俄に吹けけ
松浦が船ハ西とて吹れ行と見へるが一の谷の澳洋より武庫山あり
み救まて行方あざ成りて其後波静り風止されば御息所の御舟も来られ
つる水主甲斐く船と漕上を氷路の武島といふ所へ著奉り此島の體たたく
回で二里なれ所は釣る海士の家あざ住人もあめ鳴あれば隙あらる葦の
屋の憂節けき栖家も入進らせらる此四五日の波風も御肝消所心弱り絶せ
給ひり心あめ海士の子共迄も是は如何や奉らんと泣悲し御顔も水と濺き櫓床
と洗く御口も入あんどくれ半時がりて活きき給へりぬば涙の懸る御袖の

乾く向も無き蓬漏る滴藤草き忍ぶと旅渡あらぬ何ま角も有
侘と土佐の畑といふ浦へ送りもわれと打びを給へ海士も皆同心も足程
つらつ御渡りし上船と日ぬが船も来まらる遠くと土佐まで送り進らせ
候はへ何くの泊りあつら人の奪ひ取すのせぬ事の候へ去程は叶まれ由と申
せバ力あもせ給へばと波の立居も御袖と絞りて今年は此も暮給え哀れ
類ひも無りたり扱一の宮ハ武文と京へ上せられ後ハ月日と遙よ成ぬも何とも
御左右と申あへ如何ある目も逢ぬと静心かく思食く京より下れる人ハ
とこそ慥承りてと申され扱ハ道さく人ハ奪りぬる又世と浦風ハ
放れく千尋の底も沈ぬと一方あは思ひくられせ給ひく小或夜
御警固あつら武士も中門も宿直申く四方山の事も物語く者ハ
中ふさるても去年の九月阿波の鳴門と過く當國も渡り一時船の梶ハ
懸りし衣と取上り見く尋常の人の装束も見へ厳くく



みぞをもち
武文の怨霊
松浦主従
を悩ます

六十九

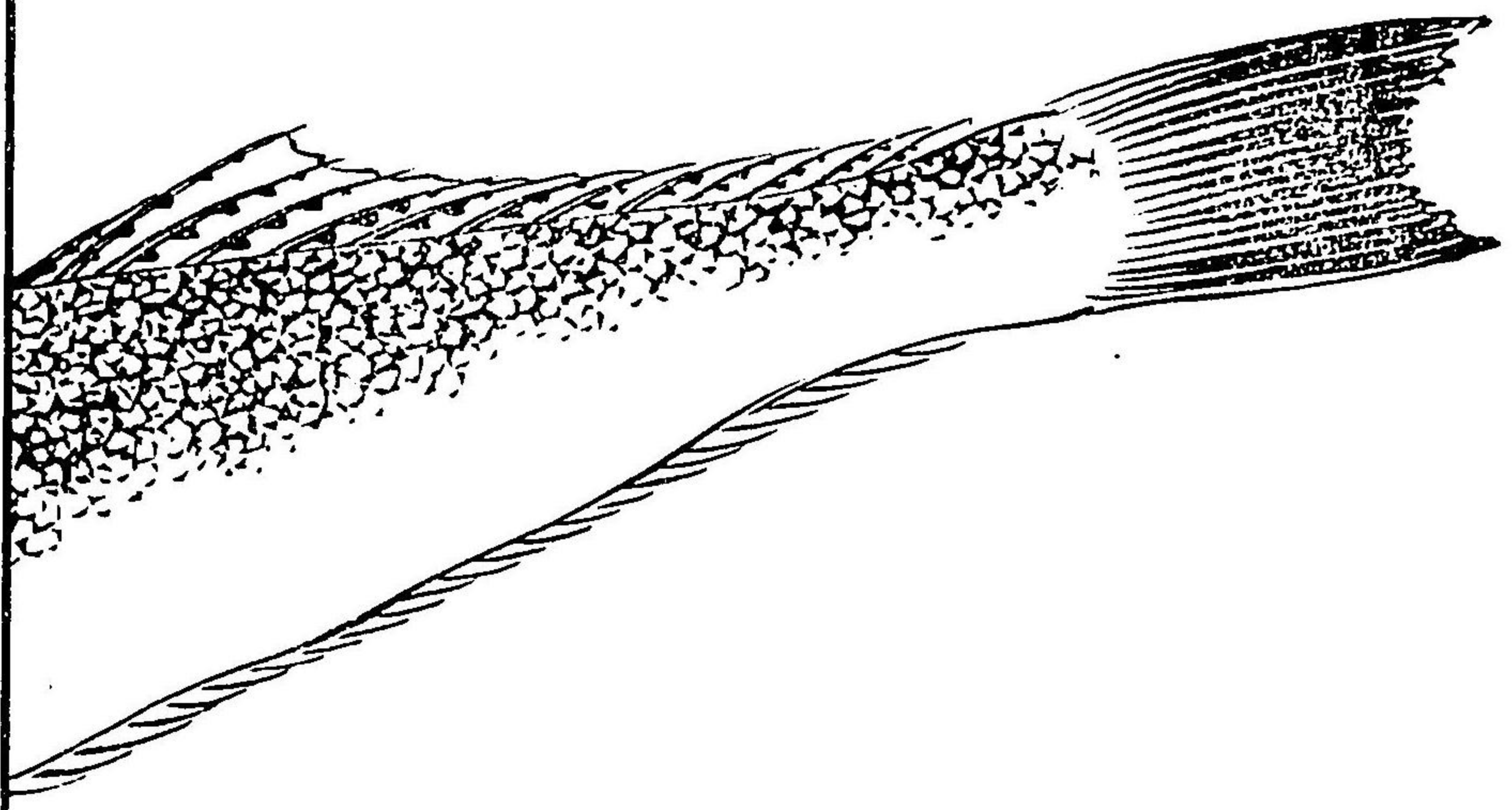
是のつとまは院内裏の上臈女房かんと田舎へ下らせ給ふ難風は逢て海へ
入給ひく其装束もぞ有らんと語て冗哀やあんど申合れは宮墻がらん
胸へ召ま若其行末もくや有らんと不審多く思食て聊御覧せられん
御事なり其衣のまごちる持く赤れと御使有るれば色こそ損じて候へども
未ご私小候ふとて召寄まのせしる官より是と御覧せらるる御息
所の御迎ひは武文と京へ上せられし時有井庄司が仕立く進せりし御衣
あり冗るぎやとて裁餘く切と召せしる差合せしる綾の紋少も
違ひは續きるれば二目とも御覧せられれば此衣と御顔小押當く御涙と
押拭くを給ふ有井も御前小候ひくろが泪と袖よりけつ罷立あり
去程不其年の春の頃より諸國小軍起つ六波羅鎌倉九國北國の朝敵
ども同時不亡ひへ先帝の隠岐國より還幸あり一の宮へ土佐の畑より都へ
飯りへらせあへ天下悉く公家一統の御世と成る目出度かりしども一宮
たご御息所の今世かすまらぬると歎き思ひくろ河小終路の武島に

赤ご生て御座つりと胸へたれば急ぎ御迎いと下され都へ飯上らせ給ふ
然るに中一年有て建武元年の冬の頃より又天下乱ましく公家の御世武家
の成敗は成へく一宮の終は越前の金崎の城より御自害あり御息所の御
歎き日毎小深く御心地づらひ御中陰の日數いまだ終らざる先は墓をく
成せ給ひくろ

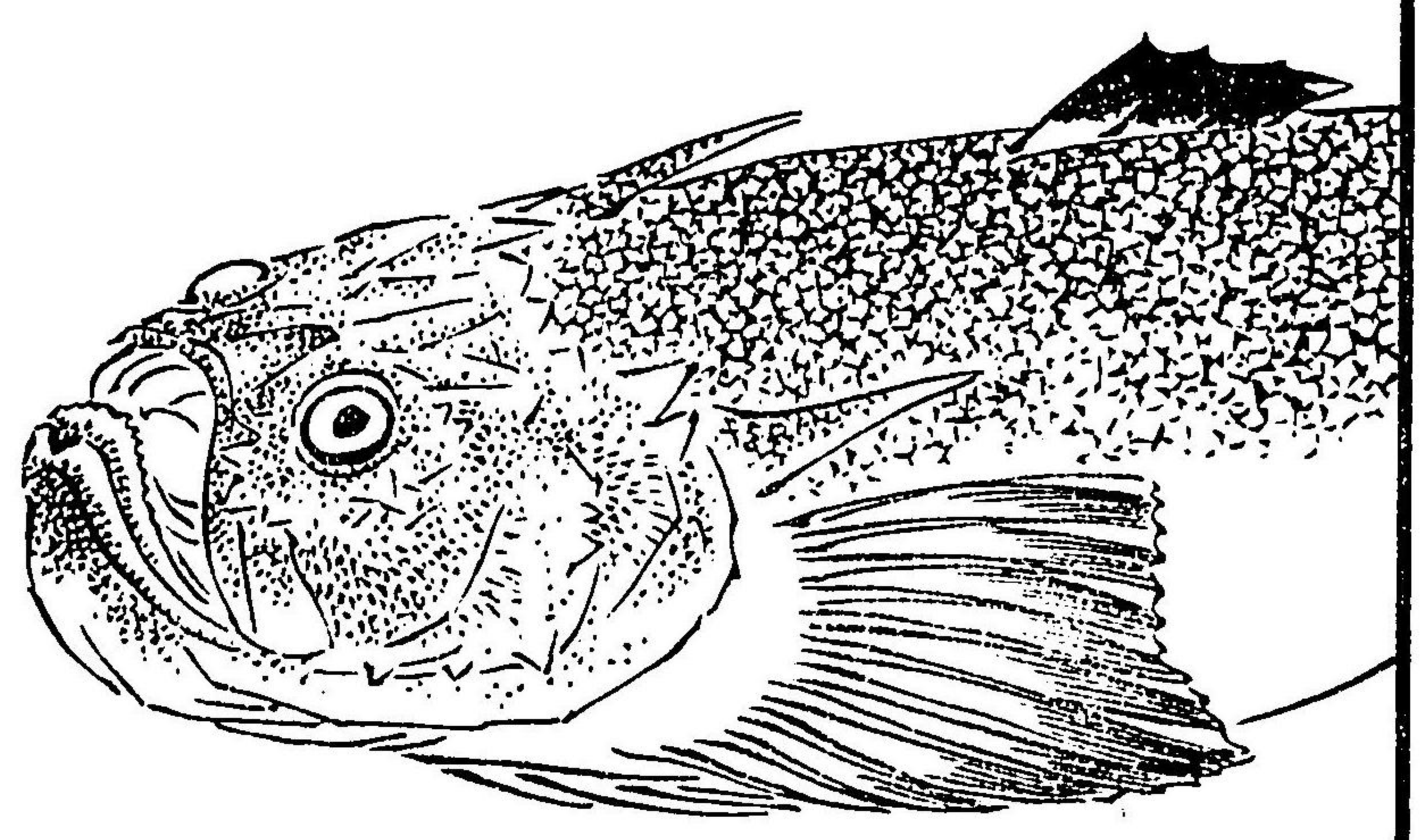
按ずるに一宮の尊良親王の御事より一品中務卿あり後醍醐天皇第一の皇子
あり御息所の御匣殿も云右大臣公顯公の女あり然る小又異説あり
増鏡曰中務官尊良の正成補が許小ありははつれど帝の後醍醐あり斯ありせ
者の家小も今甲斐ありとて夫も都へ入せあり佐々木判官時信といふ
よのうさと空もあや神毎月あとり過るる時雨か
此御子の尊良藤大納言為世の孫あり給ふ彼家も常へ住あり
程小大納言為世の女大納言典侍尊良の叔母君と胸より小御覧せられし其御腹

武島女郎之圖

此魚當沼島亦多く有りて其形
 凡そ銅頭魚保字婆字又ハ藻伏魚
 鱗等不類す大抵五六寸有り一尺
 の者多し世人これを武島女郎といふ
 他所不ふさ魚ある故に名産とす
 里俗傳云一宮尊良親王の御息所
 沼島おましますこと三とせの後都
 より迎へられし時波風不阻てらきて
 舟を覆せんとを得て衆人のつらく
 海神御息所の皈洛し給ふ名残と惜



み船をとむるものあらんと此時御息所
 づから筆をとつて醜き女の像を画して
 海に投入給ひ醜くして惜むたりとて
 示し給ふ夫より風和らきて舟難なく
 出たり其画像を感じて此魚生む故に
 これを武島女郎と号くとも尚此余諸
 説ましくあつたらん何れも附會の妄
 説あらべし



小姫君あどろき給へり又中宮の御匣どのの宮の御せうとの右大臣公頭と聞へし
 御女なり其御腹も男御子なごもりまほ思ふすある世も待まらんと
 誰も行末の思ひ聞へる小斯思外は浅菘きよの出来ぬ猶う思ひ
 なびく人かどさび御匣殿へせ給ひら此あらうの典侍の君との又
 なごのふ覚へる吹風もほらう程よあすれと御對面
 あゆいもよら云云
 同所より御息所の絶ゆる時海士の子共ホあさうとて御顔の水でそが御口入奉りしと
 清水 太平記に見へる其水ありといふ
 尚此余奇石怪巖よりこれと畧は是より又本の土生村ふら
 阿萬郷遺趾 今阿萬西村東村ホ其名と存り或ハ安摩安間とも書う
 郷ハ廢してあり

和名類聚抄曰於路國三原郡阿萬 阿萬
 本莊溪 水源ハ新田の山向より出て伊賀野上本庄ホより塩屋より西村川合て海入
 龜岡山八幡宮 上本庄村より鎌倉鶴岡の效の号けありと云別當神宮寺守護の寺内小
 觀音堂あり當國州三所の内之此余村中小河内社御鐵社あり
 神庫奉納佛經

華嚴經 五七卷 大集經 三十卷 涅槃經 三十九卷 般若經 三十一卷
 目藏經 二十一卷 法華經 七卷 梵網經 一卷 瓔珞本業經 二卷
 像法決疑經 一卷 觀普賢經 一卷 無量義經 一卷 以上十二部都合百九十二卷
 一函小入函小記一と曰
 元亨四年甲子五月十四日奉入之願主淡路大夫判官入道沙彌密建
 法華經 八卷 觀普賢經 一卷 無量義經 一卷 以上三部とも紙金泥
 一函小入函小記一と曰 沼島住人梶原越前守平俊景
 永亨八年丙辰卯月奉寄捨阿萬本庄八幡宮
 大般若經 六百卷 函小記一と曰

寶徳二年庚午卯月願主橘正時藤原久長桐田守長宥實宥傳

葛原薬師堂 上庄利葛原山より本より薬王佛へ施主監物兼官佛工善慶作と

阿萬城址 右同村の北の山より菅構の時代詳なり阿萬六郎宗益後一卿丹後守ありと云

里老の説は細川彦四郎居城もといふ傳ふ或ハ細川丹後守其子備前守相継居りと

の養宜屋形細川成春も初彦四郎と称し系図不阿萬も其氏族かゞゞ備前守沼嶋の
城主梶原が為小害せしむるといふ傳説あり

細川氏守護職たる時小阿萬も氏族居住し地頭となりたるべし應仁乱後より争戦
絶ざりし小三好氏起りしより當國の細川氏皆消滅し沼嶋の梶原も三好ふ力

せしあづべしといふ

按阿萬のむじより武人の多き住せし処と見て太平記にも阿萬志知の人とあり阿摩六郎かどもあは住せし
平家物語に阿波國の住人安摩六郎忠景あれも平家と背て源氏ふ心と通じ
たるが大船二艘ふ兵糧米と積武具と入都とて上りたるを能登殿福原とて此
由と聞ひし追ひれども安摩六郎叶はしと思ひん和泉國吹飯浦に指籠り
紀伊國の住人園部兵衛忠康といふ小成て城と構へ待たりし能登殿推寄て
攻めし安摩園部身より逃る京へ上りし見たり
源平盛衰記鎌倉實記等も終路國人安摩六郎宗益といふ園部兵衛と
重茂ふ作たり

太平記に延元元年官軍山門より阿波終路の兵阿萬志知小笠原の令三千
餘騎官軍小加らりし諸卿甚ど喜べり又曆應三年四月服屋義助勅と奉りて
伊豫國小下向し四國西國の大將とある義助吉野と發し紀伊國小至る熊野
別當港答等兵船と調へ義助と終路の武島小送り安間志知小笠原の一發
城と武嶋小構へ居りしが又兵船三百余艘と調へ義助と備前の小島小送り

阿萬西村川 上本庄村の奥より下本庄と経る西村より海へ入

同東村溪 東村の奥中の河内より村の西より海へ入

茅草嶺 同村の東中の河内より土生へ越る嶺といふ

潮寄 仁比村より河内の東村と仁比の間の海へ岬あり

山家集 小鯛ひく網のうけ繩よりくめりうさ仕業をり汐寄の浦 西行

櫻井清水 下本庄村より清泉ありて甘味あり清水の傍辺に奇石と積り樹木とあり景色りつとあり

清水薬師 同清水の傍に堂あり薬王佛と安ん又堂の傍に草庵あり薬師菴とあり清水の辺よりあり

光明寺 塩屋村より本寺阿弥陀佛の安阿弥の作といふ真言宗へ

吹上濱
ふきあがりのま

潮寄

菖菴
青岐

吹上や砂の
下ゆく
秋の雲

東のくま行脚年を経て

田舎かたし

はゆる

天恵

久々のあまの嵐

まろく

うははは

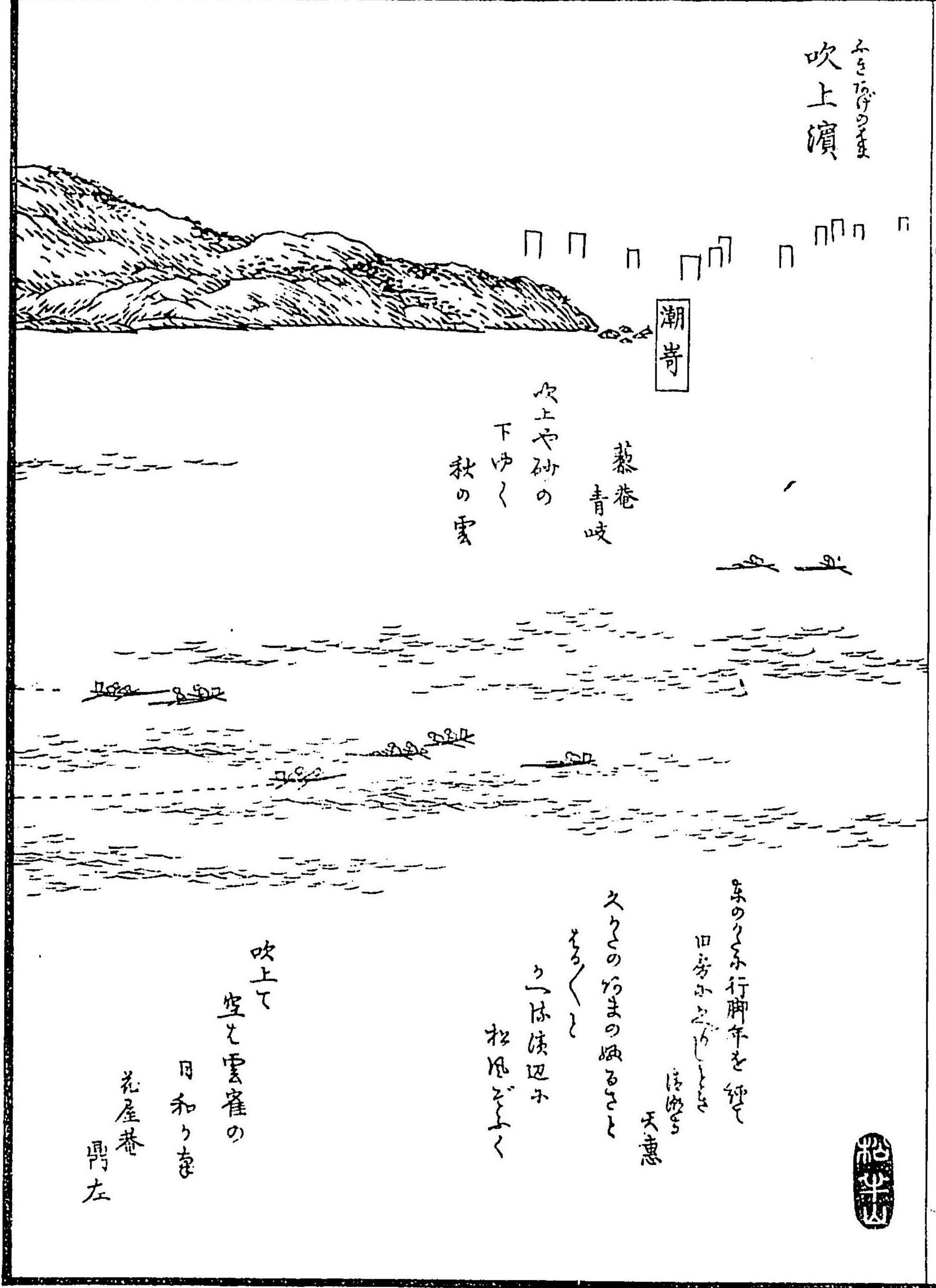
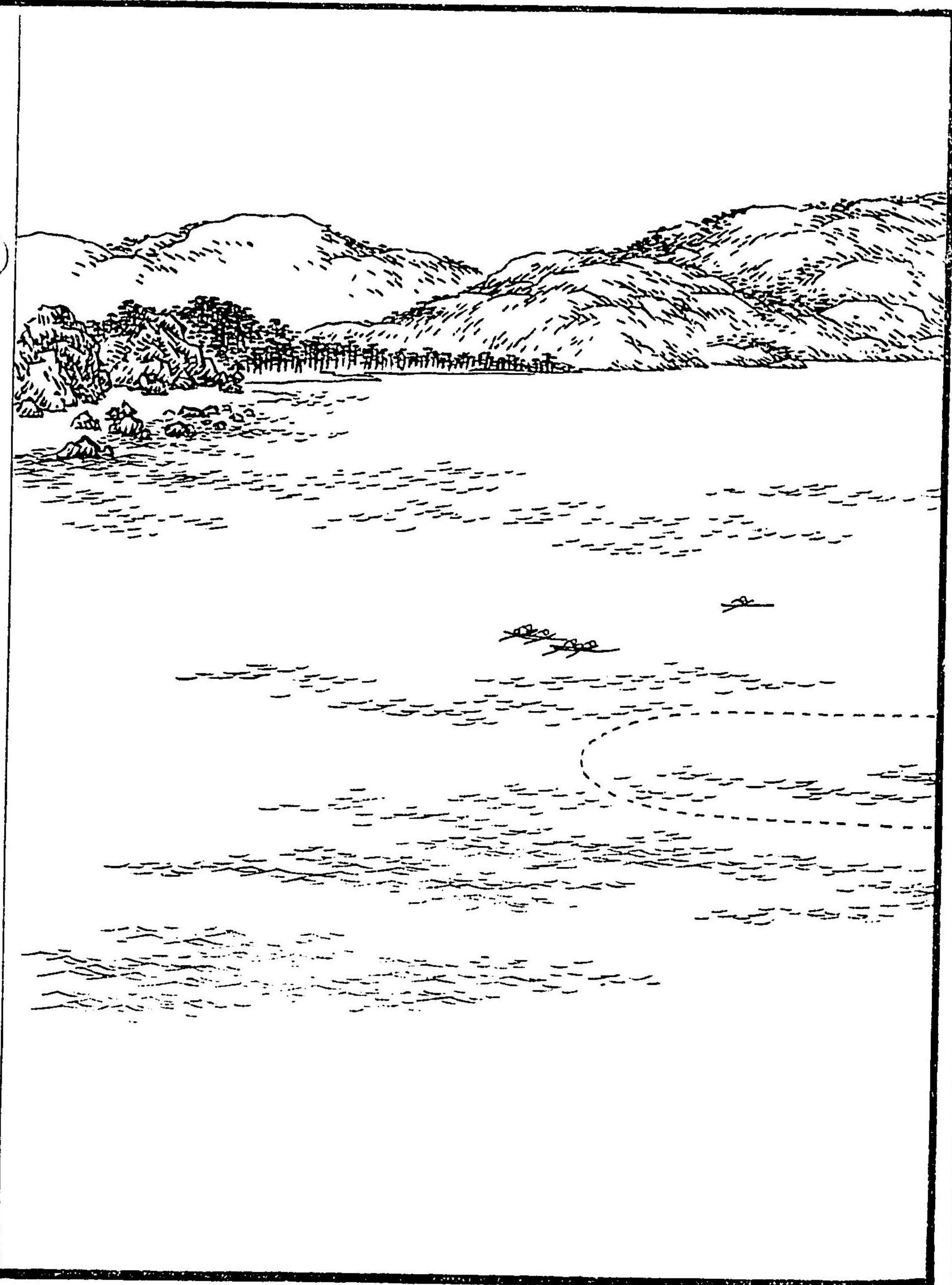
松風ぞよく

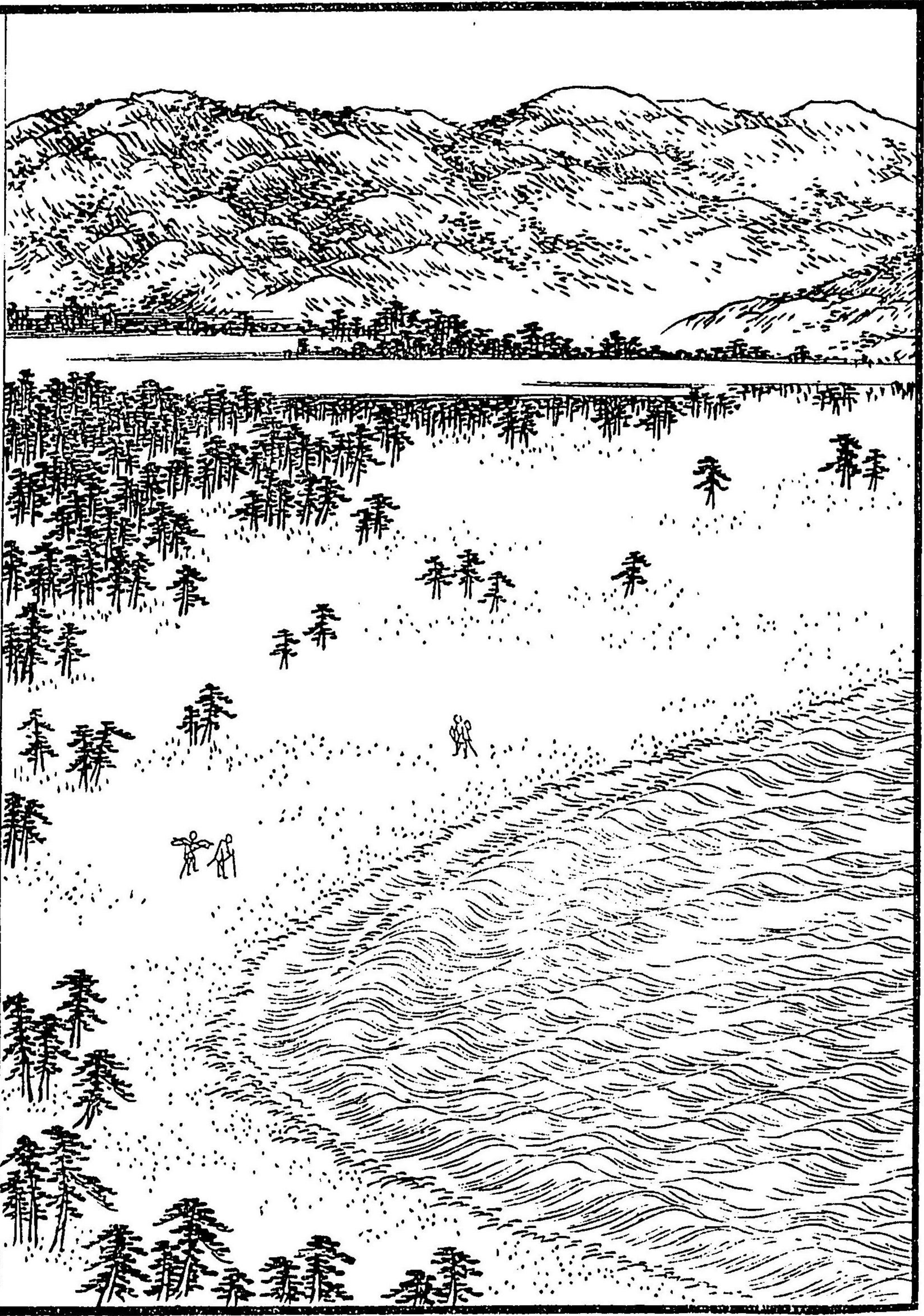
吹上て
空と雲雀の

日和り春

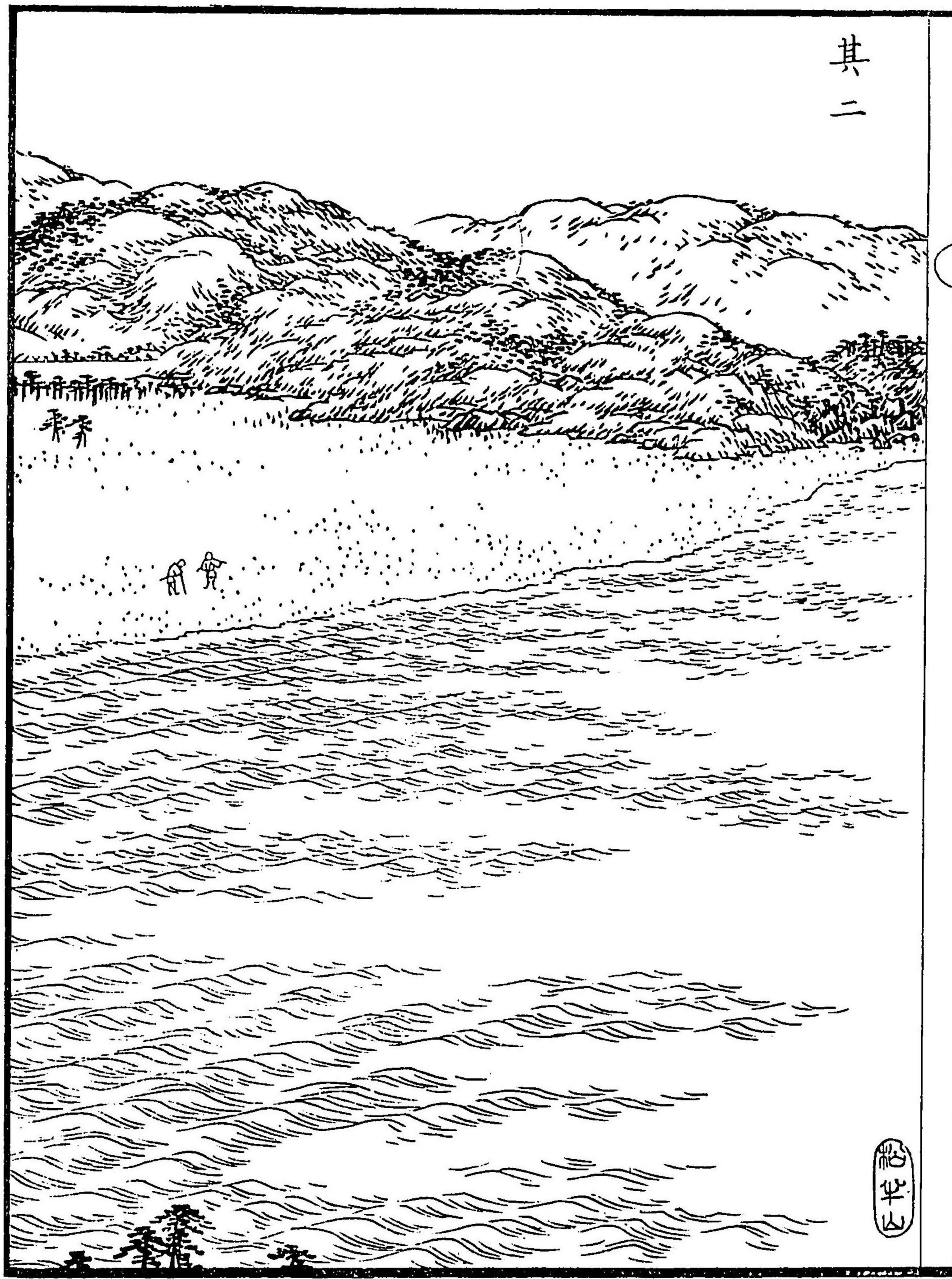
花屋菴

再左





其二



三十四十九

三十四十九

田尻寄 吹上村の西の出崎とつゝ福良の港口の東蛇の麓の濱よつづく岬あり

葦生の濱 吹上の濱より吹上村塩屋村等の海濱まで一圓小白砂の遙に松樹列り生て最絶景あり夕風常小白砂と吹上敷町の向樹木生るこゝ吹上村の名こゝに起るもの

其濱の松蔭小生ぶら松露の色白く味甘美みとて香よきもの他一異あり阿波第一の名産として吹上の松露と称し又砂中不防風生し磯菜も神馬藻もと尋ふらり

尤浦の眺望ハ風景絶勝あり

真砂ももよりの濱のよりの有る埋れぬ名と世々かきくふ 山口敏樹

藪内山 伊賀野村の西より周廻三町余高サ八間許山上不樹木茂々として神まびさう

伊賀野陶器竈 川の村より俗に明平焼といふ

此竈山の辺せより閑閑なる所ありと往昔より仕來りし瀬戸唐津伊万里の産ふかり凡そ名器と譽はる妙と得たり或は南京交趾阿蘭陀其餘種々の異國の陶器何れもよび出来ざるものなり尤幕々其真偽と辨難し至る実一奇の名産之故小雅俗あざむく是と愛説さると以て諸國に運送し高き器程小工人の職場に範不入造るは轉釣と名づけて製するあり素焼の器物不書畫と絶せむ世々不銜装

とわらるるの庭方庭土とて或は水干一着の練りり数尋の工入夫々の業に

寸隙なく最繁多なる目覚

筒井清水 筒井村より清烈して甘味あり井泉ありとあり村の名と筒井といふと筒のより凡そ三尺寸

牛頭天王祠 同北二町ありあり行者堂荒神祠観音堂等社地あり

薬王寺 同村より本尊薬師佛行基作と云真言宗

福井河 水源新田北村の山中より出り生子ふりり福井の真幸の池は今福井より野田村集集中村の

大日寺 椽樟山通明院とも云ち内小樟日命の祠熊野三所祠鐘堂あり堂前楠の木枯木

鍛冶宗長遺跡 鍛冶屋村より一へ名鍛冶の所は居住するを以て村の名とす

嘉吉二年賀集庄宗長名鍛冶畠雜免鍛冶刑部知行とて吉福良石見融通

加集治郎左衛門康愛久米但馬明珠連署の状あり亨徳二年宗長名鍛冶免畠の

目録道隣花押あり永正壬申年同く鍛冶屋敷の事海老名加賀入道宗順

石井彌四郎國久上使永兼連署の状あり又正中二年相模守修理太夫連署の状

ゆり尚此余雜免古文書數里正の家所傳以事繁々れ畧之

按小浜路國小建武の頃國安といふ名鍛冶ゆり路末と号を又路房といふ

其子國長延文の頃摂津國中島小住を其子小宗長といふゆり應永の頃菅原

と打應安三年小生れ應永廿九年小死に廿三才と鍛冶系圖不見えり連署の

狀の年号嘉吉亨徳永正右宗長死後二十年の後又正中二年宗長の生れ應安

三年より四十五年前あり然れば此宗長の前後の人あり又同名の人あり

福岡一文字系圖云宗長 宗吉弟久安五生 承久三死七十三才 長船物系圖宗長 將監長光房子正應元生 曆應二死五十二

若狹國宗長 應永の頃 京島羽鍛冶 宗長 正長頃 宗長 康正の頃

古城趾 同村の西南ニ里漸ゆり傳云城野右近居住の時代未詳

同 同村の西の山にゆり賀集備後守の孫右近居住のゆり或云右近此山の頂き小廓をけり居住せり

等の趾も見えり此地より四方の眺望とてゆり

賀集氏第地址 同村の北にゆり備後土居ト云賀集備後守居宅の趾ト云

常磐草仲野氏按小嘉吉中賀集二郎左衛門康愛ゆり應永小賀集庄高陞

親忠又長祿小賀集美濃守公文文明中賀集美濃守高階安親等ゆり

賀集本之助盛政天正十一年賀集郷と去り北國小赴く時年月と石小彫り遺

り青木村ゆり又書留一通ゆり曰

此れゆり藤原氏賀集美濃守公文之末葉をり然る小此美濃守三種の

直判三箇の子孫ゆりゆり其一と得て貴び守る今大君小隨く他は行あ

ゆり汝小此相傳の手判系小家宅財産等ゆりゆり先祖の恩と報ゆり

天正十一年八月二日藤原朝臣賀集廣之丞及藤原朝臣賀集本之助盛政

又藤原朝臣賀集美濃守公文書一通ゆり畧之

按小賀集氏ハ世々賀集郷の采地ニ居住の地士と見へり但し高陞と藤原とハ別

姓あり混雜せり不審足利の代の末ゆり三好氏小降りり舊地小居住せり

信長の時天正九年秀吉當國と平治せり砌地士の采地ハ皆没収せりあり此時

盛政も他國へ退去せりあり

萬福寺 同村ゆり賀集山と号の本寺蒸師佛長三尺許賀集家の墓其餘古墳あり

三善備後守墓

賀集盛政の兄あり
常盤草よ言へり

賀集右近墓

天正九年

賀集主馬墓

慶長十三年

賀集宗左衛門墓

慶安三年

其人名不分明あり
天正慶長の古石あり

當麻氏御墓

鍛冶屋村と筒井村の境より丘の上は古松三四株傍に石燈籠一基あり今此禁に鍛冶屋
筒井三社御堂立會の三昧とあり民家の石碑許多列り俗に女大三昧とあり又字を
馬目とつゝ此小丘は天王の夷廢帝の陵より七八町許南より丘下小池あり馬月池といふ當
當麻氏の廢帝の御母あり高井凡七間許周廻凡半町余

延喜式諸陵寮曰

淡路墓

當麻氏在淡路國三原郡兆域東西二町南北二町

守戸正丁五人

當麻氏名へ山背といふ上總守從五位上老の女あり舍人親王

天武天皇

の妃あり

皇子

當麻氏の御母あり天平宝字八年當麻氏廢帝といひ當國に配流せられたる身没るは年月詳あり按る廢帝紀

後程なり幸へり

廢帝の墓を山陵と稱ふべき勅詔と

御墓と稱ふも同時あり續紀に見へり

賀集郷遺趾

今賀集中村其名のり

賀集中村は福良街道の南傍あり

和名類聚抄曰淡路國三原郡賀集

加之

賀集河

筒井村の山中より出

鍛冶屋村賀集中村八幡村の橋下とすきて西山南村同中同北を

廢帝山陵

賀集中村より今天王の夷といふ又杉尾の夷といふ

山陵の高さ凡六間より東西短く南北長く周廻凡六町余緑樹森々として

殊勝あり其東面へ山小添く池あり丘陵の上は廢天皇の社あり今牛頭天王の

祠と稱ひ諸陵寮廢

山陵と守る人もあ

成ゆれ

終は其名実と

失い今へたが牛頭天王の祠あり

思ひ違へり社の

南の方小最高き所あり

此所を

尊棺の藏あり

所あり

常盤草小見へり又安澄の按み

此天皇の表池水浸

山の丑寅は茂樹

の

頂上

三方

の

廢帝の山

陵あり

と云

延喜諸陵式曰

淡路陵

廢帝在淡路國三原郡兆域東西六町南北六町

守戸一烟

遠陵

兆域は陵の境内に守戸一烟と守る百姓遠陵といふ皇都より路遠き

守戸一烟

遠陵

守戸一烟

遠陵

守戸一烟

帝王編年紀曰

廢帝御年三十二奉葬淡路國三原郡

一

一

一

一

一

一

一

一

一

前王廟陵記曰 淡路陵廢帝或曰神宅東二十町許

按淡路國の古圖小洋名郡多賀村の地と神宅村とあり然れば此天王末次と大不
遠へ一多賀の東より早良太子の陵あり土人誤つて廢帝の陵といふ松下翁子の里卷の
説を聞く記されたる俗傳の誤なり廢帝陵ハ三原郡と諸寮式は明白あれバ津名
郡亦有之と云あり

廢帝諱ハ大炊王天淳中原瀛真人天皇天武の孫一品舍人親王の第七子也母ハ

當麻氏名山背とり上総守從五位上老の女あり時ハ天平勝宝孝謙八歳皇

太子道祖王天武の孫 新皇の子諒闇の中心感めり在ハ其故より同九歳三月廿九日高野登

諸臣等と議しく皇太子道祖と廢して弟小還らり四月四日遂ハ大炊王と迎へ

皇太子とハ時ハ年二十五なり天平寶字二年八月高野天皇孝の位と受禪あり

即位續日本紀

萬葉集卷二 天平寶字元年十月十八日於内裏肆宴歌天平勝宝九年八月十八日

天地乎弓良須日月能極奈久阿流倍伎母能乎奈爾加於毛波牟

右一首皇太子御歌廢帝此事續紀ハある

天平寶字五年冬十月都と近江國保良小遷一天皇孝保良宮小行幸あり

同六年五月高野天皇孝帝と隙あり是より車駕と平城宮小還と帝ハ中宮

院高野御一高野天皇ハ法華寺小御ハ六月太上天皇孝詔しく曰朕菩提心と發して

出家ハ但一政事ハ常禮の小事ハ今の帝行ひる國家の大事賞罰の三柄ハ朕行ふ

と同八年九月太師惠美押勝逆謀頗る油高野天皇山村王と遣り

中宮院の鈴印と收めしむ押勝これと聞て其男訓儒麻呂等とて邀てこれと奪む

介高野天皇と押勝爭戦しく終ハ押勝近江國小走る官軍これと追討ハ

數回合戦り後押勝敗軍し亡び畢ハ斯程ハ十月高野天皇兵部卿

和氣王左兵衛督山村王外衛大将百濟王敬福等と遣一兵數百と率て中宮

院と圍しむ時ハ帝遠の事あれ未衣履及宮中候人皆逃失ハ

帝御母山村王と小侍臣西三人相具し圖書寮の西北の方小到らせり山村王

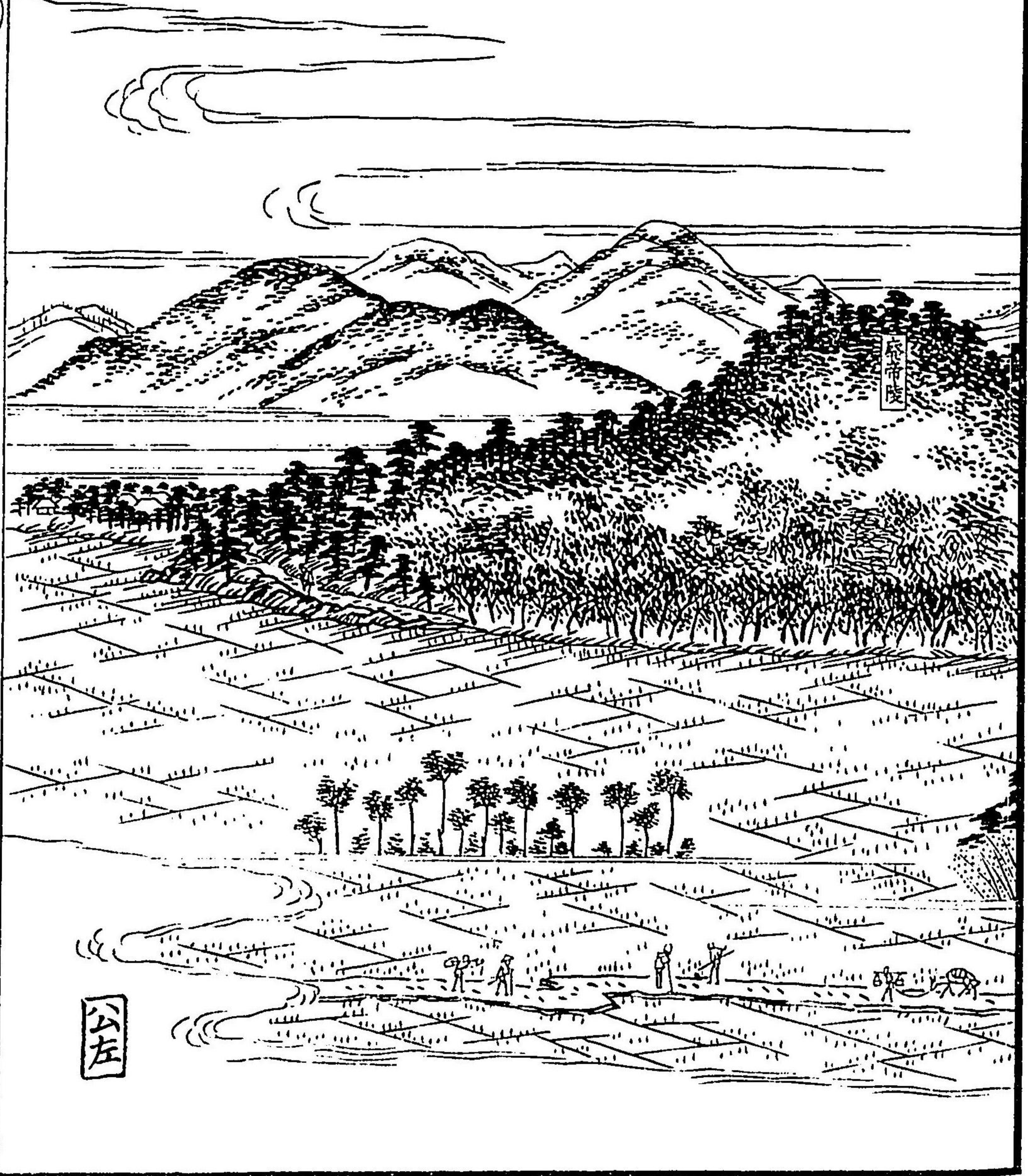
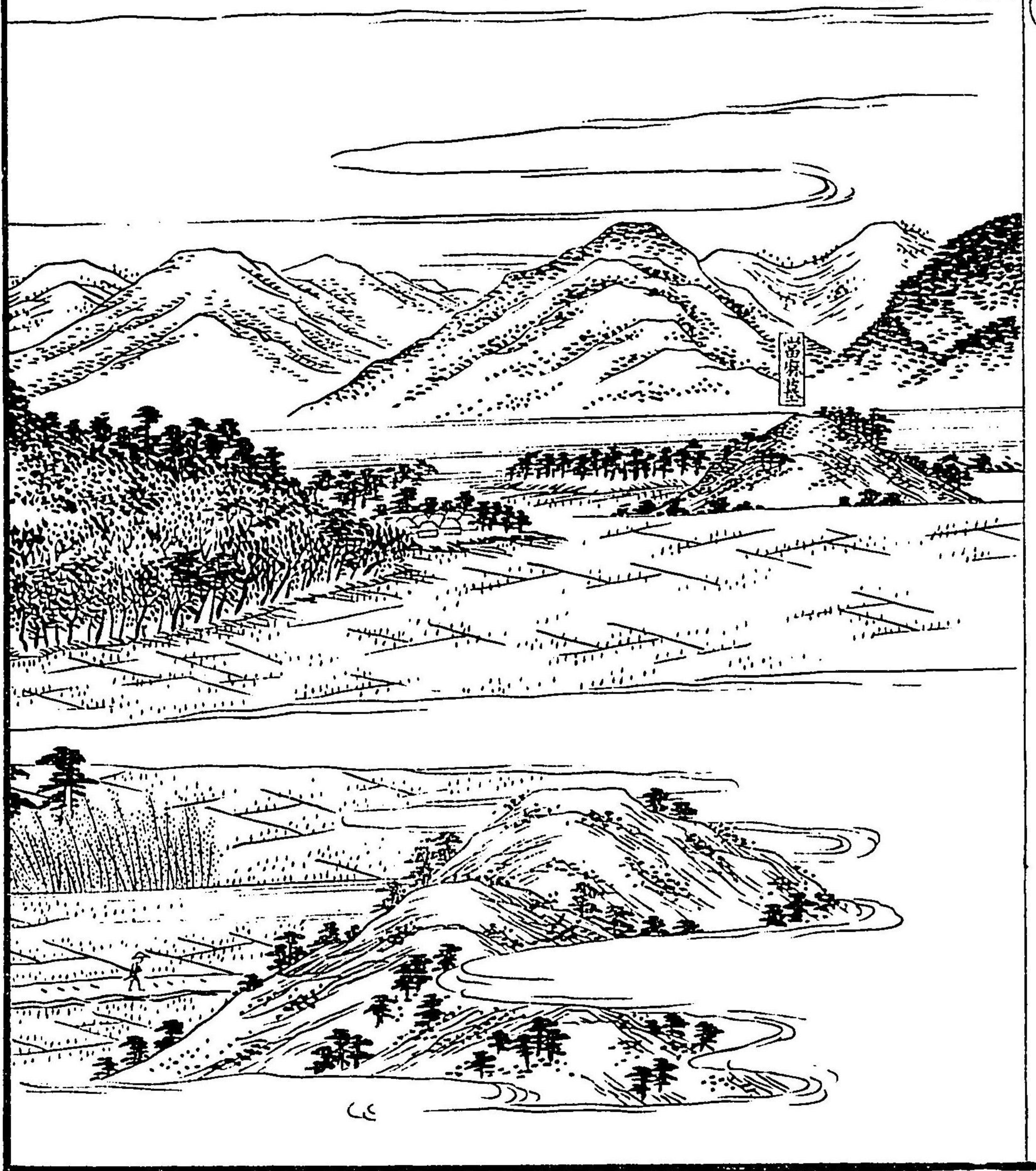
とて詔と宣て曰帝位とたれより器如押勝と逆意と

企て朕と害とんと謀りあり安らば是より帝の位と退け親王の位と賜つ

淡路國の公と退ける人と宣命畢つて公及び其母と將て小子門小到り道路の鞍馬と

ちからくさ
從福良街道
天王森眺望

天王の森と福良街道
の東ふつて緑樹
森々と生茂りて其
光景殊勝あり是則
淡路廢帝の山陵あり
とぞ實さも有べく
覺ゆ丘陵の上は天皇
の祠あり今牛頭天王
と稱し祭より御母公
當麻氏の墓もこより
凡八町より南ふかり



公左

庸ひくこれと騎せ右兵衛督藤原朝臣藏下麻呂配所小衛送り一院小幽居せむさる
程に勅し曰淡路國と以て大炊親王帝賜ふ國內有とらるの官物調庸等の類ひ
其所用不任但一出奉の官稻ハ一常の例依べ一云

天平神護元年改元 二月高野天皇孝謙重祚と号し 淡路國守從五位下佐伯宿祢助に

勅し曰風聞彼國不配流せ罪人稍も逃亡んと致ひし此事の實はあらば
何以て奏せざる汝朕が心と簡りて往て彼を監よ事の動靜かかば早く奏せよ

又聞諸人等商人と詐し稱して多く彼部に向ふより國司これと察せざるが遂は以て
群とあはべ一自今以後一切これと禁斷せよ云云同三月又勅して詔ふ復有人も

淡路小侍坐る人と率の未つとて帝と立ち天下を治めしめんとな念ひて在人も
あつし然もども其人ハ天地のうかき免しと授け賜ふ人も在る何と以て知

らん哉志愚心善らびして天下と治るに足ば然のも在る逆悪き仲末呂と心と
同やと朝廷と動し傾んと謀りてある人あり何ぞ此人と復立んと念らん自

今以後如此のひく謀るとと止すと宜ふ云云同年冬十月淡路公帝幽憤小

勝もいびして垣と踰て逃れ給ふ國守佐伯宿祢助椽高屋連並不等兵と率て
これと邊り止めしん公還るとひく終は翌朝院中不薨しあひぬ 以上續日本紀 大意

一説小夫ハ弒し奉ると云 御年三十三在位六年あり

按小其初め藤原朝臣仲麻呂 内大臣鎌足の曾孫大政大臣 高野天皇孝 小寵とれ惠美

押勝といふ名と賜りてが子削道鏡禪師愛せられしう押勝が寵おとらふれ

ハ押勝志をく怨むと含み密小孩心の企つりしに此事終露れれ亡がする大炊

の帝帝御料とて有きとあはれども原末仲麻呂が第とて成長せよ帝るれハ

心ゆくとあてや天皇孝 道鏡と共に謀らひて斯ハ此國を退けしあふや天平

宝字八年十月遷幸ゆりて翌天平神護元年十月崩しあはれ凡一年たり

此配所ありありとあり一説ハ守護の人は弒せられしひくも言ふ実ハ
さも有ぬべしとも想像す

光仁天皇寶龜三年 天平神護元年廢帝 崩御の八年以後 從五位下三方王外從五位下土師宿祢和麻呂

あはれ六位以下三人と遣し廢帝と淡路小改め葬らるるも又當界の衆僧六十口

と屈して齋と設け行道せしむ且當所より年ゆくして淨行する者二人を度々
常小墓の側小廬して功德と修せりめり云云

同寶龜九年三月勅詔りつ淡路親王墓と云宜しく山陵と稱し其先妣當麻
氏の墓と云御墓と稱さる又近所の百姓二戸と宛てこれと守らむ
保元物語曰崇徳院讚岐國へ遷幸の條かこの淡路國と聞しやせば大炊廢帝の
遷されし思ひ耐び幾程かくらせりひく島小あそと昔ハ余所
聞しカローりとも今の御身の上思し召さるるを哀れられ云云

一説ハ淡路廢帝陵ハ十一所村の野邊宮の地ありと言ありとせども彼地ハ
山陵といふべき形更不見へば殊小光仁天皇寶龜三年みあり改め葬らせり
其後山陵と稱せし給へば疎ありべきにゆへ三原郡中山陵といふべし處當
地の外不見へば頗る山陵の形備り且天王の森の遺名旁以て此地淡路の陵
ありと疑ふべし 常盤草 みののべ 尚野辺の宮の按ハ其處小委し記せり
右山陵の上より世俗牛頭天王といふ

淡路天皇社 例祭正月八日十月八日

古城蹟 同村の南あり城の腰といふ鍛冶屋村の境ありて封疆周廻小塚の形存りて
一説ハ古城主ハ賀集備後守ト云永祿年間鍛冶屋村西山の城に住後此地移り

古廓趾 西の山の東の方より廣く二及許備後守が子刑部同二男志助盛政が住り
又賀集美濃守が支り盛政が數世あは居住り

八幡橋 八幡村八幡宮の鳥居前賀集河二架ハ則ち福良街道より板橋あり此地ハ八幡宮ありと以て村の
賀集山八幡宮 殿舎ハ邦君より宮建りて境内殺生禁斷し

本社 應神天皇 攝社 丹生明神 本社の右に列は旧ハ福良の浦の水神と云
荒神祠 丹生の社の 拜殿 兩社の前 放生池 拜殿の長あり

例祭 三月十五日十六日 十一月一日 八月十五日 騎射の式あり 氏地 立川御村
賀集中村 西山三村 福井村 等十ヶ村より 順番小馬五疋を率來りて神事の式と

勤む其内あり神馬と稱する者一疋あり是を引く本社を周りと廻ると
例は此日遠近より糸清群集し最賑し

護國寺什寶廳宣一通

廳宣 留守所

可令早引募一二宮法華櫻兩

會舞樂料荒野拾町事

右兩會舞樂料田荒野拾町可引募

東神代八本兩郷之由去子年雖被成

下御廳宣伴郷等並催促之田代云々

早令開發復列并西神代之荒野

可引募彼料田之状仍執達如件

留守所宜承知敢勿違矣以宣

元久二年四月

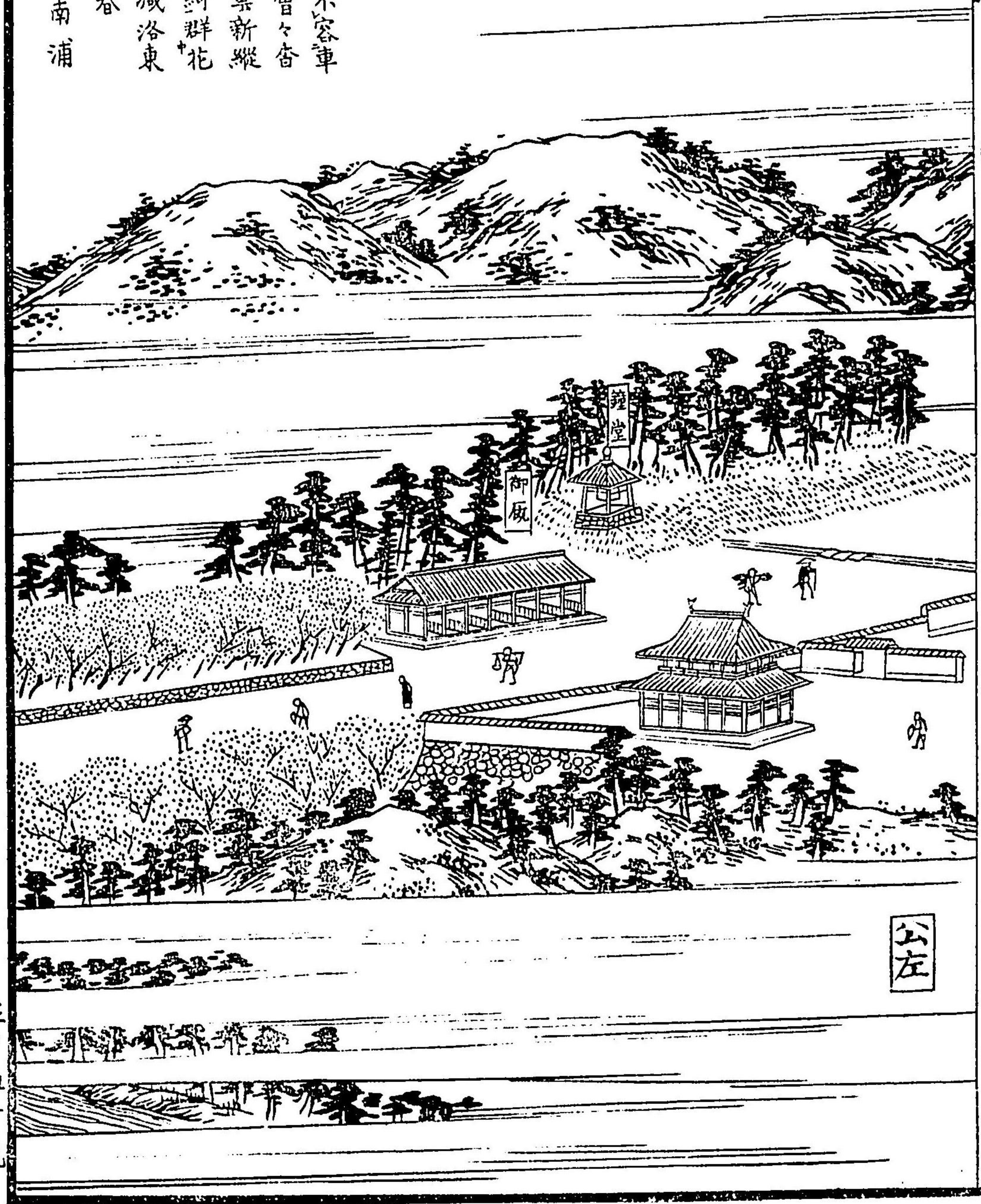
守藤原朝臣 在判

○元久二年ハ八十三代土御門院の所守也



賀集八幡宮

馳道不容車
 馬塵層々奮
 閣白雲新縱
 吟羅綺群花
 下何減浴東
 華頂春
 南浦

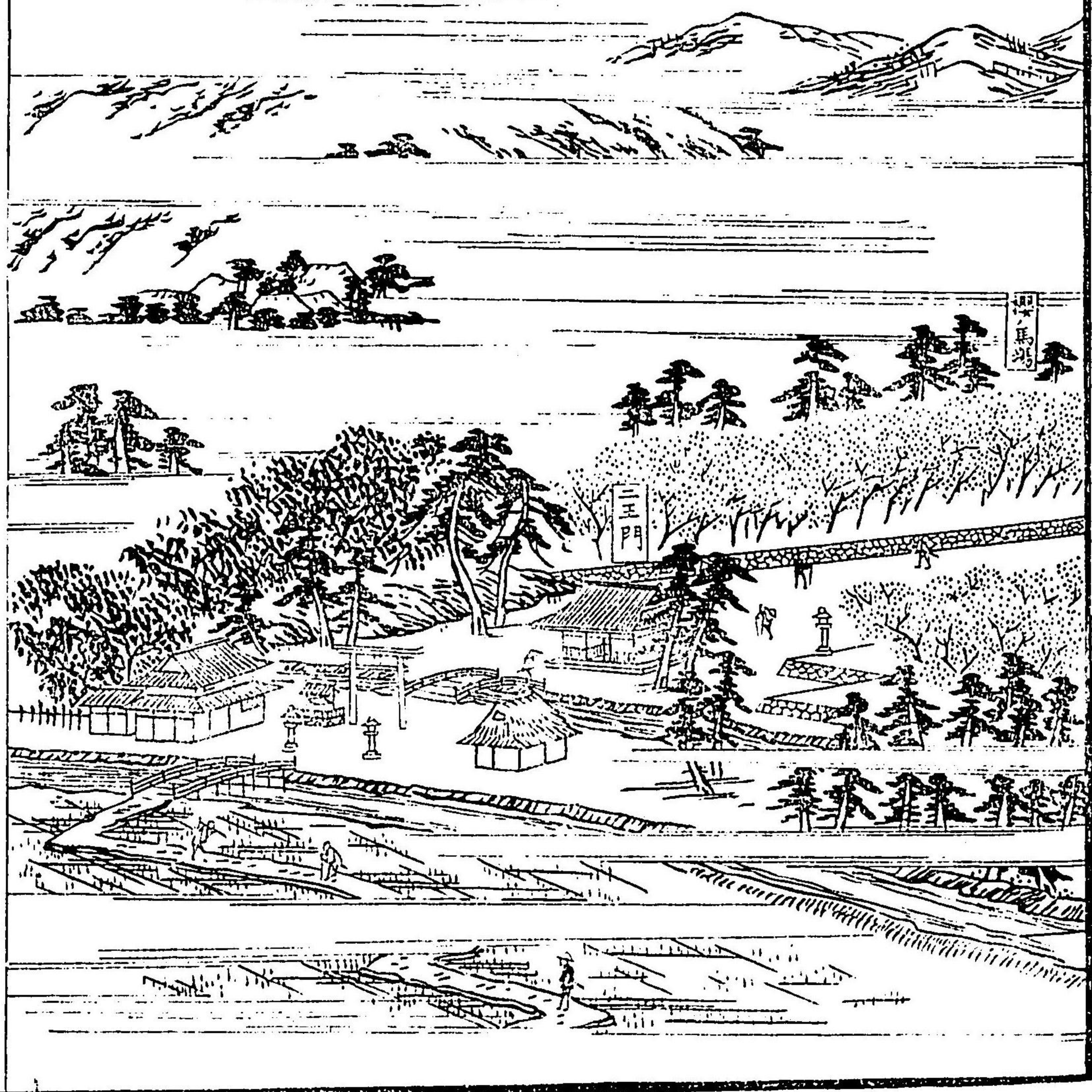


公左

操山君御妹君の玉詠
 當寺所藏

三原郡八幡村
 佐園ちの傍にて

清濁るくはらの
 ぼくの山寺に
 あつたてきく
 海の
 白



三五九

按、廳宣の檢非違使廳の宣旨あり留守所、國守在京、助祿ふと國司館、留守
國政と掌するのふあり一説二の宮は華極兩會より伊佐奈伎神社と一の宮といひ
二月十日より祭礼と法華會といひ大和社と二の宮といひ三月十日より祭礼と法華會
といひ蓋此兩會の事ありといひ又其應宣當寺より有るは仲野氏の按、云、八幡宮
伶人あり、國中の樂頭あり、二の宮の舞樂とも當社の伶人勤り、と云、其
料田と下されあり賀集山古文書の中ふ

淡路國諸寺諸山供養注文 加集供養 弓弦兼供養

千光寺供養 志筑天神供養 廣田金屋供養 安養寺供養

上田堂供養 飯山寺御堂供養 一宮每年一切經供養如是

二宮每年御會式如是 加集八幡宮每年一切經供養

右加集八幡宮樂頭ハ國中の樂頭にていと安國寺一切經供養の爲小別の伶人
と召され程小如形目安進上仕るとり此文を當寺廳宣のりて明に

又注文小一宮每年一切經供養と有り、則は華會のりて二宮每年御會式と有り、
又、一兩會のりて舞樂の法會行と有り

當社古圖一幅

本社根社拜殿舞殿樂屋長床護摩堂講堂食堂多宝塔筆所二王堂御供所
神宮寺僧坊十四區有り寺家凡池の坊如意坊北の坊周遍院地藏院中の坊
奥の坊金剛院ありと今廢して護國寺のりて存は境内礎石あり

往古ハ毎年一切經供養四季陀羅尼不斷經及び舞樂祭禮あり僧坊料田十四町

修理料八町樂料三十町齋料五町一切經料ありし事文明中の文書にあり

賀集山八幡宮縁起一軸 貞觀三年辛巳年冬とあり

十六善神畫像一幅 宋人画 五大尊畫像一幅 弘法大師筆

尊勝曼陀羅 一幅 左の上之文の書入有行教の筆上云

細川師氏寄附上指箭一筋 同太刀一振 何れも護國寺に所藏に

仲野翁云八幡宮ハ源義家より以來源家の尊重する所として鎌倉京鶴が岡

つゝ不効の天下諸國を慕ふ故に武家より守護職と置れ、物初加集郷

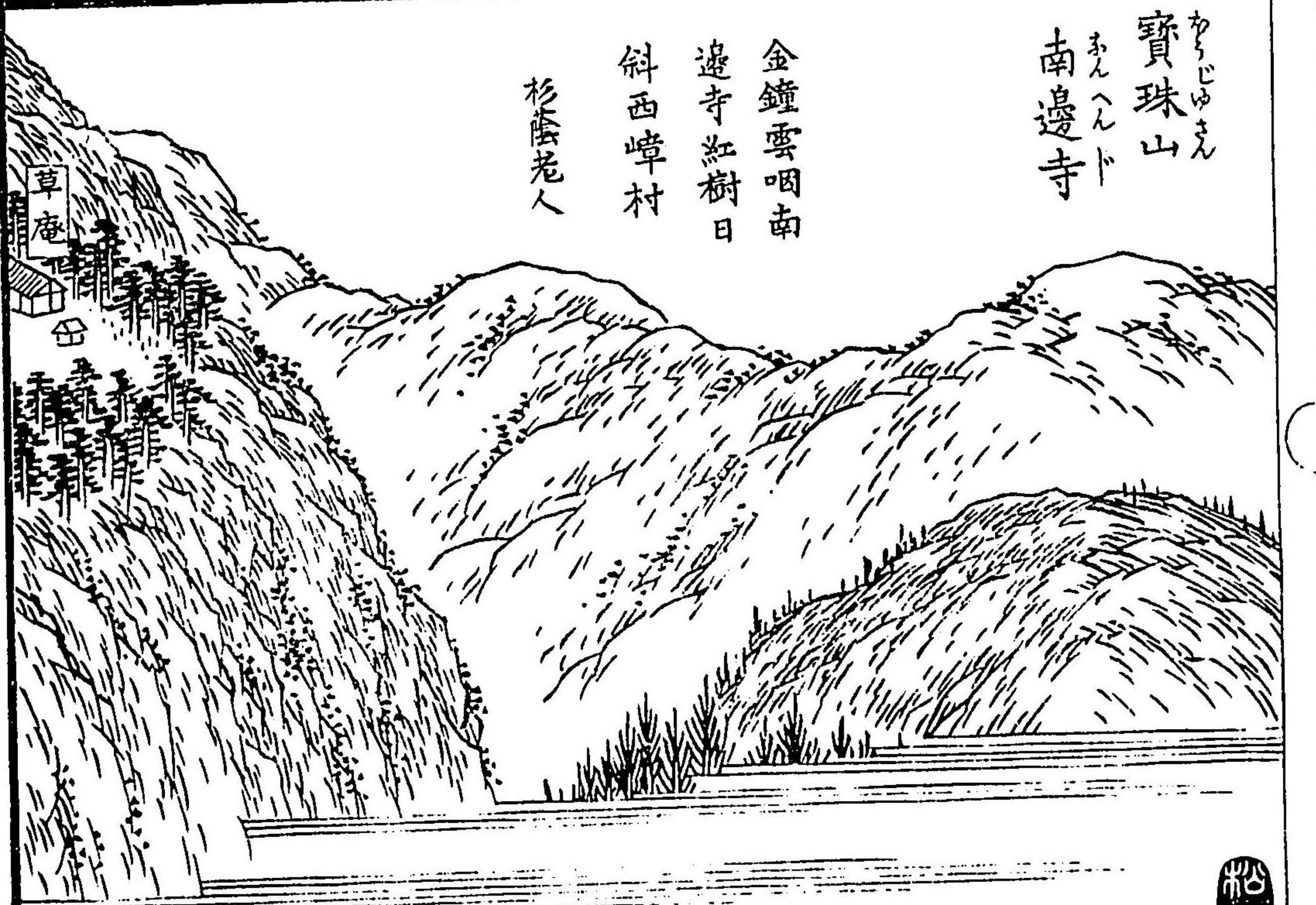
八幡社と營建せ、あつて養宜細川の屋形の代なり、殊に崇敬あり、と

見、これら當社の此國中不於て八幡宮と勸請し奉る始あり、其始ハ

此山の奥五町ぐり小宮造り、と曆應年間細川掃部助師氏當國不討入の時
當社不祈願し神前の鏑矢と申あり、矢合不勝利と得、是より宇原斎
入道が遺跡と寄附せられ當社と尊信する事斜あり、後社と今の地に移り

かじゆえん
寶珠山
おんへん
南邊寺

金鐘雲咽南
邊寺紅樹日
斜西嶂村
杉蔭老人



松山



三六十一



古堂
地神
木堂
荒神
入高谷
水大石
石地蔵
惣谷
家木谷
石神
山神
六地蔵松
幡司登九坂口

修理料僧坊料 樂料齋料等の田地と寄られ毎年神馬太刀等と献せらる事當山の

古記不見へり

又文明元年六月陣夫免除と請狀 是ハ毎月陣夫と出候こと迷惑一免されんこと預ふ状あり

嘉慶二年四季陀羅尼社僧番割之狀 應永十四年九輪と鑄る日 此時宝塔を建立

應永廿六年祭禮勤行造営之事無沙汰有べしと仰りしは氏守在判の書

同三十三年滿俊在判賀集山三箇條披書 滿俊ハ養宜の屋形第四世氏守ハ其長臣なり

文明二年護國寺詰番定書 一番野野高萩村寺方正井殿下総殿二番西山村 西田殿河田殿 三番法華寺村牛内村 久木殿 伯耆殿 土居殿 四番 銀治屋村 中村

西殿 粟井殿 北島殿 五番 忌部村 立河瀬村 賀集殿 六番 福良ト有

文龜元年十一所雨乞不御 形御出有之より 加集の衆徒へ言遣ひ春能の在判

の書簡のりり 細川尚春の時代 三好越後守長尚書簡 屋形 癸絶の以後なり

又名家の寄進狀許多り左記に

應永四年 加集庄 高階親忠 同年 中村氏成

同六年 地頭方 領家方 粟井太良左衛門入道 本方 肥田彌三郎政俊 藤原親氏 近藤孫四郎

同七年 地頭 政氏 同年 南條春時 同七年 平平四郎

同十八年 近藤治良左衛門入道 淨灯

長祿二年 加集美濃守公文 粟井千若丸 近藤助四郎 秀吉 福良藏人 太夫政貴

久米四郎左衛門入道道環 吉川民部丞 経信 海老名加賀入道道昌

帶刀先生親経 左辺太夫將監親量 兵部太夫道隆

同廿九年 久米四郎右衛門尉家守 文正元年 福良勘解由左衛門政幸

文明三年 賀集美濃守 高陞安親 按ふ 應永以下 將軍義教 義政 政保の時代之 又名と花押と記せ 鬼簿の如き古物有り 未詳畧之

又馬太刀目録 御屋形 并少輔殿 上田殿 西殿 谷殿 向殿 廣田 犬法師 九ト有

尚此余古文書許多り事げられ畧之

古城趾 同村より往還の西にて字を佐々木土居と云 周廻は壕の趾又ハ門の跡あり

南邊寺 同所の西の山の巖より 則ち西山南村といふ 宝珠山と号し

世俗八幡の奥院といふ寺ハ廢し 僅小草堂鐘堂茶所小祠等あり 今

山の名と南邊寺と称し

地藏堂

本尊長凡二尺八寸許越智恭澄の作と云ふ其跡殊々

地神祠

同左傍

荒神祠

同右の傍ニ鐘堂あり

茶所

地藏堂の北

當山小登了坂路兩道あり一方の山の禁石神社あり所より登ると十町許

左右並樹の松あり此坂路と末木谷とのふ又七町許のやうく八幡より登ると

坂道と合對ひ夫より乾方三町余あり境地ふゆる例年正月廿四日牛王と

摺り詣人より入耕民これと受得り田圃亦五豊饒を禱り又六月二十四日

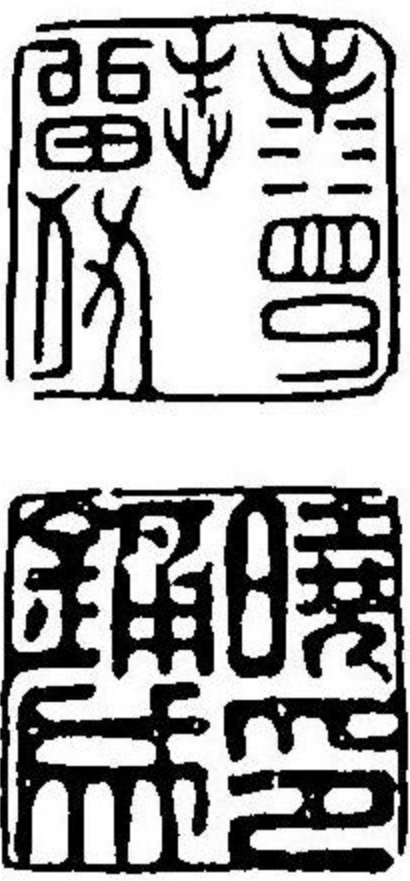
大會あり何れも八幡護國寺よりこれと修行はと聞ゆ

古堂跡

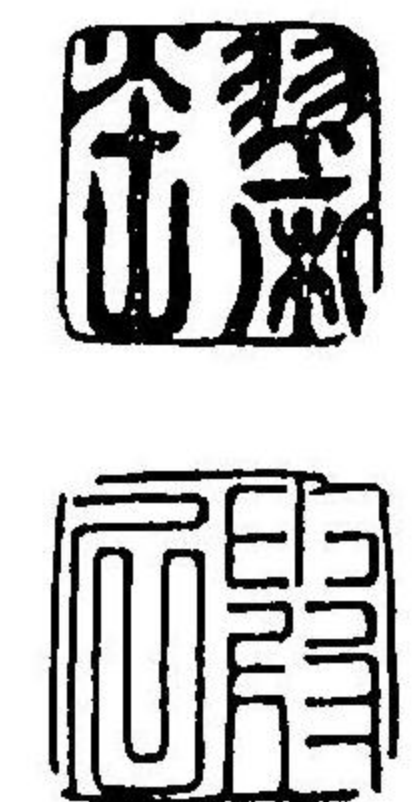
地藏堂より町許西の絶頂に古松の大樹ありこれと荒神松といふ是より西平地の方三十町余の所あり是則旧本堂あり此所より四方の眺望絶景あり

淡路國名所圖會三之卷終

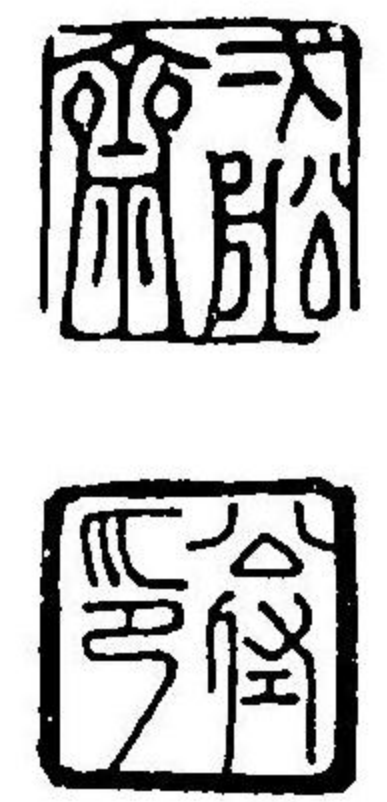
編者 浪華 曉 鐘 成



松川 半山

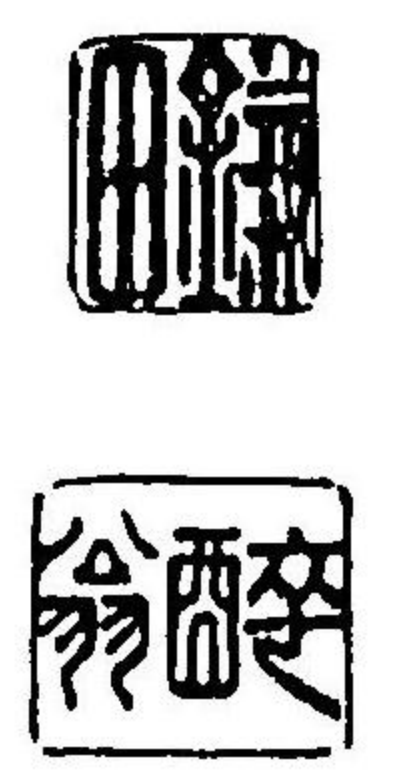


浦川 公佐



畫師 仝

筆耕者 鎌田 醉翁



雕刻者 青山 富三郎



明治廿七年一月十五日印刷
全 年一月廿五日發行

著作者

木村彌四郎

故人

右相續者

木村友松

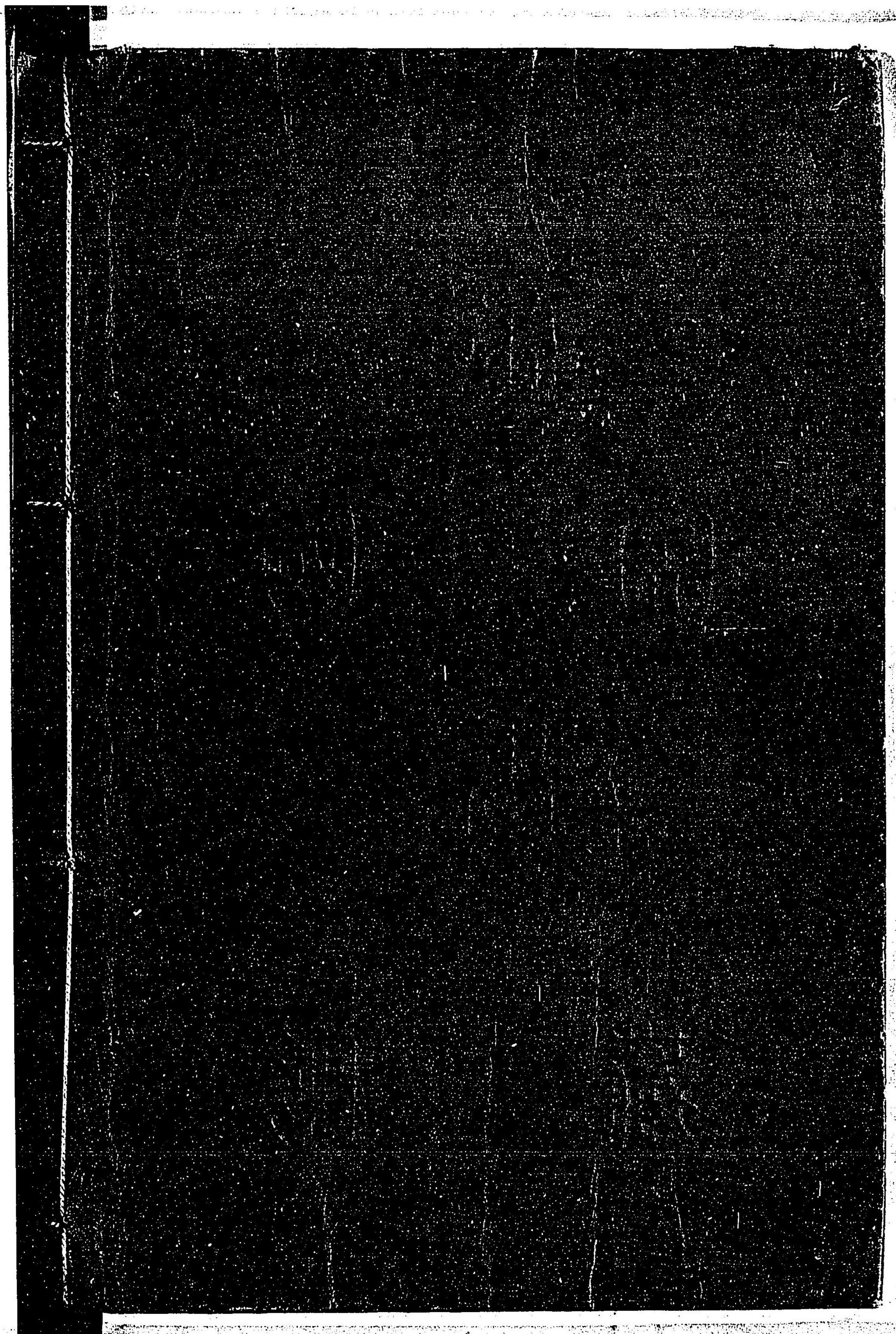
大坂市西區土佐堀通五丁目三十三番屋敷

發行兼
印刷者

福浦文蔵

兵庫縣淡路國津名郡洲本町外通百番地

10
5
19



19
15
19

淡路國名所圖繪
三